

羽曳野市 西浦・古市所在

# 西浦東遺跡

－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書－

2002年3月

(財)大阪府文化財調査研究センター



# 序 文

西浦東遺跡は大阪府東南部、羽曳野市の南端部に位置している。南河内地域を北流する石川左岸の平野部にあたる遺跡の中心からは、二上山の秀麗な姿を望むことができる。当遺跡については、1998～2001年の4年にわたり、(財)大阪府文化財調査研究センターが南阪奈道路建設にともなう継続調査を行ってきた。そして、今回、その成果を収めた本書の刊行を迎えることができた。

当遺跡は、古墳時代初頭の集落遺跡である尺度遺跡に東接し、当初は同時期の遺構の広がり期待された。実際、南阪奈道路建設に先立つ当遺跡西部の発掘調査では、弥生～古墳時代や古代の遺構・遺物を検出することができた。同時に、さらに広範囲に行った確認調査では、遺跡東部に縄文時代後期の遺構・遺物が分布することが判明した。この範囲における本格的な発掘調査では、縄文後期土器・石器や祭祀具と考えられる石棒などが出土した。また、炉跡などの調理施設も検出され、当地に縄文時代における人々の生活の場があったことが明らかとなった。

石川流域における縄文時代遺跡の動態には不明な点が多い。今回の調査成果は、その時代の生活施設を検出できた点で重要ではないか。また、石川の氾濫原という低湿地領域にこのような生活痕跡が見つかることは、今後の縄文時代遺跡の立地を考える上で参考になるのではないか。遺跡西部で検出された弥生・古墳時代や古代の遺構群の実態とともに、これらの調査成果を収めた本書が、この地域における過去の人々の営みを詳らかにする助けとなれば幸いである。

最後に、発掘調査および報告書作成事業の実施にあたり、多大なご協力を頂いた大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局、羽曳野市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターへの支援を賜るよう切に希望する。

2002年3月29日

(財)大阪府文化財調査研究センター  
理事長 水野 正 好

## 例 言

1. 本書は、南版奈道路の建設工事に伴って調査を行った、西浦東遺跡の発掘調査報告書である。西浦東遺跡は羽曳野市西浦・古市に所在する。
2. 発掘調査および遺物整理・報告書作成事業は、大阪府教育委員会の指導の下に国土交通省近畿地方整備局大阪国道工事事務所の委託を受けて、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 現地での調査は、4 ヶ年にわたり4度行われた。尺度・西浦地区確認調査を1998年1月13日～3月25日、西浦東遺跡発掘調査を1998年11月13日～1999年2月26日、西浦東遺跡確認調査を2000年4月18日～11月24日、西浦東遺跡（その2）発掘調査を2001年3月30日～10月19日に行った。遺物整理・報告書作成事業は2001年11月1日～2002年3月29日に行った。発掘調査や整理作業の実施にあたっては、南部調査事務所長瀬川健、同事務所調査第3係長寺川史郎の指示の下、同係技師仁木昭夫・井上智博・木嶋崇晴・山本美野里・若林邦彦、専門調査員仲原知之・中村ますみが担当した。出土遺物の写真撮影は、同事務所調査第1係主任技師立花正治が担当した。
4. 発掘調査出土品のうち、数点の木質遺物については、古環境研究所に放射性炭素年代測定分析を委託し、その成果を本書に掲載した。
5. 発掘調査および報告書作成作業の過程で次の方々をはじめとする諸氏・諸機関にご協力・ご教授を賜った。記して感謝の意を表する。（所属名五十音順）

大野薫（大阪府教育委員会）、千葉 豊（京都大学埋蔵文化財センター）、小林青樹（國學院栃木短期大学）、矢野健一（辰馬考古資料館）、岡田憲一（奈良大学大学院）、大塚達朗（南山大学）、伊藤聖浩・井原稔・笠井敏光・河内一浩・高野学・武村英治・森田和伸・吉沢則男（羽曳野市教育委員会）
6. 本書の編集は、木嶋と若林が行い、執筆担当については目次に示した。
7. 現地調査および遺物整理・報告書作成作業には、下記の非常勤職員の協力を得た。

秋山敦子・市原香奈・川田嘉代子・杉村裕美・田中映子・中澤真由美・中筋英子・中村慎子・山口純枝

## 凡 例

1. 挿図の縮尺は不同であり、各図版タイトル・スケールに表示している。遺構配置図は1/100、各遺構の平・断面図は1/40、各遺物の実測図は、土器では1/4・1/3、石器では2/3を基本としている。
2. 遺構平面図・断面図の標高は、東京湾平均海面を基準とした数値（T.P.）で表記している。
3. 平面図は、国土座標系、第VI座標系に準拠し、座標数値の記載はメートル単位で表す。なお、方位矢印の示す方向は座標北を示す。
4. 土色の表現に関しては、小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』第8版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修・日本色研事業株式会社発行に準拠した。
5. 各遺構の名称は、遺構の種類を問わずに通し番号を付している。したがって、遺構名中の数値は、数字表現に関する遺構種類（溝・柱穴・土坑）とは無関係である。また、この結果遺構名中の番号が重複することはない。
6. 挿図中の遺物番号は、各図ごとに1から順に付している。また、文中での各遺物は、挿図番号－遺物番号（例えば図4.2の1であれば、4.2-1）といったスタイルで表示している。

# 目次

## 西浦東遺跡

南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書

序文

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1	寺川
第2章 位置と環境	3	若林
第3章 発掘調査の方法	5	若林
第4章 確認調査の概要と基本層序	7	若林
第5章 98-1調査区の成果	11	若林
第6章 01-1～5調査区の成果	17	木嶋・若林
第7章 基礎分析		
第1節 01-1～5調査区出土遺物の分布について	55	木嶋
第2節 出土自然木・炭化物の <sup>14</sup> C年代測定分析	63	古環境研究所・木嶋
第8章 調査成果のまとめ	66	木嶋・若林

## 挿図目次

図1.1	南阪奈道路と調査地(1/50000)	1
図1.2	西浦東遺跡における各調査地点(1/5000)	2
図2.1	周辺遺跡分布図(1/25000)	4
図3.1	国土座標系とそれに基づく地区割	6
図3.2	西浦東遺跡地区割(第Ⅲ・Ⅳ区画)	6
図4.1	00-2調査区出土縄文土器	7
図4.2	基本層序模式図(1)	8
図4.3	基本層序模式図(2)	9
図5.1	98-1調査区土層断面図	11
図5.2	98-1調査区弥生～古墳時代遺構配置図	13
図5.3	98-1調査区古代以後遺構配置図	14
図5.4	98-1調査区遺構出土土器(1/4)	15
図5.5	98-1調査区包含層出土土器(1/4)	16
図6.1	01-1～5調査区北壁土層断面図	19
図6.2	01-1調査区⑦層上面平面図(1/100)	20
図6.3	01-1調査区⑧層上面平面図(1/100)	21
図6.4	01-2調査区炉跡01-139平・断面図(1/40)	22
図6.5	01-2調査区⑦層上面平面図(1/100)	23
図6.6	01-2調査区⑧層上面平面図(1/100)	24
図6.7	01-2調査区炉跡01-53平・断面図(1/40)	25
図6.8	01-3調査区⑦層上面平面図(1/100)	26
図6.9	01-3調査区⑧層上面平面図(1/100)	27
図6.10	01-4調査区⑦層上面平面図(1/100)	29
図6.11	01-4調査区⑧層上面平面図(1/100)	30
図6.12	01-4調査区各遺構平・断面図(1/40)	31
図6.13	01-5調査区⑧層上面平面図(1/100)	33
図6.14	01-1～5調査区各遺構出土土器(1/3)	39
図6.15	01-4調査区炉跡01-6出土土製品(2/3)	40
図6.16	01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土土器(1/3)	41
図6.17	01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土土器(1/3)	42
図6.18	01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土土器(1/3)	43
図6.19	01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土石器(2/3)	45
図6.20	01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土石器(2/3)	46
図6.21	01-1～5調査区出土サカト石核(2/3)	47
図6.22	01-1～5調査区出土サカト石核・剥片(2/3)	48
図6.23	01-1～5調査区出土サカト剥片(2/3)	49
図6.24	01-1～5調査区出土サカト剥片(2/3)	50
図6.25	01-1～5調査区出土サカト剥片(2/3)	51
図6.26	01-1～5調査区出土サカト剥片(2/3)	52
図6.27	01-1～5調査区出土礫石器(2/3)	53

図6.28	01-1～5調査区出土礫石器(2/3)	54
図7.1	01-1調査区遺物出土率分布図	57
図7.2	01-2調査区遺物出土率分布図	58
図7.3	01-3調査区遺物出土率分布図	59
図7.4	01-4調査区遺物出土率分布図	60
図7.5	01-5調査区遺物出土率分布図	61
図7.6	調査区別遺物出土率分布図	62

## 表目次

表5.1	98-1調査区検出遺構	12
表6.1	01-1～5調査区検出遺構	34～35

## 写真図版目次

写真図版1	98-1調査区北半部の遺構群(南西から) 98-1調査区北半部の遺構群(西から)
写真図版2	98-1調査区南半部の遺構群(南西から) 98-1調査区南半部遺構群(北西から)
写真図版3	98-1調査区柱穴98-8土器出土状況(南から) 98-1調査区柱穴98-8土器出土状況(上から)
写真図版4	01-1調査区⑧層上面の遺構群(北から) 01-5調査区⑧層上面の遺構群(北から)
写真図版5	01-2調査区⑧層上面の遺構群(西から) 01-2調査区⑧層上面の遺構群(東から)
写真図版6	01-3調査区⑧層上面の遺構群(北から) 01-3調査区炉跡01-53(北から)
写真図版7	01-4調査区⑦層上面の遺構群(東から) 01-4調査区⑧層上面の遺構群(北から)
写真図版8	01-4調査区炉跡01-6(東から) 01-4調査区炉跡01-6中心部(西から)
写真図版9	01-4調査区炉跡01-13・14(西から) 01-4調査区炉跡01-13・14(南から)
写真図版10	98-1・00-2・01-1～5調査区出土土器
写真図版11	01-1～5調査区出土縄文後期土器
写真図版12	01-1～5調査区出土縄文後期土器・石棒
写真図版13	01-1～5調査区出土サカト製石器
写真図版14	01-1～5調査区出土サカト製石器
写真図版15	01-1～5調査区出土サカト石核・剥片・礫石器

# 第1章 調査に至る経緯と経過

南河内地域では交通の混雑が慢性化し、社会生活にも支障をきたす状況となっている。当地域ではこのような現状のもとで府県境における幹線道路の交通緩和のため、東西方向の幹線道路として南阪奈道路が計画された。(図1.1)

この道路建設予定地には多くの遺跡・散布地が知られており、道路建設に先立ち下記の確認調査を実施した。尺度・西浦地区確認調査として1998(平成10)年1月から3月に国道170号線(外環状線)から旧170号線までで20ヶ所(1,100㎡)、西浦地区確認調査として旧170号線から石川間で25ヶ所(850㎡)、西浦東確認調査で旧170号線から、西浦地区確認調査時に未調査部分にかけて2000(平成12)年4月から11月に7ヶ所(570㎡)の調査をそれぞれ実施した。

上記の確認調査の結果、大阪府教育委員会から本調査の必要ありとの判断が下され、国道170号線から近鉄河内長野線間で西側を尺度(国1)として1998(平成10)年10月から1999年(平成11)年3月に約2,600㎡、東側を尺度(国2)として1999(平成11)年4月から2000(平成12)年2月にかけて約10,000㎡の調査を実施した。近鉄河内長野線から旧国道170号線間で西浦東遺跡として1998(平成10)年10月から1999(平成11)年2月まで約2,900㎡、旧国道170号線から石川間で西浦東(その2)として2001(平成13)年3月から10月に約1,500㎡の発掘調査を実施した。(図1.2)

なお遺跡名称は試掘調査を行った1998(平成10)年時点では、国道170号線から近鉄河内長野線間は「尺度地区散布地」、近鉄河内長野線から石川間は「西浦地区散布地」とされていた。上記の確認調査結果を受けて、1999(平成11)年3月発行の羽曳野市文化財分布図で尺度地区散布地は尺度遺跡に、西浦地区散布地は西浦東遺跡とそれぞれ改定されている。

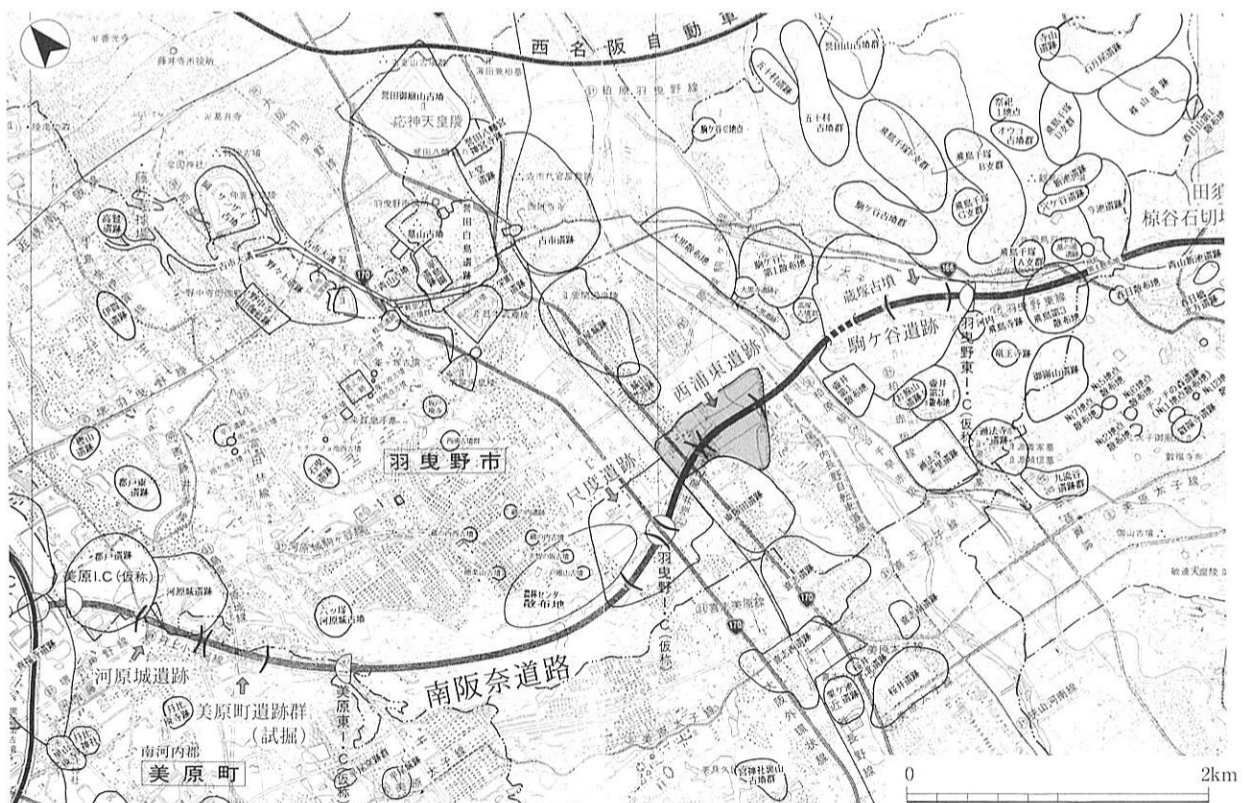


図1.1 南阪奈道路と調査地 (1/50000)

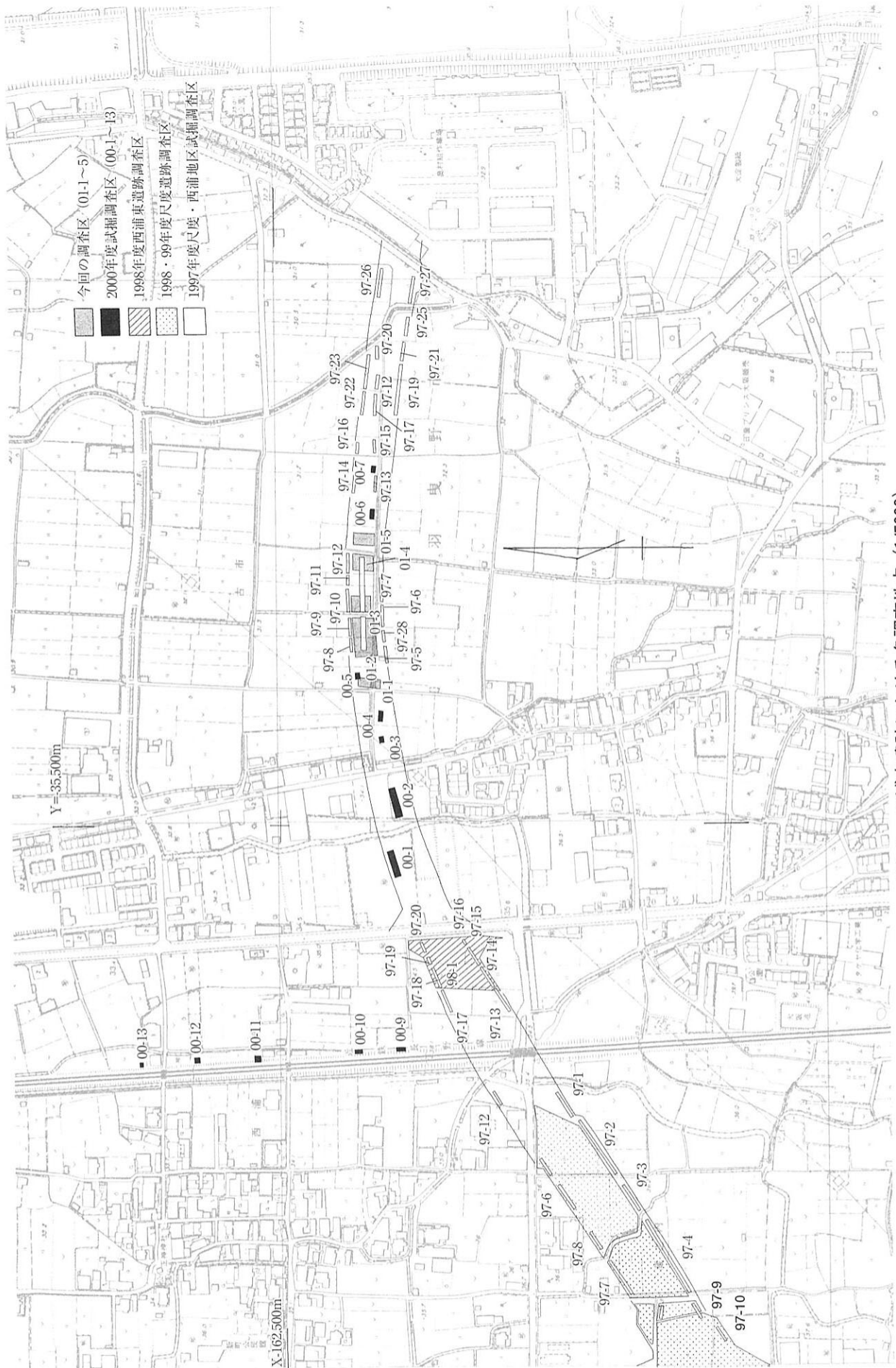


図1.2 西浦東遺跡における各調査地点 (1/5000)



## 第2章 位置と環境

### 【地理的環境】

西浦東遺跡は、石川北半流域の西岸に隣接する沖積地に位置する。石川に架かる大黒橋を東端とし、西端は近鉄南大阪線の領域が現在遺跡範囲とされている。全体としてみれば、遺跡範囲は石川の氾濫原中にあるのだが、その領域への沖積作用が石川によるものだけとは考えがたい。遺跡の北側には中世の高屋城の位置する段丘があり、南側の羽曳野市東阪田地区・富田林市喜志地区も中位段丘となっている。つまり、西浦東遺跡は南北の中位段丘に挟まれた凹みに位置することとなる。そのため、当遺跡の西半部は、西方向・もしくは南西方向からの沖積作用の及ぶ領域に相当する可能性が高い。この地形上の特徴を考慮すれば、当遺跡における人的活動についても、西に隣接する尺度遺跡や、南西に隣接する東阪田遺跡との関連を考慮する必要があるだろう。この問題については、調査成果との関連において本書の最終章においてふれてみたい。

### 【歴史的環境】

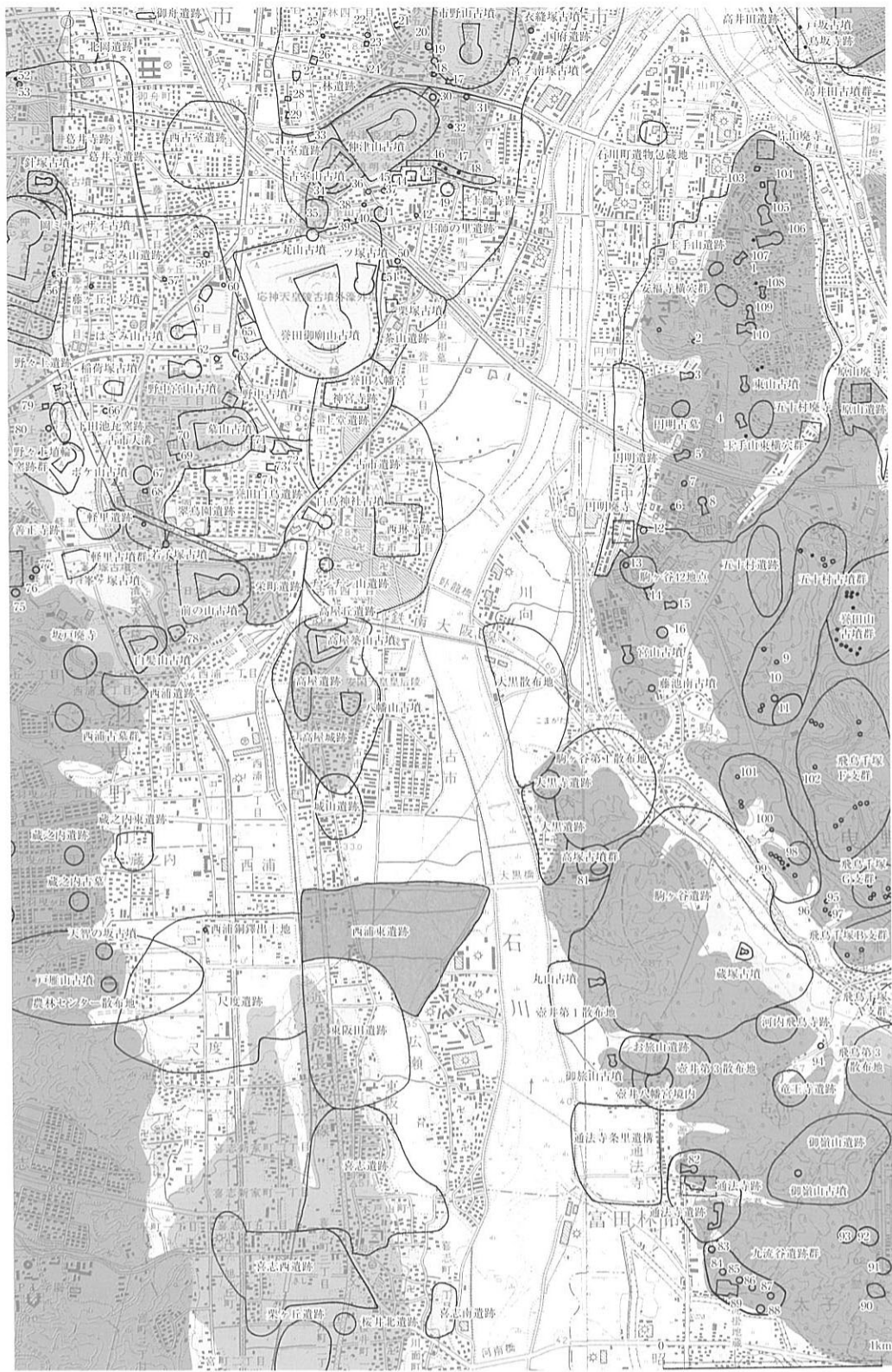
当遺跡の所在する石川下流域には、旧石器～近世にかけての多数の遺跡が分布する。しかし、地域によっては遺跡形成の中心時期が異なっている。つまり、地形やその時代の社会状況に左右されて、時期ごとに遺跡形成に地理的偏りが生じ、緩やかながら類似する時期の遺跡群が形成されている。西浦東遺跡の周囲では、諸遺跡を石川東岸地域・石川西岸北部・石川西岸南部という3つの群に分けて理解することができる。

石川東岸地域は、古墳時代前期から奈良時代にかけての遺跡が多数分布する。大黒丘陵上の駒ヶ谷遺跡には弥生後期後葉～庄内式期の竪穴住居群が検出されている。その後、古墳時代前期にはその他に集落は確認されていないが、石川に沿って分布する丸山古墳・御旅山古墳・通法寺裏山古墳という3つの前方後円墳は当該期の所産と考えられている。古墳時代中期には石川東岸には遺構・遺跡の形成は明確でない。古墳時代後期の遺構としては飛鳥川南岸の蔵塚古墳が挙げられ、周囲の駒ヶ谷遺跡では同時期の掘立柱建物群が検出されている。また、対岸の飛鳥川北岸の丘陵部には古墳時代後期後半から終末期にかけて形成された飛鳥千塚古墳群が確認されている。そして、奈良時代の遺構としては、駒ヶ谷遺跡で倉庫施設を伴う建物群が検出されている。

石川西岸北部では、中期～後期前葉を中心とした時期に形成された古市古墳群が著名である。誉田御廟山古墳を始めとする長軸100m以上規模の前方後円墳が多数分布している。飛鳥～奈良時代には、野中寺・西琳寺・善正寺などが、藤原京と難波宮を結ぶ官道として整備された丹比道沿いに形成されている。

石川西岸南部には縄文時代～弥生時代末期・古墳時代初頭の遺跡群が発達する。西浦東遺跡に南接する中位段丘上には、縄文時代後～晩期の遺物が出土する東阪田遺跡、弥生時代中期の集落である喜志・喜志西遺跡が分布する。また、西浦東遺跡に西接する尺度遺跡では、庄内式期の竪穴住居群と方形区画溝を伴った居館跡が検出されている。

このように、当遺跡の周囲では、石川西岸南部には古墳時代初頭以前の遺跡が発達し、古墳時代以後には石川西岸北部や石川東岸に遺跡数が増加する傾向がうかがわれる。特に当遺跡の主要時期である縄文時代後期には、それ以北の領域の遺跡動態はまったく確認されていない。今回の調査で、西浦東遺跡に縄文時代後期の遺構・遺物が確認されたことは、実態が不明であった、石川流域の縄文時代遺跡動態を考える上で重要といえよう。



- |            |           |            |             |               |              |               |            |
|------------|-----------|------------|-------------|---------------|--------------|---------------|------------|
| 1 粟ワカ山古墳   | 16 朝ヶ谷北古墳 | 31 御曹子塚古墳  | 46 土師の里1号墳  | 61 葦上山古墳      | 76 鬼ヶ池古墳     | 91 No.6地点散布地  | 106 勝負山古墳  |
| 2 西山古墳     | 17 唐塚古墳   | 32 遺跡古墳    | 47 土師の里2号墳  | 62 越中塚古墳      | 77 小口山古墳     | 92 No.5地点散布地  | 107 玉手山9号墳 |
| 3 怡太塚神社古墳  | 18 小具足塚古墳 | 33 賀田山鳥遺跡  | 48 土師の里塚輪廻群 | 63 茶臼塚古墳      | 78 小白梨山古墳    | 93 No.7地点散布地  | 108 玉手山5号墳 |
| 4 玉手山9号墳   | 19 長持山古墳  | 34 香取山古墳   | 49 塚穴古墳     | 64 アリ山古墳      | 79 大平山古墳     | 94 御塚古墳       | 109 玉手山6号墳 |
| 5 北玉山古墳    | 20 帯子塚古墳  | 35 大角塚古墳   | 50 栗橋古墳     | 65 栗山古墳       | 80 五手塚古墳     | 95 No.30地点古墳  | 110 後山古墳   |
| 6 玉手内堀2号墳  | 21 ヒバリ塚古墳 | 36 塚塚古墳    | 51 栗橋塚古墳    | 66 今井塚古墳      | 81 萬塚古墳      | 96 No.32地点古墳  |            |
| 7 玉手山1号墳   | 22 元塚古墳   | 37 土師の里8号墳 | 52 葛井寺2号墳   | 67 青山古墳       | 82 通法寺眞山古墳   | 97 No.33地点古墳  |            |
| 8 玉手山3号墳   | 23 藤敷中2号墳 | 38 土師の里9号墳 | 53 葛井寺1号墳   | 68 青山4号墳      | 83 九流谷C地点    | 98 No.35地点散布地 |            |
| 9 五十村9号墳   | 24 屋敷中1号墳 | 39 鎌倉塚古墳   | 54 矢倉古墳     | 69 西原山古墳      | 84 九流谷D地点    | 99 No.36地点古墳  |            |
| 10 駒ヶ谷37地点 | 25 吉池古墳   | 40 鎌倉塚古墳   | 55 駒古墳      | 70 浄元平山古墳     | 85 九流谷E地点    | 100 駒ヶ谷古墳群    |            |
| 11 夫谷古墳群   | 26 パ子塚古墳  | 41 塚塚古墳    | 56 駒塚古墳     | 71 向基山古墳      | 86 九流谷F地点    | 101 善徳塔山古墳    |            |
| 12 玉手山13号墳 | 27 沢田古墳   | 42 西清水古墳   | 57 サンド山2号墳  | 72 豊田白鳥塚輪廻群遺跡 | 87 寺山遺跡      | 102 鉢伏山西崎古墳   |            |
| 13 玉手山14号墳 | 28 次郎塚古墳  | 43 八島塚古墳   | 58 サンド山古墳   | 73 西馬塚古墳      | 88 吉田山遺跡     | 103 玉手山廣寺     |            |
| 14 古市東山古墳  | 29 次郎塚2号墳 | 44 中山塚古墳   | 59 葦所山古墳    | 74 白鳥1号墳      | 89 九流谷古墳     | 104 玉手山1号墳    |            |
| 15 猿塚古墳    | 30 銅塚古墳   | 45 助天山古墳   | 60 藤ノ森古墳    | 75 No.48地点古墳  | 90 No.2地点散布地 | 105 玉手山2号墳    |            |

図2.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

### 第3章 発掘調査の方法

西浦東遺跡の調査は、遺跡の略称を除いて基本的には当センターの前身の一つである（財）大阪文化財センターが制定した『遺跡調査基本マニュアル』（大阪文化財センター 1988『遺跡調査基本マニュアル』）に則って実施している。

**地区割** 地区割については、国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、1/10,000地形図の地区割図を利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。西浦東遺跡の今回の調査地は、第Ⅰ区画ではE-6、第Ⅱ区画では15の中に納まる。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第Ⅳ区画を面として細分する場合に使用する。第Ⅴ区画の名称については本来北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと呼称するのが当センターの通例であるが、今回の調査では現場作業の段階で異なる名称を用いてしまった。北東区画が1、南東区画が2、南西区画が3、北西区画が4である。作業データを通例の呼称にすべて変換する煩雑さやその作業によるミスを防ぐため、今回は通例と異なる第Ⅴ区画名称を用いることとする。つまり、第Ⅲ区画以下は、A1（第Ⅲ区画）a1（第Ⅳ区画）-1（第Ⅴ区画）というように表示される。今回の調査では、包含層などの遺物取り上げの際に01-1～5調査区では第Ⅴ区画までを、それ以外では第Ⅳ区画までを使用し、遺物取り上げラベルにF20i5やF1h4～h5のように地区を記入している。なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している。

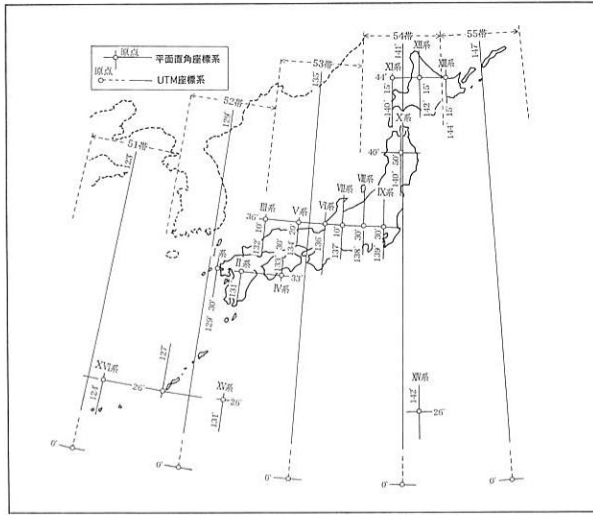
**方位** 方位は座標北を使用している。これは地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。ちなみに他の方位との関係は、真北が東へ0°12′、磁北が西へ6°40′振っている。

**水準** 水準は全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.）を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾最低潮位（O.P.）も併用され、両者のレベル差は $T.P. \pm 0 \text{ m} = O.P. + 1.3 \text{ m}$ と定められている。

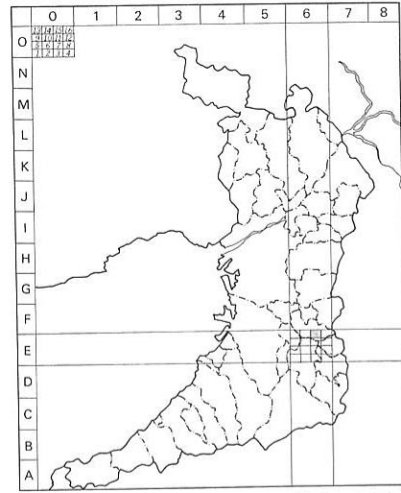
**測量** ヘリコプター・クレーン車を用いた空中写真測量を行い、1/50平面図とそれを縮小編集した1/100遺構全体図を作成している。その他、状況にあわせて適宜、実測図を作成している。

**調査区** 当センターによる西浦東遺跡の調査は試掘調査を含めると4ヵ年にも及ぶ。そこで、調査区名は、年度毎に1から順に数字で呼称している。その配置は図3.1のとおりである。

**遺構番号** 遺構番号については、調査・整理段階の混乱を避けるため遺構の種別に関わらず、調査段階では通し番号をつけている。その後整理段階で遺構名を番号の前に付して、溝1や柱穴10というように呼び表し、この数字は必ずしも同一種別ごとの遺構数を示していない。ただし、当遺跡では、年度ごとに1から順に通し番号で遺構名を設定しているため、同一遺構番号が生じてしまう。そこで、本書では、遺構の種類後に調査年度（下2桁）-遺構番号をつける型式、つまり、「溝01-1」という方法で各遺構名を表現する。



国土座標系図



第I・II区画

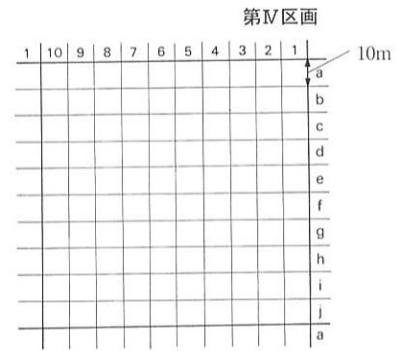
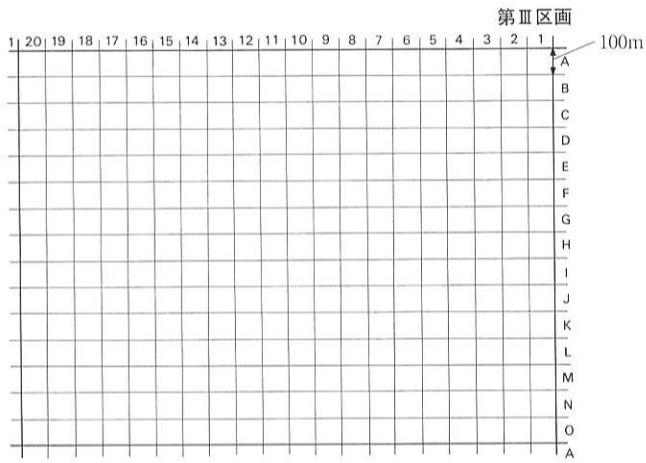


図3.1 国土座標系とそれに基づく地区割

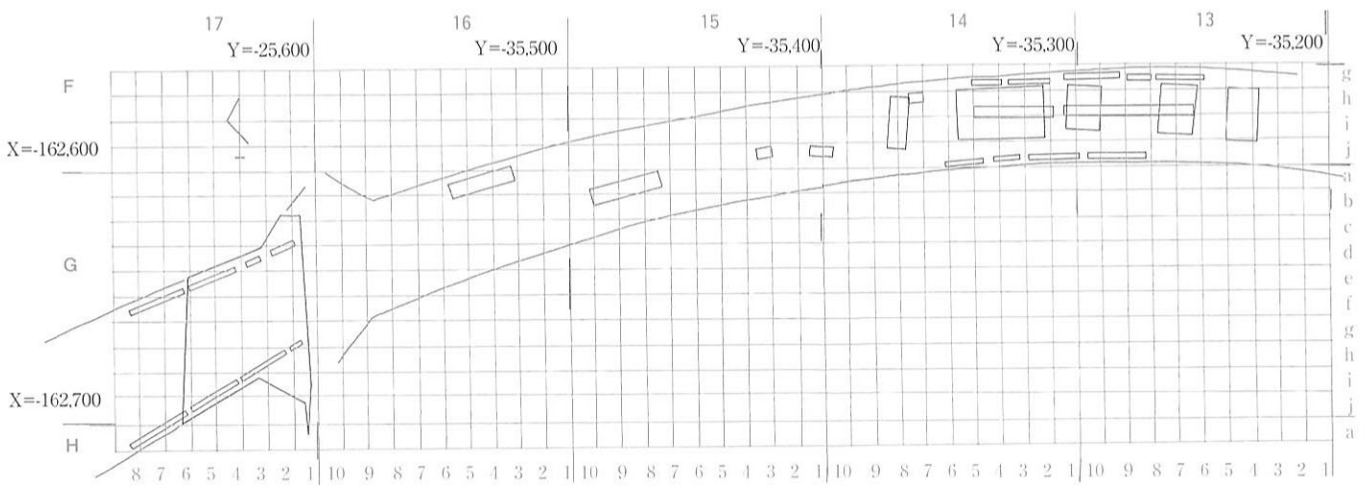


図3.2 西浦東遺跡地区割 (第III・IV区画)

## 第4章 確認調査の概要と基本層序

### 【確認調査の概要】

前章で述べたように、西浦東遺跡の発掘調査では、2度の本調査に先立って範囲確認調査を実施した。1998年と2000年に行ったこの確認調査では、遺跡を東西方向に横切る形で小規模なトレンチ調査を多数行った。本調査が行われた98-1調査区や01-1～5調査区で確認された土層堆積状況は、これら範囲確認調査の層序と基本的に変化なかった。よって、本遺跡全体の基本層序や、各時代の遺物包含層・遺構形成領域を知るには、確認調査と本調査成果の双方を参照することが最良の方法といえる。これら南阪奈道路建設にともなう確認調査・本調査の結果、遺跡における土層堆積・地形環境は遺跡西部・中央部・東部の3領域でそれぞれ異なることがわかった。

旧国道170号線以西の範囲、つまり遺跡西部の土層堆積・地形環境は、尺度・西浦地区97-17,18,19・西浦東遺跡98-1調査区の層序から読み取ることができる。西浦東98-1調査区では、T.P.31.7～31.8mに縄文後期土器を含む暗色化した土層が確認されている。その上部には、1.5m前後の厚さでシルト～粗砂質土が堆積している。おそらく、西方向あるいは南西方向からの流水堆積作用によるものだろう。実際に、南西-北東方向の流路が確認されている。その上面のT.P.33.4～33.6 mの高さには厚さ10cm程度の暗色土層が形成され、弥生時代中期土器が包含されていた。その直上には厚さ5～10cm程度にわたり、古墳時代中～後期土器を含む暗色土層が、さらにその直上には厚さ20～30cm程度の古代～中世土器包含層が形成されている。

98-1調査区の本調査においてそれぞれの層理境界面で広範囲での遺構検出を行ったところ、各時代の溝・土坑類が僅少なながら検出されている。各遺物包含層が暗色化していることから、この時期には西浦東遺跡西部には流水堆積作用があまり及ばず、それ以前に堆積した土層の上面が長く地表状態にあったと想定される。ただ、居住域というにはあまりにも遺構密度が低く、建物痕跡も不明瞭である。西側に隣接する尺度遺跡では諸時期の居住遺構や水田が検出されており、98-1調査区での検出遺構は、そういった人的活動領域の縁辺として当遺跡の一部が機能していた可能性を示している。

遺跡中央部の状況は、西部とは異なっている。00-2調査区の確認調査で検出された縄文後期土器包含層は、T.P.30m付近という98-1調査区に比べて著しく低い位置にある。この層からは、図4.2に示す有文の北白川上層式に相当する深鉢が出土した。その直上約2mはすべて細粒砂～粗粒砂層で、その層理方向から流路内堆積物と考えられ、上面の凹みのシルト～粘土層には古墳時代後期の遺物が含まれている。つまり、縄文時代後期以後当遺跡中央部には、継続的に河川が形成されていたと考えられる。

この河川跡は、検出された平面形態や流路内堆積層理の傾斜方向からみると、南→北方向の流路であり、遺跡西部に同時期に形成された河川とは異なる経路を辿っていたと考えられる。おそらく、東阪田地区の低～中位段丘からの水流により土砂堆積が進行したと考えられる。この流路層上部の古墳時代後期暗色土層の直上には、古代～中世の土器を含む耕作土が10～20cm程度堆積している。

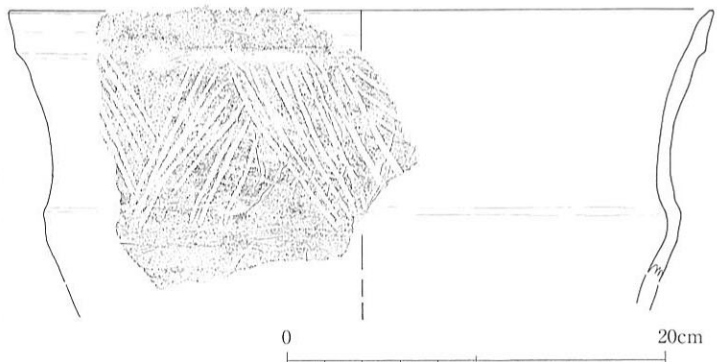


図4.1 00-2調査区出土縄文土器

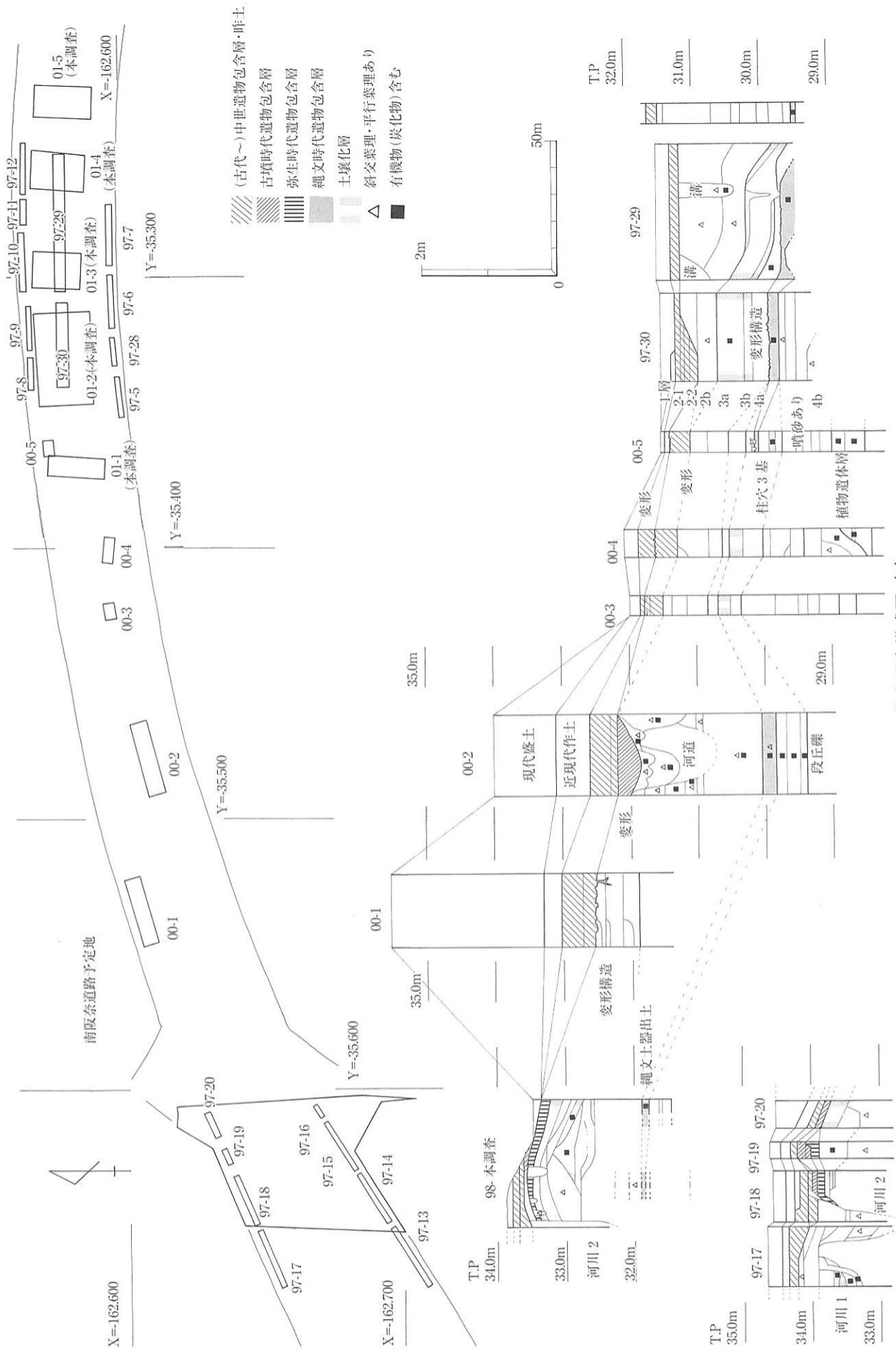


图4.2 基本層序模式图 (1)

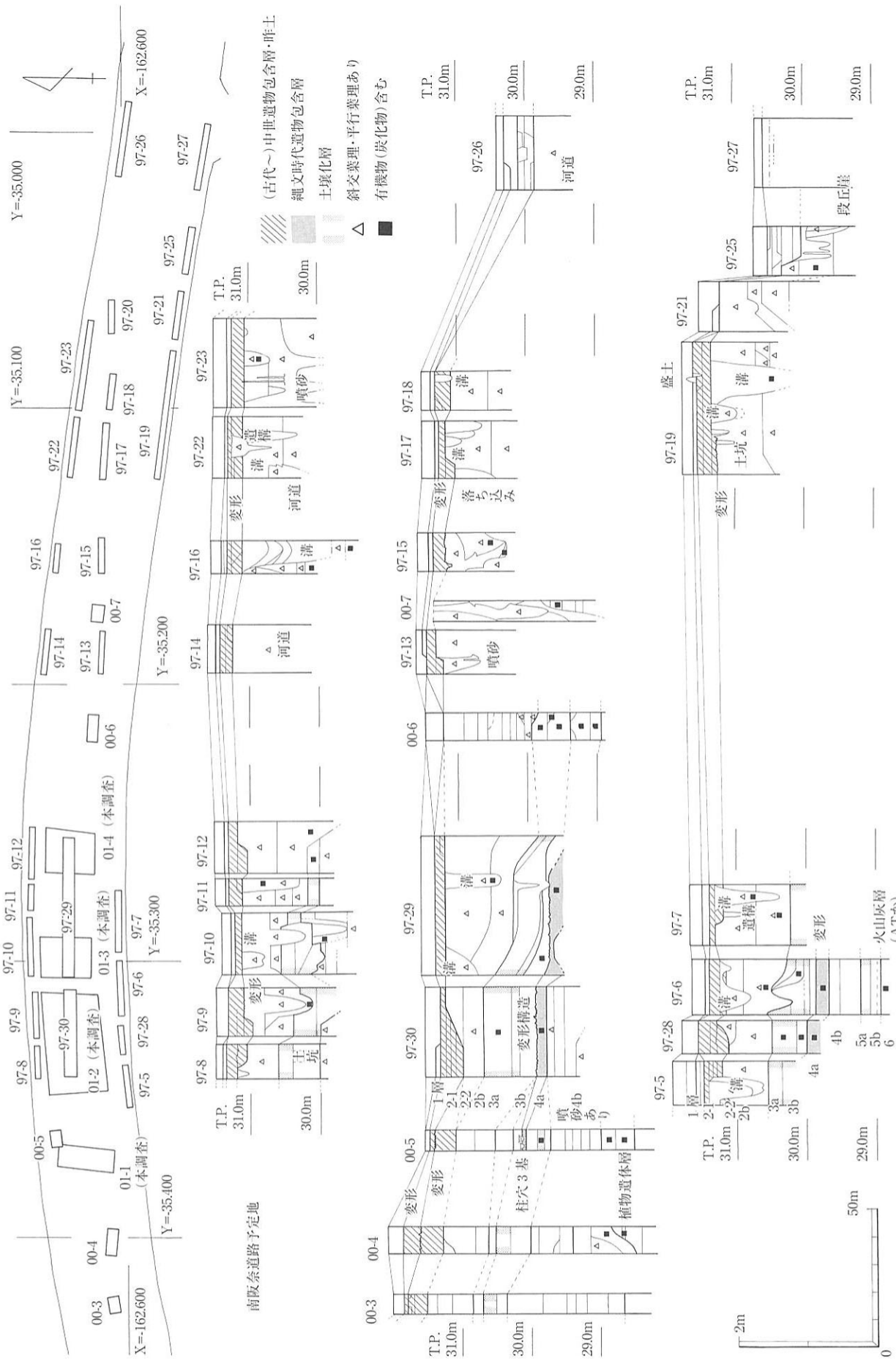


図4.3 基本層序模式図(2)

遺跡東部の状況は、97-29,30調査区の層序が、本調査に取り掛かる上で大いに参考となった。いずれの調査区でもT.P.30～29.7m付近に、縄文時代後期（北白川上層式）土器を含む厚さ10～20cm程度の暗褐色シルト質土層が形成され、確認調査の段階で文化層の可能性が指摘された。実際に、当層は01-1～5調査区で⑦層と呼んだこの層中には、当該期の土器片とともに炉痕跡と考えられる炭化物集積が複数の地点で確認できた。また、⑦層からは調査区によっては多くのサヌカイト剥片・石核・石器が出土した。すなわち、確認調査で予測された通りに、⑦層を中心に居住を伴う人的活動が確認された。後述するように、01-4調査区を中心とした西浦東遺跡東部の領域では、遺構・遺物の分布から石器製作・祭祀行為などが行われていた状況が想定される。この縄文後期層は01-5調査区より東側の領域では確認できず、対応層位には00-7調査区に代表されるように流路内堆積物と思われる粗砂層が形成されている。つまり、遺跡最東端は、縄文時代後期においては旧石川流路帯の中心に相当していたと考えられる。

縄文時代後期層の直上から約120～150cmには、極細粒砂が堆積し、明確な人的活動の痕跡は希薄である。ただ、最上層の近世～現代の耕土中には多量の古代～中世の須恵器・土師器片が含まれている。遺跡東部領域にも、古代～中世の遺構形成がなされた可能性は否定できない。また、縄文時代後期以後、この領域では旧石川流路帯による沖積作用が進行し、古代までの間には、現在と同様の地形が形成されていた可能性が高い。

#### 【人的活動地点と地形変化】

西浦東遺跡の確認調査・本調査において検出された人的活動の痕跡は、大きく2時期に分けることができる。一つは、古代～中世のもので、遺物包含層としてはほぼ遺跡全域にみとめられる。包含層の多くは近世以後の耕土となっているために、遺構が明確に確認されたのは98-1調査区に限られている。しかし、その遺物の分布から、細かく時期を変えながら集落あるいは耕作地として古代以後連綿と当遺跡の領域には人的活動が継続していたと考えられる。そのことは、先述の基本層序のあり方とも関連している。遺跡全体が沖積地に位置するにもかかわらず、古代以後の土器を含む層はいずれも地表面直下から10～20cmにあり、古代以後の地形変化がほとんどなかったことが想定される。そのため、その時々微妙な地形変化や耕作能力の差異はあるにしても、古代・中世と近現代の間に概ね同様な土地利用の状況が続いていたと類推できる。98-1調査区は、東方丘陵裾の扇状地の末端部分。00-1・2調査区は東阪田地区の段丘から流れる旧大乘川の堆積作用により形成される小規模な南北方向の微高地、00-3～5,97-5～12,01-1～5は旧石川本流の脇に展開する中小流路帯、という地形環境に変化は古代～現代まで変わらない。

しかし、それ以前の状況は大きく異なっている。最も古相の土器包含層である縄文後期～晩期土器の出土水準は遺跡西部から中央部ですでに2m近い比高差があり、遺跡中央部・東部では平坦な状況が続いている。つまり、縄文後期においては、中央部分には南側からの堆積作用は顕著ではない。当該期には、98-1付近は扇状性低地としてやや高めの位置にあるが、それ以東はすべて旧石川に並行する中小流路帯に位置する可能性が高い。つまり、旧石川流路帯は現在より幅広く、当遺跡の大半はその中にあったと考えられる。後述するような、縄文時代後期（北白川上層式）の人的活動はそういった低湿な環境で展開されたと考えられる。



## 第5章 98-1調査区の遺構・遺物

### 【遺構検出面】

98-1調査区では、先述のように3層の土器包含層（図5.1中の1・2・3層）が確認された。耕土直下に厚さ10～20cm程度形成された1層には主に古代～中世土器が、その直下に厚さ5～10cm程度形成された2層には古墳時代中～後期土器が、3層には弥生時代中～後期土器がそれぞれ包含されていた。これら3層は、多少の前後する時期の土器の混在は認められるものの、概ね弥生時代～中世に連続的に形成されたと考えられる。いずれも、暗色化が顕著で、耕作などの人的活動が行われた結果形成された土壌化層と認識したい。ただし、古墳時代前期遺物の包含は認められないため、この時期だけ人的活動が当該調査区内には及んでいなかった可能性もある。

遺構の検出はこれらの層界、つまり2層上面・3層上面・4層上面の3面で行われた。このうち2層上面で検出された遺構に関しては、中世以後に形成され、所属時期が近現代にまで下る可能性があるため、詳細な記述は割愛した。確実に前近代に属する遺構は、3層上面と4層上面で検出された。ところが、3層の暗色化が顕著なため、本来なら3層上面で検出されるはずの遺構が確認できず、4層上面でようやく検出できた遺構も少なくない。そこで、検出遺構面毎ではなく、その遺構から出土する土器片から所属時期を類推し、大別時期ごとに掲載したのが図5.2(弥生時代～古墳時代)と図5.3(古代～中近世)である。実際の発掘作業での各遺構の検出面は表5.1に示している。

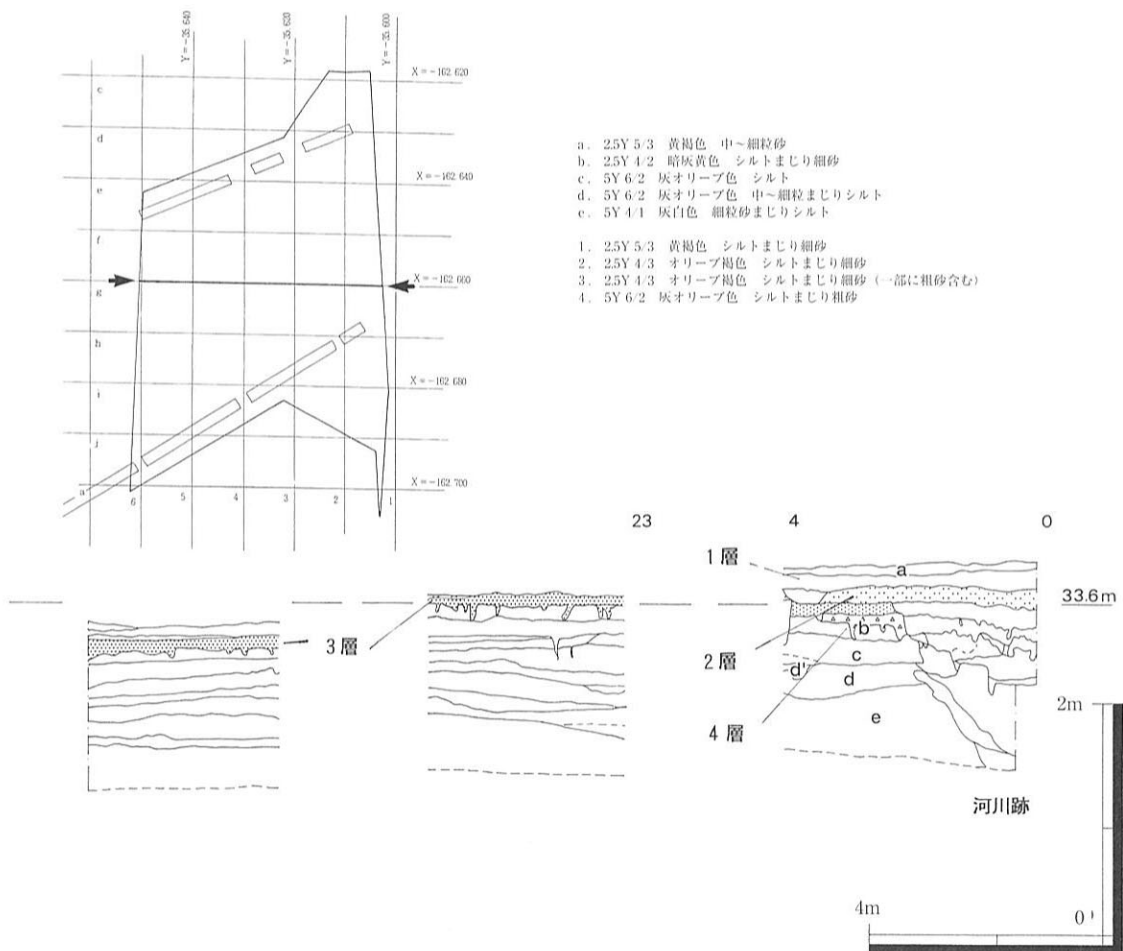


図5.1 98-1調査区土層断面図

## 【検出された遺構】

### 弥生時代～古墳時代の遺構（図5.2）

4層上面から3層上面にわたって、河川98-31が形成されている。この河川埋土中には弥生土器細片とともに中世瓦器碗まで出土しており、長期にわたって継続する河道であったと推測される。その周囲には、溝98-12などの南-北方向の溝群が、河川98-31に沿うように形成されている。いずれも幅約0.5～0.7m、深さ約0.1～0.2m程度の規模である。それぞれの溝の詳細な時期は不明だが、出土土器からは弥生～古墳時代に形成されたことが類推される。河川に沿った曲線で、幾たびも掘りなおされていることから、河川からの取・排水を目的とする人口水路だった可能性が高い。

一方、溝群の中には南西-北東方向に直線的に伸びるものも検出されている。溝98-9,13,16,28などが相当するが、河川に沿う溝群との切りあい関係は明確ではなかった。ただし、溝98-16からは古墳時代後期の須恵器杯蓋が出土しており、これらの溝群の一部が6世紀に機能していたことは間違いない。先の溝98-7,12などと同時存在するなら、そこから東方向に水を引く水路だったとも考えられる。

また、当該期に属する柱穴（柱穴98-8,20,22）や落込みも検出されている。このうち柱穴98-8の中心部からは、古墳時代中期末～後期初頭の須恵器杯身が据え置かれた状況で出土した。つまり、これら柱穴は6世紀には形成されたと推定され、水路群のそばに建物施設が付随していた可能性がある。

表5.1 98-1調査区検出遺構

遺構種類	遺構番号	地 区	検出面	幅(m)	長さ(m)	深さ(m)	時 期	備 考
溝	98-1		2層上面	0.4	24～	0.10	中世以降	
溝	98-2		2層上面	0.4	23～	0.10	中世以降	
土坑	98-3		2層上面	2.0	3.0	0.15	中世以降	
溝	98-4	G17i1・G17j1	4層上面	1.2	4～	0.25	弥生?	
土坑	98-5		2層上面	1.5	4.0	0.15	中世	
溝	98-6	G17d3・G17e3・G17g4・G17h4・G17i4・G17j4	3層上面	1.0	60～	0.20	古代	
溝	98-7	G17f5・G17g5・G17h5・G17i5・G17j6	3層上面	1.0	35～	0.15	古代	
柱穴	98-8	G17h5	4層上面	0.6	0.6	0.15	古墳後期	
溝	98-9	G17i5	4層上面	1.0	9～	0.15	弥生～古墳時代?	
溝	98-10	G17h4・G17h5・G17i5・G17j5	3層上面	1.0	47～	0.20	古代	
溝	98-11	G17f5・G17e5	4層上面	0.5	11～	0.1	弥生～古墳時代?	
溝	98-12	G17f4・G17g4・G17h4・G17h5・G17i5・G17j5	4層上面	0.7	30～	0.20	弥生～古墳時代?	
溝	98-13	G17g3・G17g4・G17h4・G17h5・G17i5・G17j6	4層上面	0.6	22～	0.10	弥生中or後期	
落込み	98-14	G17i4・G17i5	4層上面	4.0	4.5	0.15		弥生中or後期
落込み	98-15	G17g4	3層上面	5.0	5.0	0.15	古代?	
溝	98-16	G17h2・G17h3・G17i3・G17i4・	4層上面	0.8	24～	0.15	古墳後期	
溝	98-17	G17i4	4層上面	0.6	8～	0.15	弥生～古墳時代?	
溝	98-18	G17g4・G17h4	4層上面	0.4	13～	0.25	弥生～古墳時代?	
溝	98-19	G17g3・G17h3・G17h4	3層上面	1.0	2～	0.15	古代?	
柱穴	98-20	G17g4	4層上面	0.7		0.55	弥生?	
溝	98-21	G17h4・G17i4・G17j5	4層上面	0.4	21～	0.15	弥生～古墳時代?	
柱穴	98-22	G17g4	4層上面	0.6		0.35	弥生～古墳時代?	
土坑	98-23	G17i5・G17i6	4層上面	1.0	2.0	0.15	弥生?	
溝	98-24	G17g5	4層上面	0.4	6.5～	0.10	弥生～古墳時代?	
溝	98-25	G17h5・G17h6	4層上面	0.8	3.5～	0.10	弥生以降	
溝	98-26	G17i4・G17j4	4層上面	0.4	2.5～	0.20	弥生以降	
落込み	98-27	G17i5	4層上面	4.0	6.0	0.35	弥生～古墳時代?	自然木痕跡
溝	98-28	G17h4・G17i4	4層上面	0.6	15～	0.15	古墳時代以前	
溝	98-29	G17d4	4層上面	1.4	4～	0.10	弥生～古墳時代?	
溝	98-30	G17i4	4層上面	0.6	5～	0.15	弥生中期	
河川	98-31	G17e5・G17f5・G17g5・G17g6	2層上面	6.0	33～	1.0～	弥生以降	弥生～古代に継続

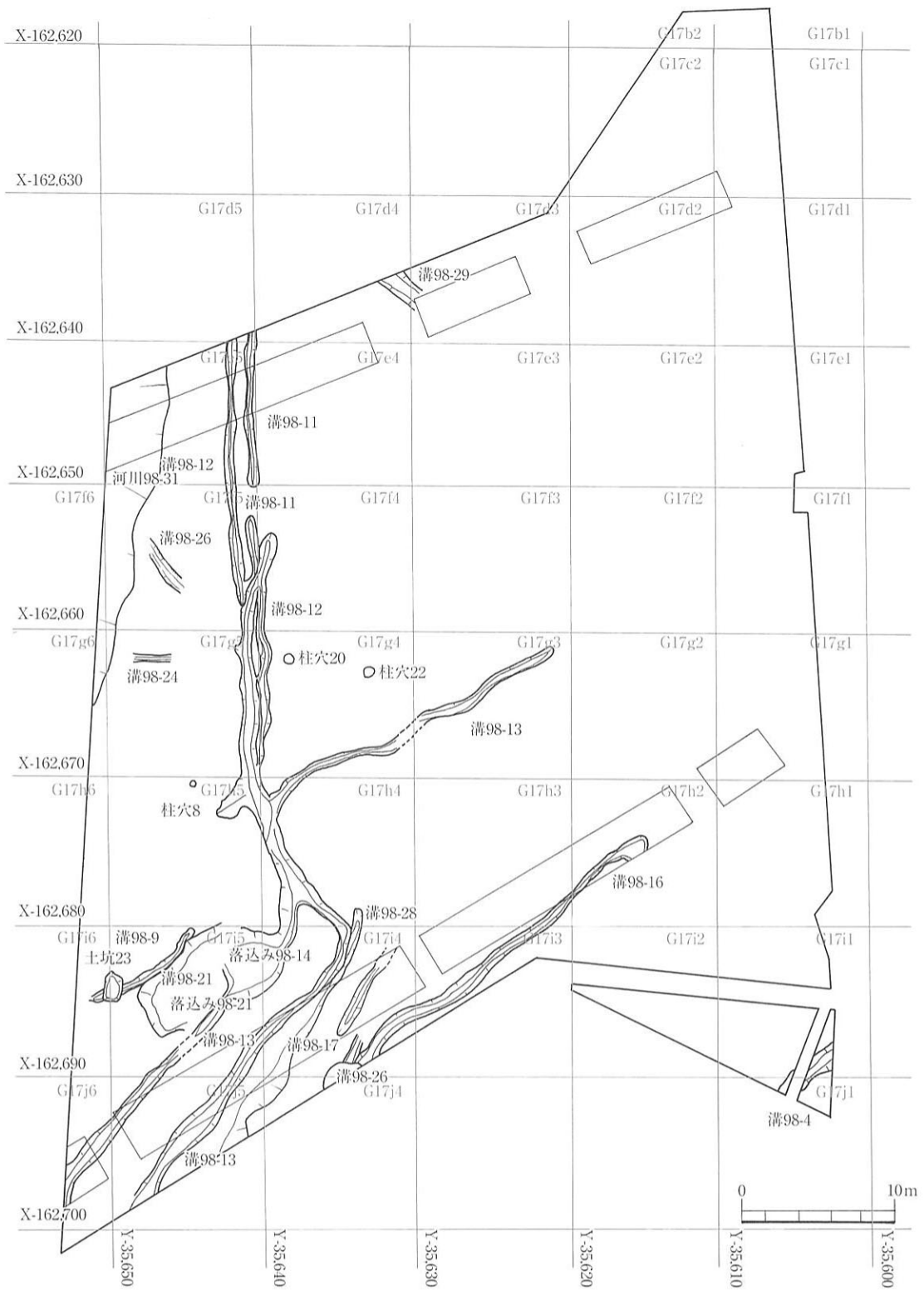


図5.2 98-1調査区弥生～古墳時代遺構配置図 (1/400)

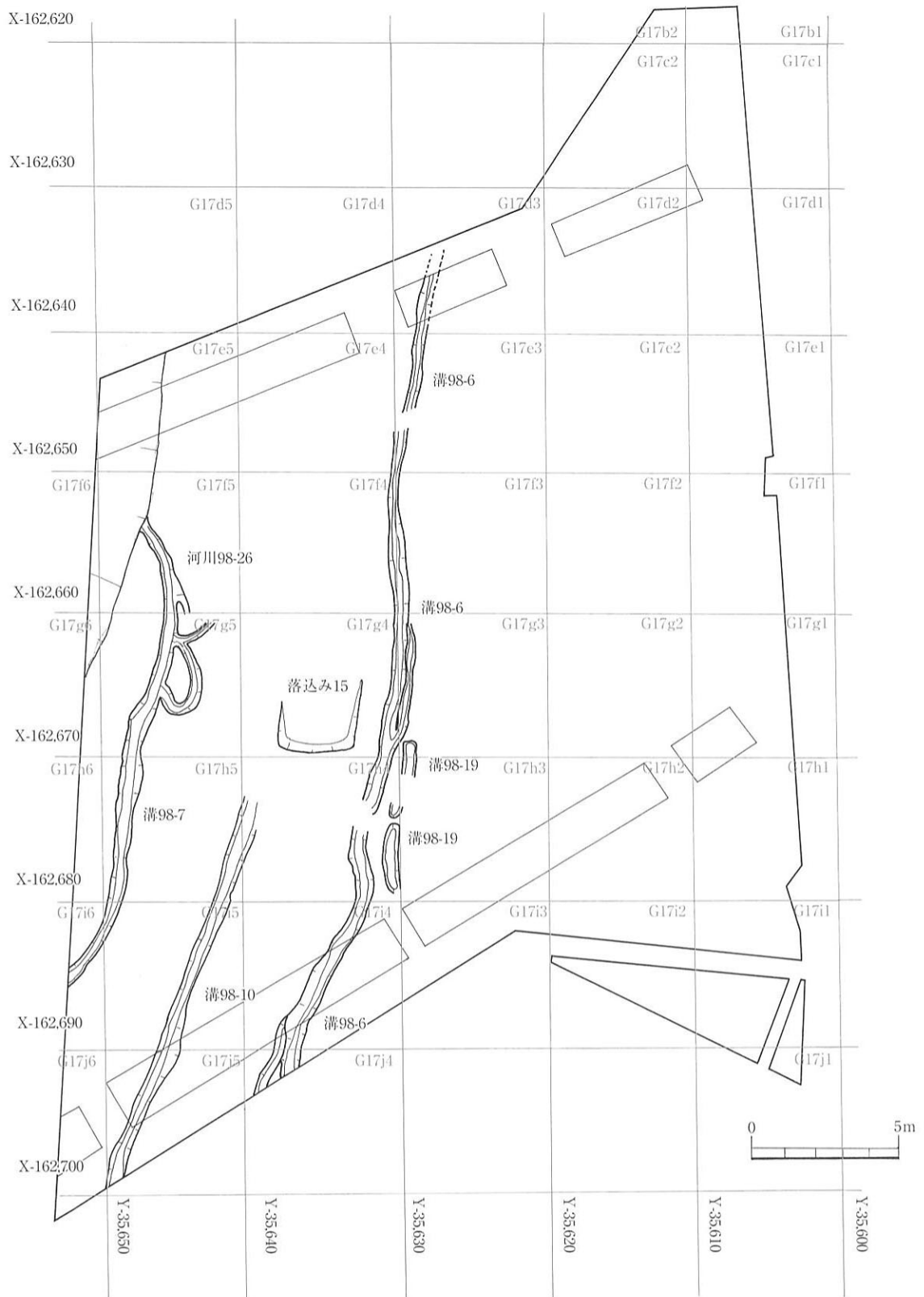


図5.3 98-1調査区古代以後遺構配置図 (1/400)

### 古代以後の遺構（図5.3）

河川98-31は、古代以後にも残存している。古代以後に所属すると考えられる遺構は、溝98-6,7,10,19,26・落込み98-15である。溝状の遺構はすべて、河川98-31に平行しており、水路がすこしづつ位置を変えながら配置された結果として、このような遺構形成がなされたものと考えられる。このうち溝98-7だけが、湾曲して河川98-31にとりつく平面形態をとり、河川への排水機能を有していたこと確かである。

これら水路群は、水田耕作に伴うものと考えられるが、水田畦畔そのものを検出することはできなかった。しかし、土壌の状況は耕作土に類似しており、当調査区が古代～中世に水田として利用されていた可能性は高い。

#### 【出土遺物】

**遺構出土遺物（図5.4）** 遺構埋土から出土した遺物の中で図化できた土器は、図5.4に示した10点である。溝98-7から出土した5.4-1は、受け口状口縁形態の壺で、口縁端面に櫛描列点文が2段にわたり施されている。角閃石・長石の角礫を多く含む、いわゆる「生駒西麓産」胎土で作られている。形態・文様構成からは弥生時代中期中葉に位置づけられる。落込み98-21から出土した5.4-2は、中型甕の底部で、底面・胴下半部が薄く仕上げられている。弥生時代中期中～後葉の所産と考えられる。溝98-31から出土した5.4-3は口縁部が明瞭に屈曲して外反する庄内式甕に類似した形態であり、古墳時代初頭の所産と考えられる。

5.4-4,5,6は古墳時代後期の須恵器である。溝98-6出土の5.4-4と溝98-16出土の5.4-5は、いずれも杯蓋である。形態の特徴からTK10～TK43型式に属し、古墳時代後期後半の所産と考えられる。柱穴98-8から出土した5.4-6は、杯身である。口縁部形態から類推すると、TK47型式に属し、古墳時代中期末～後期初頭の所産と考えられる。溝98-4・98-5から出土した5.4-7は長胴形態の土師器甕で、内外面ともハケ後ナデ調整で仕上げられている。古墳時代後期～古代の所産と考えられる。溝98-7から出土した5.4-8は、高坏脚部で、古墳時代後期～飛鳥時代の所産と考えられる。

河川98-31出土の5.4-9と溝98-10出土の5.4-10は瓦器椀である。5.4-9は、高台径が大きい形態で、内外面とも密なヘラミガキ調整で仕上げられている特徴から11世紀後葉～12世紀前葉の所産と考えられる。

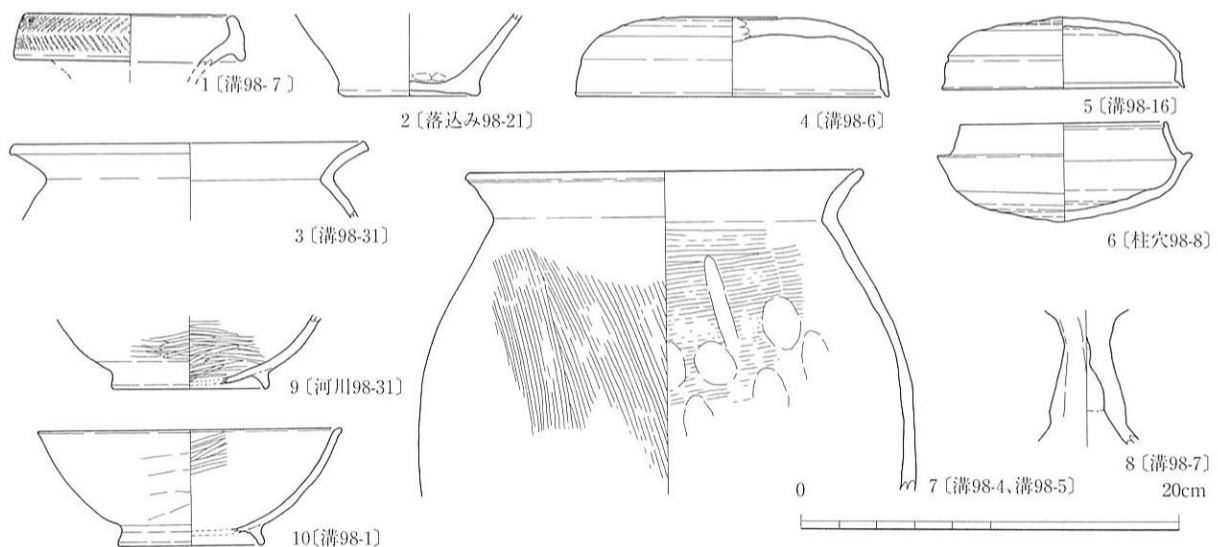


図5.4 98-1調査区遺構出土土器（1/4）

5.4-10は内面のみがヘラミガキ調整で仕上げられている。口縁部形態から、和泉型瓦器碗に分類でき、所属時期は12世紀前葉と考えられる。

**包含層出土遺物 (図5.5)** 土器包含層から出土した遺物のうち10点が図化可能であった。5.5-1～6は須恵器で1・2層から出土した。5.5-1は口縁部が直立する形態で、TK47～MT15型式に属し、古墳時代中期末～後期前葉の所産と考えられる。5.5-2と5.5-3は共に稜線の明瞭でない形状の杯蓋で、TK43～209型式に属する。5.5-4の杯身は、立ち上がりが小さい口縁形態で、TK43～209型式に属する。5.5-2・3・4はいずれも古墳時代後期後葉～飛鳥時代初頭の所産であろう。5.5-5は杯蓋で奈良時代の所産と考えられる。5.5-6は壺頸部で、口縁部に段をもつ形態である。古墳後期～飛鳥時代の所産と考えられる。

5.5-8・9はいずれも、下層確認調査で出土した縄文土器である。5.5-8は波状口縁形態の深鉢口縁部片と考えられる。外面には3条一対の沈線が2段施され、波状口縁の突起部には同じく2段に弧状の沈線が施されている。3条沈線文帯の内部には縄文が施され、口縁部に磨消し縄文が展開していることがわかる。5.5-9は内外面がヘラミガキ調整で仕上げられた深鉢である。いずれも縄文後期中葉（北白川上層式期）の所産と考えられる。5.5-10は、緑泥片岩製石庖丁で、弥生中期の所産と考えられる。

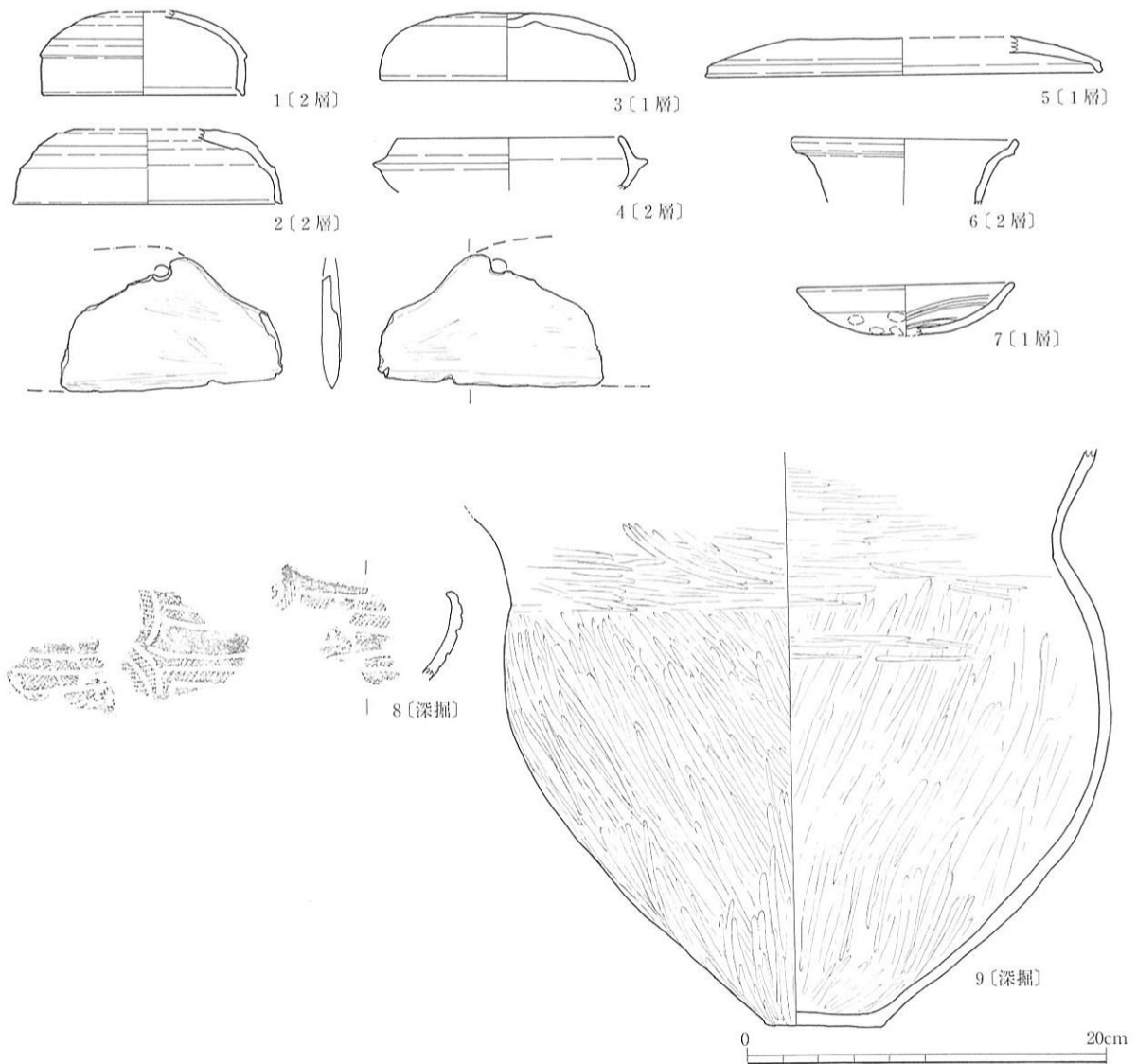


図5.5 98-1調査区包含層出土土器 (1/4)

## 第6章 01-1～5調査区の成果

01-1～5調査区は、当該周知されている西浦東遺跡の東部に所在する。大半の領域は石川左岸の氾濫原および、遺跡南方の中位段丘からの沖積作用の及ぶ範囲となる。

南阪奈道路建設に伴い、道路本線部分を1998年と2000年に分けて範囲確認調査を行った。今回の調査は、この成果を基に縄文時代の遺物包含層が良好に検出された範囲を対象に5ヶ所の調査区（図1.2参照）を設定した。

### 6.1 基本層序

01-1～5調査区全体を通して土層堆積の状況に大きな差異はない。最上部には近～現代耕作土が厚さ20～30cm程度堆積し、層中からは古代以後の土師器・須恵器や中～近世土器が出土する。その直下には60～100cm程度の厚さでシルト～極細粒砂層が形成されている。現在のように流路の固定化する以前の石川流路帯における弱い流水による堆積物の集積層と考えられる。さらに下位には青灰色粘土を基調とする⑤⑥層が堆積している。このうち⑥層は複数の調査区で厚さ10cm程度の細砂ラミナ層を含むことから、幾度か近隣河川からの強い流水作用を受けたことがわかる。

その下位に形成されていたのが、⑦～⑧層である。双方とも中～粗粒砂を多く含む土質で、強い流水作用にもたらされたと考えられる。⑧層については特に顕著で、01-2調査区の下部約70cmにわたる厚さで流路内堆積砂層、上部約20cmが破堤堆積物と考えられる隆起した砂層で構成されている。いずれも粗粒砂・シルトなどによるラミナの形成が顕著であった。対照的に、⑦層は暗色化が顕著で砂層ラミナなどの堆積単位が読み取りにくい状況であった。つまり、河川の強い流水作用で形成された堆積層の上部が地表化し、草木繁茂などにより土壌化・暗色化が進行した結果形成されたのが⑦層、その作用が及ばなかった範囲が⑧層といえよう。実際に⑦⑧層境界には植物根跡と考えられる垂直方向の細い筋状の不整形な暗色土痕跡が多数確認された。

この⑦層と⑥層下部からは、先述のように縄文後期（北白川上層式2期）土器が多量に出土している。⑥層下部から出土する縄文土器は、⑦層から巻き上げられた結果、同層に包含された可能性がある。実際に、⑥層下部から⑦層上面にむけて、木根痕跡が複数貫入している状況が確認され、⑥⑦層界には自然作用による攪乱が生じているらしい。

また、⑦層上・下面では、埋土中に炭化物の集積した土坑など炉跡と考えられる遺構も検出されている。このことから、⑦層の暗色化・土壌化の要因としては、草木繁茂などの自然作用だけでなく、遺構形成などの人為的活動も考慮しなくてはならない。また、この⑦層は調査区全体で水平に形成されているわけではない。01-1調査区ではT.P.30.1～2mの標高で確認できるが、調査区域東端部の01-5調査区ではT.P.29.5m前後で検出されている。⑦層の基盤となる⑧層の堆積は東へいくほど薄く粘土質であった。つまり、01-1・2調査区は粗～中流砂層により形成される流路・自然堤防帯の中心で、01-5調査区はその側方に形成された後背湿地にあたると思われる。両者の間にあたる01-3・4調査区は、自然堤防帯の東側斜面領域に相当していたと考えられる。もちろん、この自然堤防帯は平坦な斜面ではない。幾重にもわたる⑧層形成時の流水作用の単位を反映して、01-3・4調査区の⑧層上面は細かな起伏に富んでいた。後述するように、01-3・4調査区は炉跡とみられる炭化物集積土坑の主要形成領域に相当し、この凹凸の顕著な自然堤防上が人的活動の中心と想定できる。

上述のように、⑦層の上下層では、いずれも強い流水作用による堆積物が看取された。このことは、

⑦層が形成される地表化・土壌化は、本調査領域に流水作用が一時的に中断した期間に進行したとも推測される。その期間を類推することは難しいが、今回出土した土器群の型式学的編年上の時期幅に近似する可能性もあろう。(若林)

## 6.2 遺構の概要

### 【第01-1調査区】(図6.2・6.3)

本調査区は、東西8m、南北21m、面積166.4㎡を設定した。今回の調査区では西端に位置する。機械掘削により現地表面から⑥層中層(GL-1.5m)までを掘り下げ、②層下層～⑥層までは無遺物層であった。⑦層上面はT.P.+30.1mの位置で検出した。

⑦層は土壌化が顕著にみられる暗色粗砂混じり中粒砂であり、数条のラミナを観察することができる。⑦層は、調査区南部は顕著であるが北部では土壌化の作用が弱まる。後述する01-3・4調査区と比して全体的に土壌化の作用は弱まっていくようである。土壌化層の範囲は、本調査区より西に位置する00-4調査区では⑦層に対応する層は認められないことから、⑦層は本調査区より南方向に広がるものと思われる。⑦層中からは縄文土器片・サヌカイト片が出土する。調査は⑦層上面、⑧層上面でそれぞれ遺構検出を行い、⑦層上面では、落込み、木の根痕、⑧層上面では、多数の落込みを検出した。

⑦層上面では、調査区の東西端で西方向への落込みを検出した。落込みの規模は幅2.4～7.5m、深さ0.03～0.1mであり、埋土はオリブ黒色粗砂混じりシルト(炭化物を含む)である。遺物は縄文土器片、サヌカイト片が数点出土した。

⑧層上面では、炭化した木の根と調査区南側で小規模の落込みを多数検出した。

調査区南部では小規模の落込みを検出した。これら落込みの規模は0.1～1.1m、深さ0.05～0.07mであり、埋土はオリブ黒色中～粗砂混じりシルトである。この調査区南部では、遺物が出土する割合が高いため、当時の活動ゾーンであったと推測される。これら落込みの大半は自然形成によるものだが、人為的に形成された遺構も含まれている可能性がある。

### 木の根01-89

木の根01-89は、F14h7-3・F14h8-2区で検出した。⑥層上面で検出していたが、当初は炭化物が多量にみられることから炉跡遺構を想定しつつ調査をすすめたが、次第に炭化物を含む埋土が放射状にのびていくことから、木の根跡と判断した。木の根は炭化しており、約4m四方に広がる。⑥層上面もしくは中層から根をはっているが、埋土中から遺物は出土しなかった。⑥層は青灰色粘質シルト層堆積であることから、樹木は湿潤な土地で生植していたものである。

### 落込み01-67

落込み01-67はF14i7-3・4、F14i8-1・2、F14h7-3、F14h8-2区で検出した。規模は幅2.4m、深さ0.05mであり、北東方向に向かって蛇行し、埋土はオリブ黒色粗砂混じりシルトである。遺物は縄文土器片、サヌカイト片、礫が出土した。

### 【01-2調査区】(図6.5・6.6)

本調査区は、東西35.5m、南北22m、面積774.4㎡を設定した。機械掘削により現地表面から⑥層中層(GL-1.5m)まで掘り下げた。遺物は②層下層～⑥層で土師器、須恵器が若干出土している。⑦層上面はT.P.+29.9mの位置で検出した。⑧-2層は厚い流路内堆積砂層、⑧-1が破堤堆積物と考えられる隆起した砂層の堆積である。⑦層は⑧-1の地表化・土壌化によるものである。調査は⑦層上面、⑧層上面で遺構検出を行い、⑦層上面では中世の素掘りの井戸と縄文時代の落込み、⑧層上面では炉跡、土坑、落



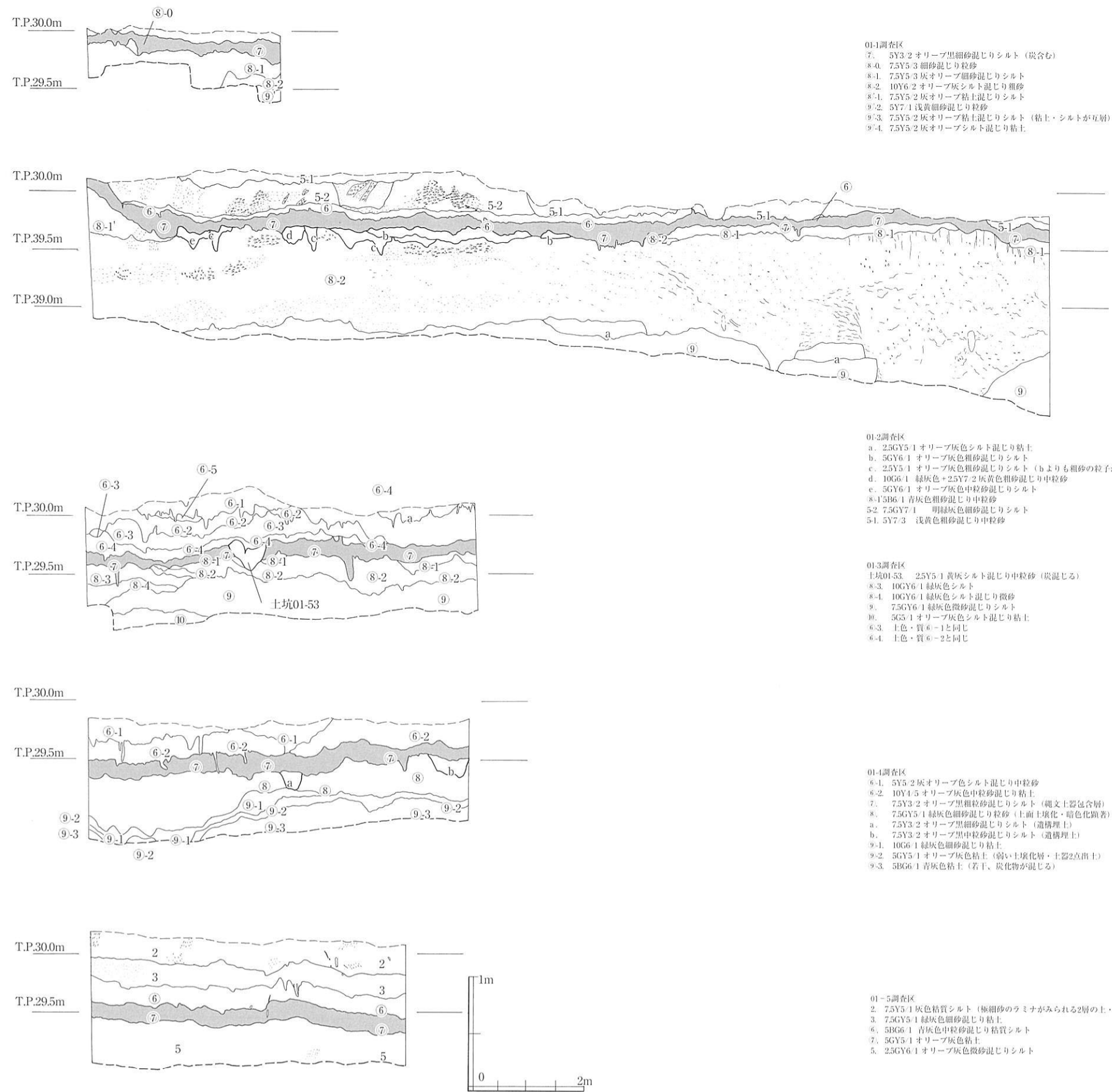


図6.1 01-1~5調査区北壁土層断面図

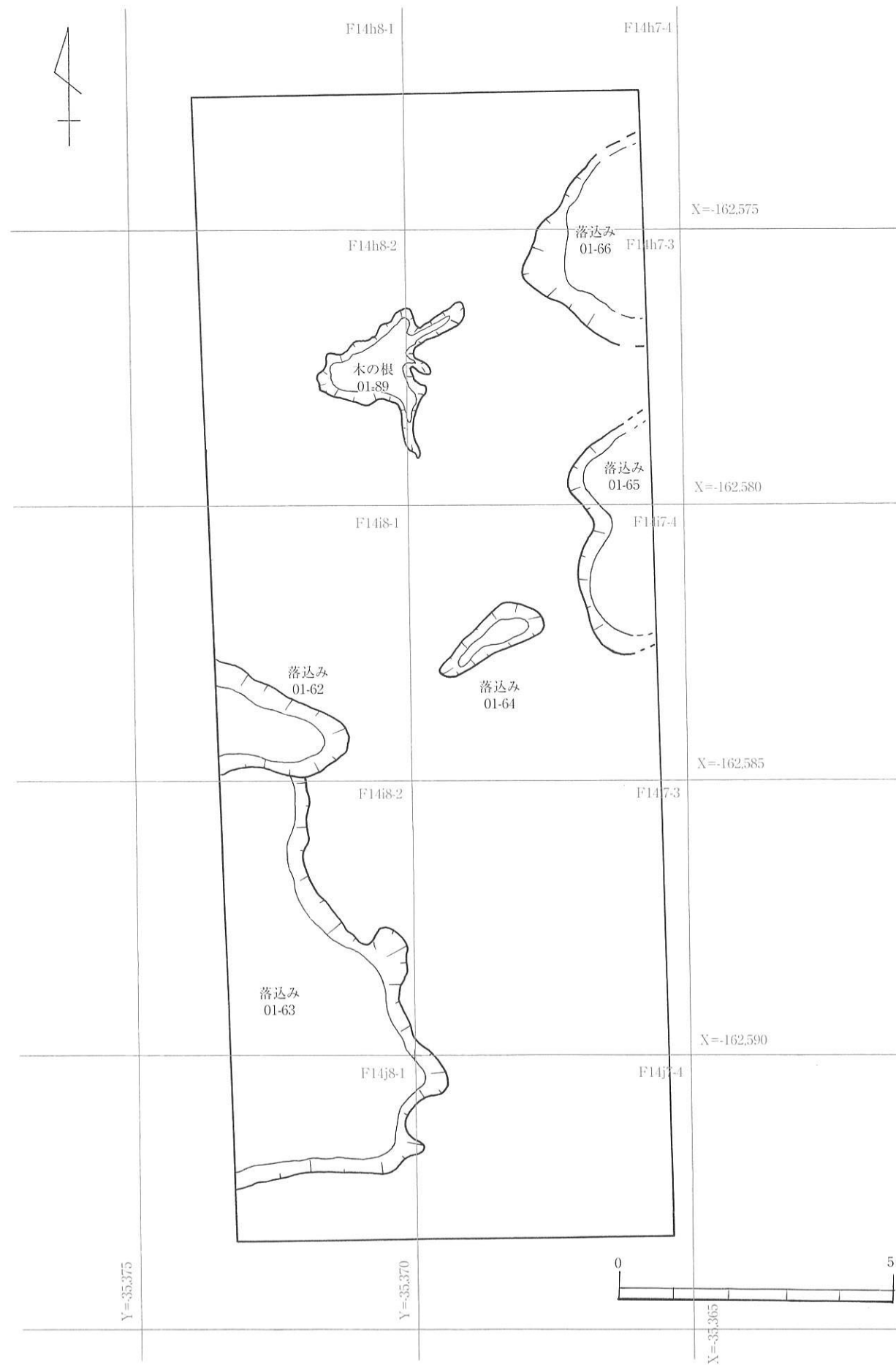


図6.2 01-1調査区⑦層上面平面図 (1/100)

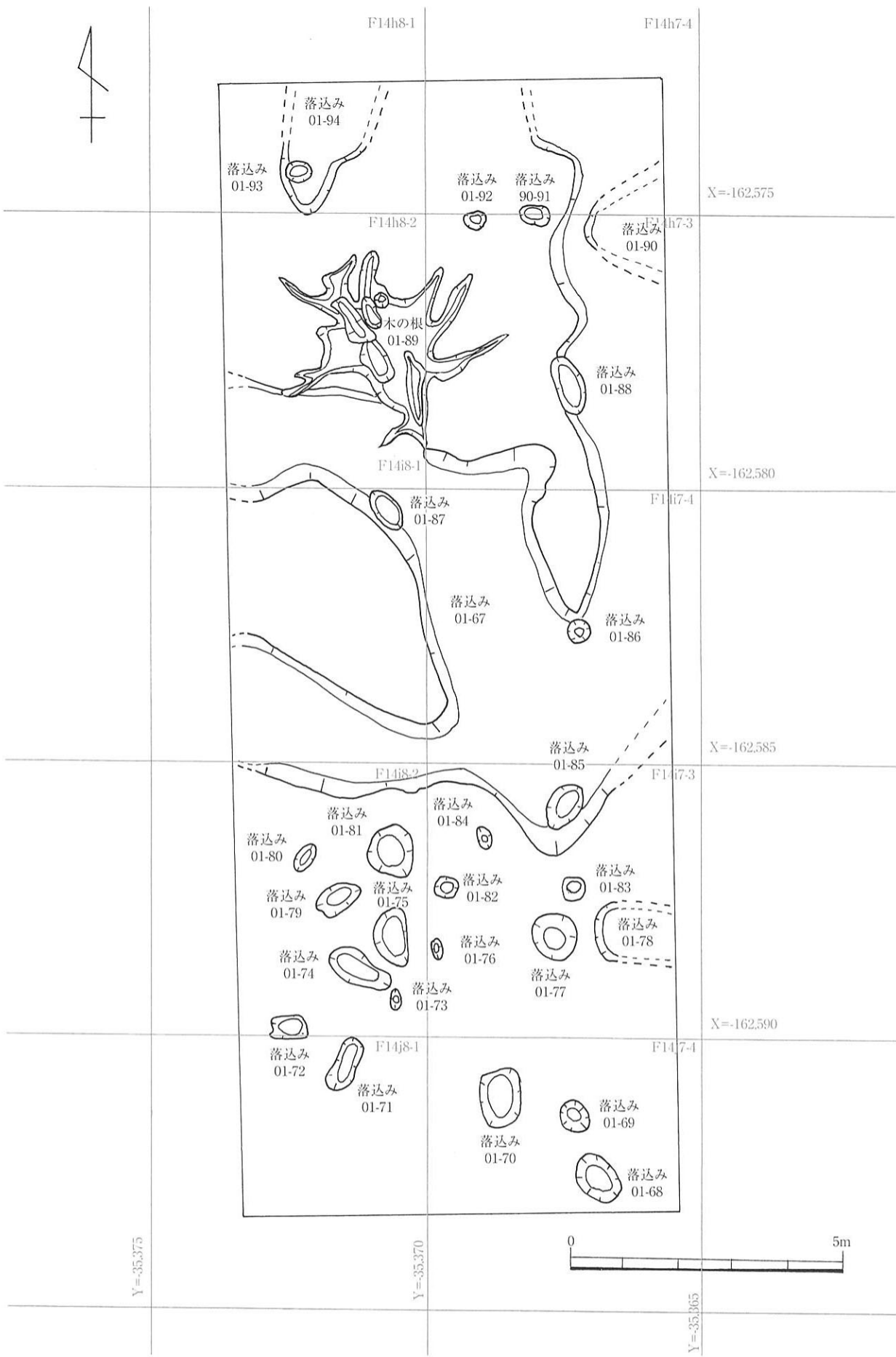


図6.3 01-1調査区⑧層上面平面図 (1/100)

込みをそれぞれ検出した。

⑦層上面では、調査区南部では不整形な落込み、北端部では北方向への落込みを検出した。調査区南部の落込みの規模は、幅0.7~7.5m、深さ0.05~0.2mであり、埋土は青灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。調査区北部の落込み01-116は、東西24m、南北3.6m、深さ0.17mであり、埋土は青灰色粘質シルトである。遺物は出土していない。

⑧層上面では、調査区南東部より木の根痕や小規模の落込みを多数検出した。これらの規模は0.3~3.2m、深さ0.03~0.1mであり、埋土はオリーブ黒色中粒砂混じりシルトである。遺物は出土していない。調査区北東部より落込み01-109を検出した。東西2.7m、南北0.7m、深さ0.1mであり、埋土はオリーブ黒色中粒砂混じりシルトである。01-2調査区は全体的に遺物の出土量は少ないが、落込み01-109の東部にあたるF14h2-1、F14h2-4区ではまとめて出土した。これは人の活動ゾーンが、01-2調査区より北東方向に広がる可能性を示唆するものである。

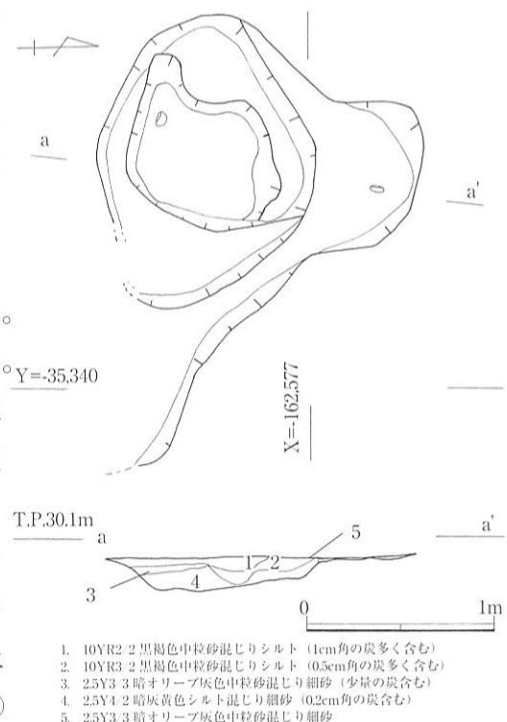
#### 炉跡01-139(図6.4)

炉跡01-139は、F14h4-3・F14h5-2区で検出した。規模は南北2.1m以上、東西1.2m、埋土はオリーブ黒色中粒砂混じりシルトに多量の炭化物が混入していた。遺構は北から南に向かって緩やかに傾斜しており、深さは0.05mである。遺構は内縁・外縁に分けられ、内縁部に炭化物の堆積がみられることから炉跡と推定した。内縁部は炭化物の混入状況から炉の中心部(焚き口)、外縁部は焚き口から炭、灰を掻き出した使用範囲であると考えられ、北方向に広がる。内縁部は二段に落ち込み、中心部の深さは0.15cmとなる。内縁部は後述する炉跡01-6・01-53のように炭・灰の掻き出しにより炭化物の混入範囲が広がらず、内縁部の壁部が良好に残っていた。これは01-139の使用頻度が低かったためであろう。遺構内から土器・サスカイトは出土していないが、礫が内縁・外縁部からそれぞれ1点ずつ出土している。石器製作や調理等に使用されたと考えられるが、使用痕や被熱の痕跡を確認することはできなかった。また炭化物は多量に出土するものの焼土を検出することはできなかった。遺構周囲に住居跡等の遺構や上屋施設に伴う柱穴を確認できなかったため、屋外炉であったと推定される。

本調査区では炉跡と考えられる遺構が存在するものの、遺物が出土する割合が他の調査区と比して低い。これは炉の使用頻度とも関連するものと思われる。

#### 【01-3調査区】(図6.8・6.9)

本調査区は、東西15m、南北18m、面積259.2㎡を設定した。機械掘削により②層下~⑥層(T.P.+30.5m)まで掘り下げた。調査は②層上面で中世後半の溝・鋤溝を検出し、土師器、須恵器が出土した。溝01-2は、南北方向に通る溝であり、調査区の南側に位置する現代の耕地の畦畔と方向がほぼ一致する。②層下~⑥層中層までは無遺物層であり、⑥層は層厚0.5mと01-4調査区と比して堆積が厚い。調査区の北西端で流路を検出し、⑥層堆積以降のものである。流路内から遺物は出土していない。⑦層上面はT.P.+29.8mの位置で検出した。⑦層の土壌化は顕著であり、地形は南東から北西方向へ緩やか



1. 10YR2 2 黒褐色中粒砂混じりシルト (1cm角の炭多く含む)
2. 10YR3 2 黒褐色中粒砂混じりシルト (0.5cm角の炭多く含む)
3. 2.5Y3 3 暗オリーブ灰色中粒砂混じり細砂 (少量の炭含む)
4. 2.5Y4 2 暗灰黄色シルト混じり細砂 (0.2cm角の炭含む)
5. 2.5Y3 3 暗オリーブ灰色中粒砂混じり細砂

図6.4 01-2調査区炉跡01-139平・断面図(S=1/40)

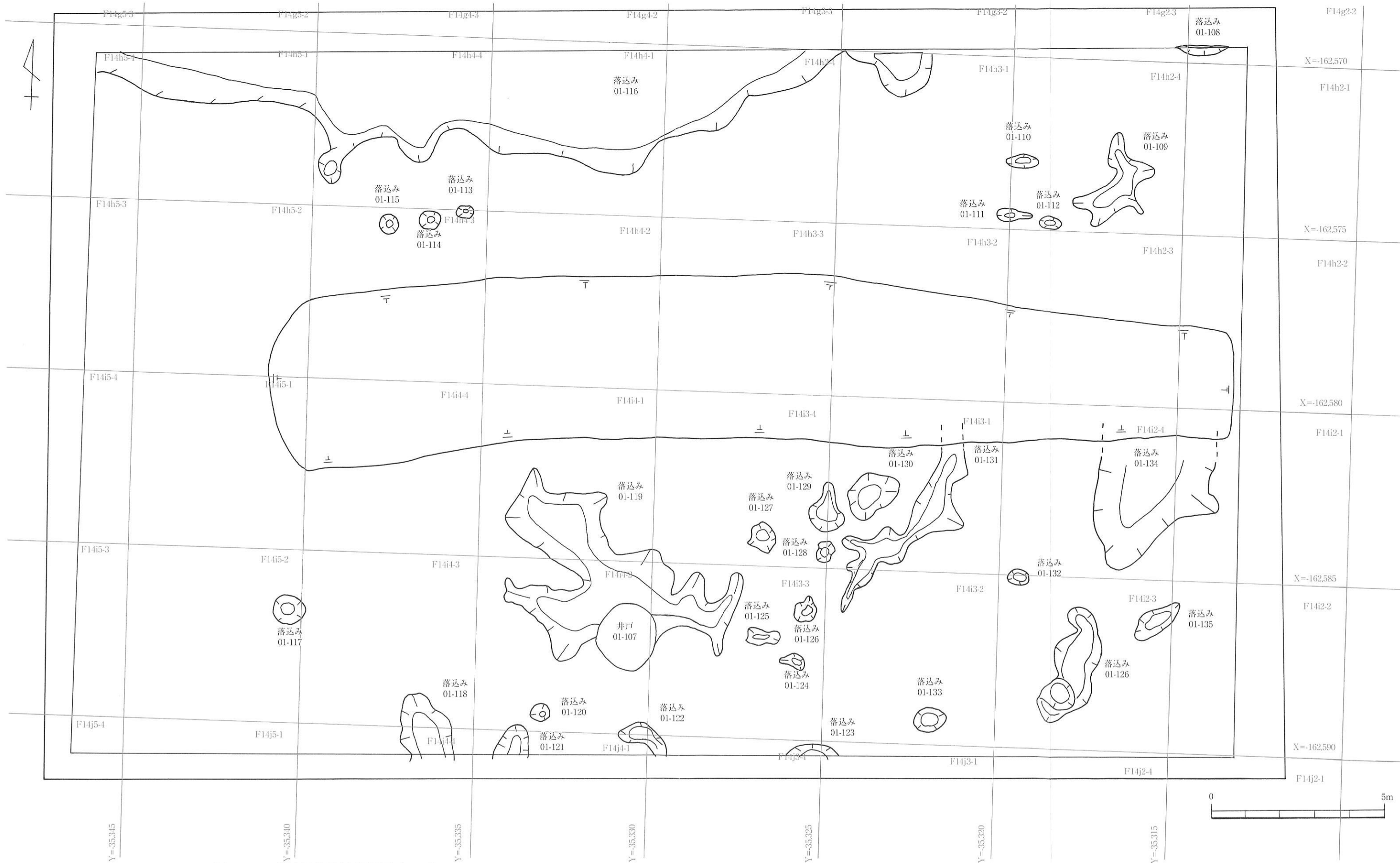


図6.5 01-2調査区⑦層上面平面図 (1/100)



に傾斜する。

調査は⑦層上面と⑧層上面で遺構検出を行い、⑦層上面では木の根痕と落込みを検出した。人為的な遺構はなく遺物も出土していない。⑧層上面では溝状・土坑状の落込みと炉跡を検出した。⑦層からは縄文土器片・サヌカイト片が出土している。縄文土器・サヌカイト片の出土量は01-4調査区と比して少量ではあるがまとまった地点から出土する傾向にある。調査区南部の落込みは0.5～3.5m以上、深さ0.05～0.17mであり、埋土はオリーブ黒色中粒砂混じりシルトである。落込みは木の根痕跡や自然に形成されたものと考えられるが、遺物が出土する割合が高いため人為的に形成された遺構も含まれている可能性がある。

#### 炉跡01-53(図6.7)

炉跡10-53は、F13h10-4・F14h1-1区で検出した。規模は南北2.1m以上、東西1.6m、深さ0.05mであり、埋土は灰色中粒砂混じり細砂に炭化物が混入する。炉跡は南から北に向かって緩やかに傾斜する。炉跡01-53は遺構の平面形状が不明瞭のため遺構範囲は炭化物の分布範囲でとらえることとした。炉内部ではいくつかの炭化物集中部が認められ、使用頻度が高かったことがわかる。1cmほどの炭化物が多く含まれているが、炭化物の量は後述する炉跡01-6と比して少ない。また炭化物が混入する埋土は遺構の周囲に広がり、これは炉の使用後に生じた炭・灰を掻き出した痕跡であろう。炉跡内より出土遺物はなく、また焼土も認められなかった。上屋施設は、炉跡の周囲から柱穴等を確認することができなかったため、炉跡01-139と同様の屋外炉であったと推測される。炉跡の堆積で炭化物を含む層を上下2層確認し、炭化物層の間には青灰色シルト層が認められることから、炉は使用後そのまま放置されて滞水状態にあったことを示し、再度利用されるまでに比較的長い時間を経ていたものと考えられる。

#### 【01-4調査区】(図6.10・6.11)

本調査区は、東西14m、南北20m、面積288㎡を設定した。調査は②層上面で古代～中世の土師器、須恵器が出土したが、遺構は認められなかった。機械掘削により⑥層上面(GL-1.7m・T.P.+30.0m)まで掘り下げを行い、②層下層～⑥層までは無遺物層であった。⑦層上面はT.P.+29.7mの位置で検出した。本調査区で検出した⑦層は粗粒砂の割合が高く、土壌化が顕著であった。これは旧石川の作用による自然堤防状の高まりが形成されていたためと考えられる。調査区の東側を中心に⑥層下～⑦層にかけて縄文土器片、サヌカイト片が出土する。F13h7-1区では小規模な落込みが分布する。これらの規模は、幅0.2～0.8m、深さ0.05～0.13mであり、埋土は灰色中粒砂混じりシルト～シルトであり、遺物は出土しない。これらの落込みには炭化物が多く混入しており、他の調査区で検出した自然形成の落込みとは異なる点である。特に土坑01-18は中央底部で炭化物の堆積がみられ、炉跡であった可能

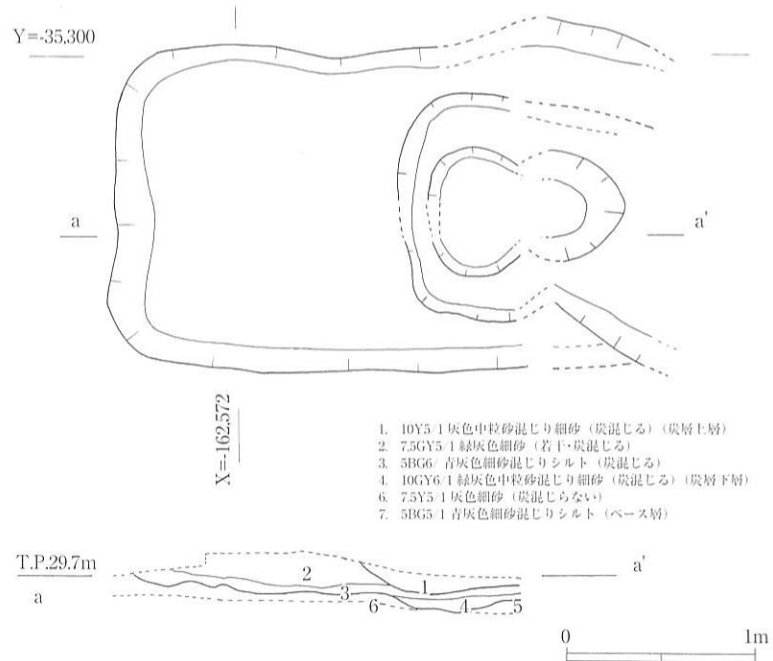


図6.7 01-3調査区炉跡01-53平・断面図 (1/40)

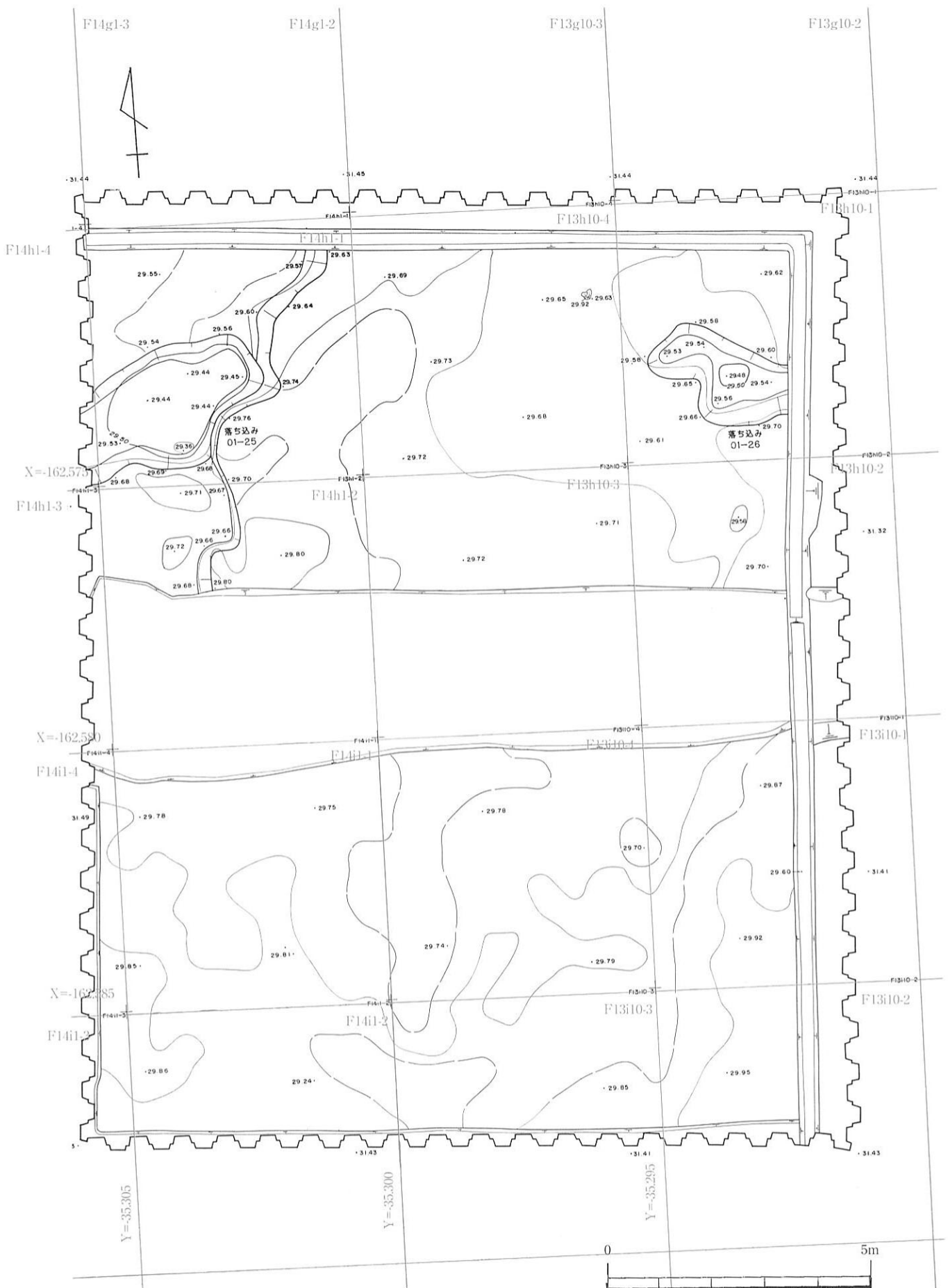


図6.8 01-3調査区⑦層上面平面図 (1/100)



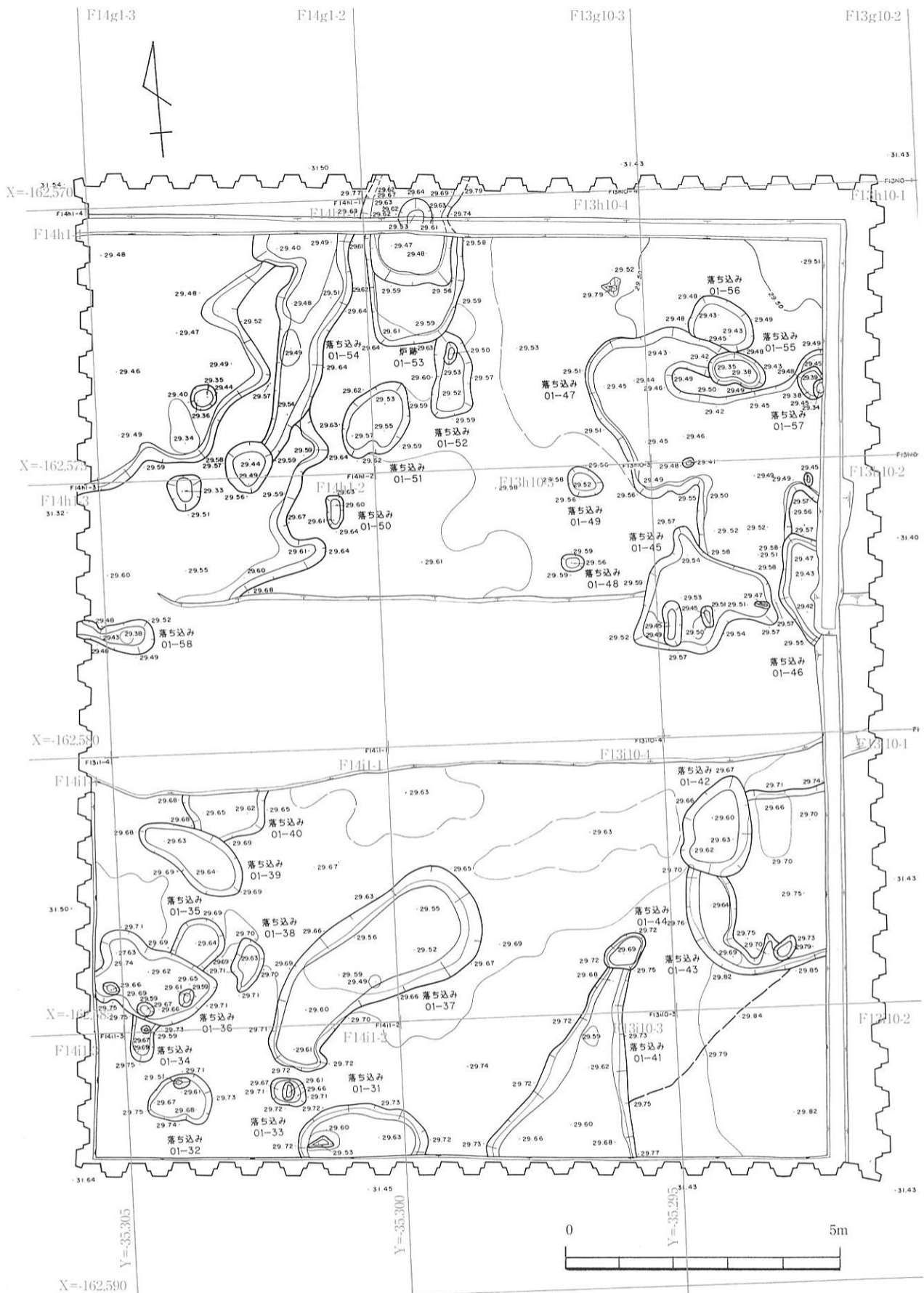


図6.9 01-3調査区⑧層上面平面図 (1/100)

性が高いと思われる。

#### 炉跡01-6(図6.12)

炉跡01-6は、F13h6-1区で検出した。⑦層上面では炭化物が混入する埋土を確認したが、炉の埋土と包含層の土質が類似しており、遺構の輪郭を捉えることが困難であったため⑦層掘削後に遺構検出を行い、⑦層上面を炉跡01-6a、⑧層上面を炉跡01-6bと呼称する。炉跡01-6aは、約10m四方に広がる炭化物細片を多量に混入する埋土であり、炭化物の密度は遺構の中央部で高い傾向にある。炉跡01-6aの炭化物の範囲は炉跡01-6外縁部に相当し、おそらく炉の使用頻度が多くなることにともない炉の使用範囲も次第に広がったものと推測される。炉跡01-6bは⑦層の掘削後に検出したものである。その規模は南北3m、東西1.4m以上、深さ0.23mであり、埋土はオリーブ黒色中粒砂混じりシルトに炭化物が多く混入する。当該炉跡には敷石等の施設はみられず、検出中に炉心と思われる皿状の窪みをいくつか検出されたことから、炉心の位置を変えて継続的に使用していたものと推測できる。多量の炭化物を含む炉跡の堆積層の2層からサヌカイト片2点(図6.15-2・3)が出土した。サヌカイト片に被熱痕跡は認められなかった。また当該炉跡の北側で石核2点(図6.22-2・3)、炉の西側では横長・縦長のサヌカイト剥片に二次加工で刃部を作り出した石器(図6.19-3・5、図6.20-1・3・5)や剥片が他の調査区と比して集中的に出土していることから、当該炉跡の周囲で石器を製作していたと考えられる。炉跡内からは多量の炭化物がみられたが、炉心部より焼土を検出することはできなかった。ただ当該炉跡の北西側で焼土塊が出土しているが、炉跡に伴うものかは不明である。炉跡の平面形状は継続的に炉心を変えてその都度、炭・灰を掻き出して使用するために、炭化物が混入する埋土の範囲が広がり、不整円形を呈するものになったのであろう。当該炉跡周囲から柱穴等を確認することができなかったため、屋外炉であったと推測される。

・当該炉跡の北東部から舟形土器(図6.14-7)が出土した。舟形土器は口縁部を上に向けて炉底面に据え置いた状態で出土した。また炉跡01-6bの北側で接する土坑を検出したが、この土坑より出土した土器片が舟形土器と同一個体であることから、炉はさらに北に広がることが判明した。

当該調査区より2点の小型石棒片(図6.15-1)が出土した。当該炉跡が延長する調査区東壁と調査区北壁の⑦層中(F13g6-3区)からそれぞれ出土した。調査区北壁の掘削中に出土したため、遺構の有無を確認することができなかったが、小型石棒片の出土地点が落込み01-22に近接する。落込み01-22は東西1.2m、南北0.6m、深さ0.02mであり、緑灰色粗砂混じり中粒砂に炭化物が混入する。遺物は縄文土器片2点、横長のサヌカイト剥片に二次加工で刃部を作り出した石器(図6.19-5)が出土する。この小型石棒片は落込み01-22延長部もしくは別の遺構内から出土した可能性がある。先端部を有する小型石棒片は当該炉跡の東側から出土した。この石棒片は皿状に窪む炉心内の埋土に先端部から斜めに突き刺さった状態で出土した。2点の小型石棒片は同一個体であることが判明し、この石棒には叩きつけた痕跡が認められることから使用後に叩き折られたものと推測される。

#### 炉跡01-13・14・19・落込み01-15(図6.12)

落込み01-15はF13i7-1・2・3・4区で検出した。東西4m、南北2.3m、深さ0.2mで平面形状は不整円形である。埋土はオリーブ灰色細砂混じりシルトに炭化物が混入する。炉跡01-13・14は落込み01-15内で検出した炉跡である。炉跡01-13の規模は東西1m、南北1.2m、深さ0.1m、炉跡01-14は東西0.9m、南北0.1m、深さ0.06mであり、埋土は両遺構とも暗オリーブ灰色中粒砂混じりシルトに炭化物が多く混入する。炉跡01-13・14からは土器片が出土した。炉跡01-19は東西0.6m、南北1.1m、深さ0.2mである。



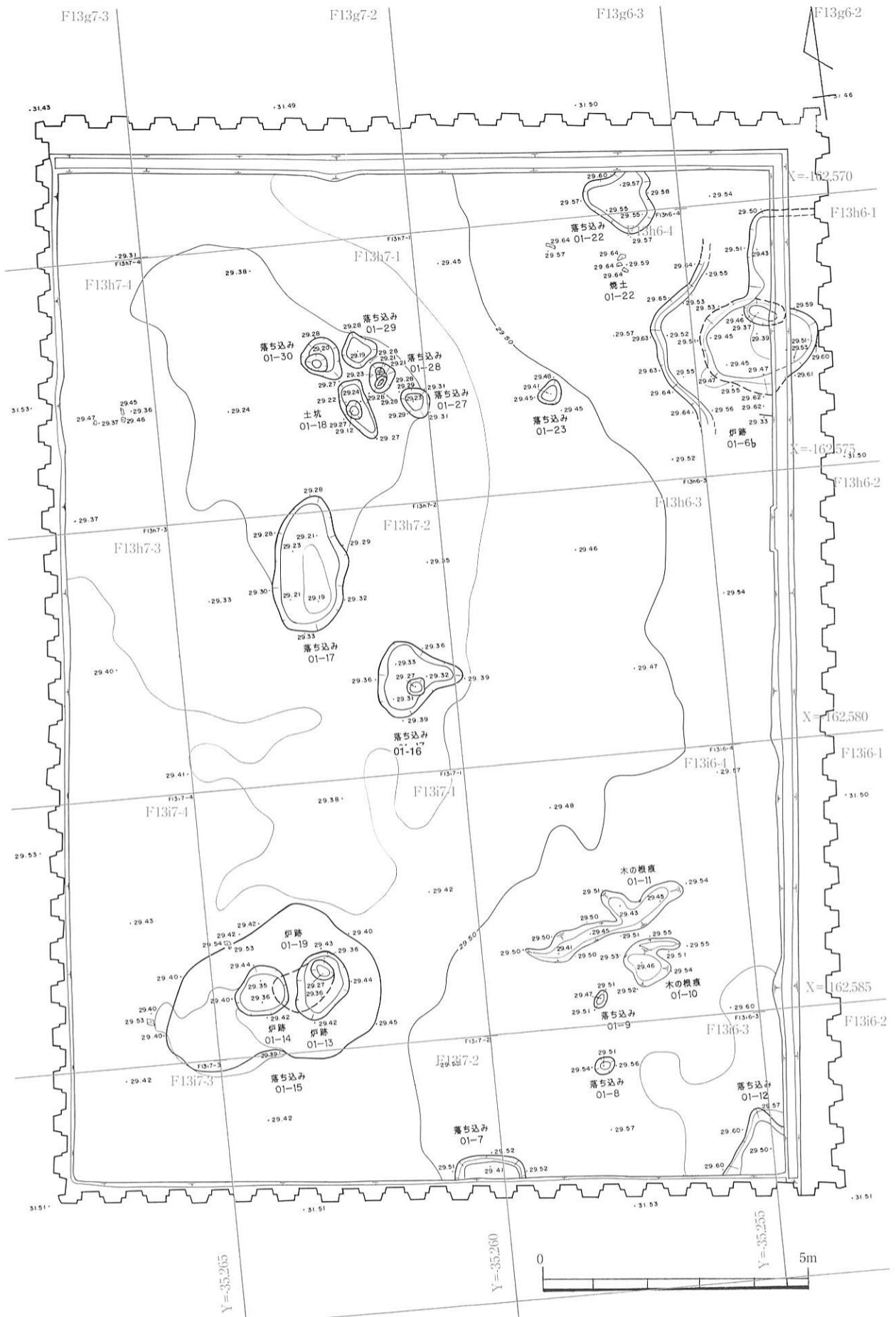


図6.11 01-4調査区⑧層上面平面図 (1/100)

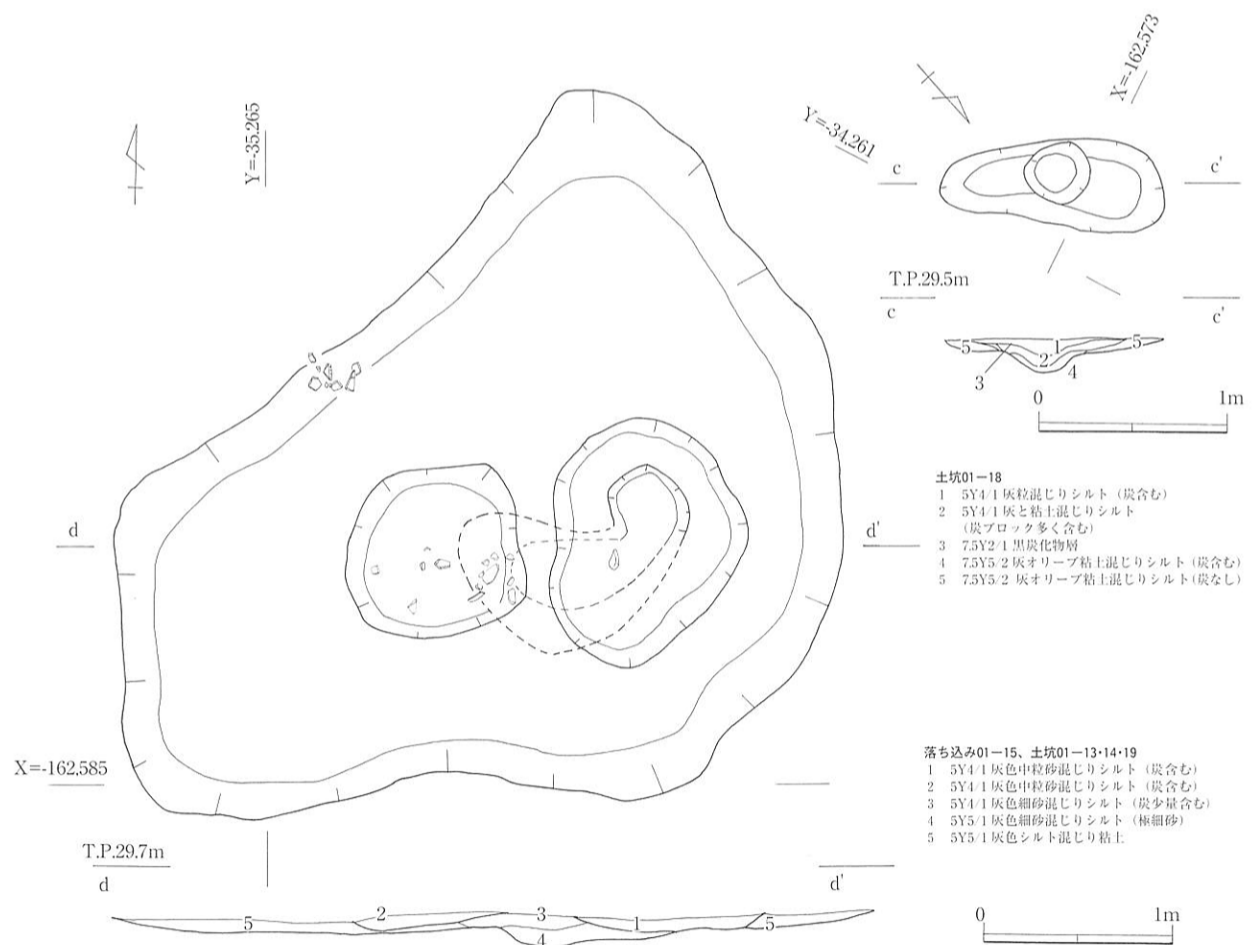
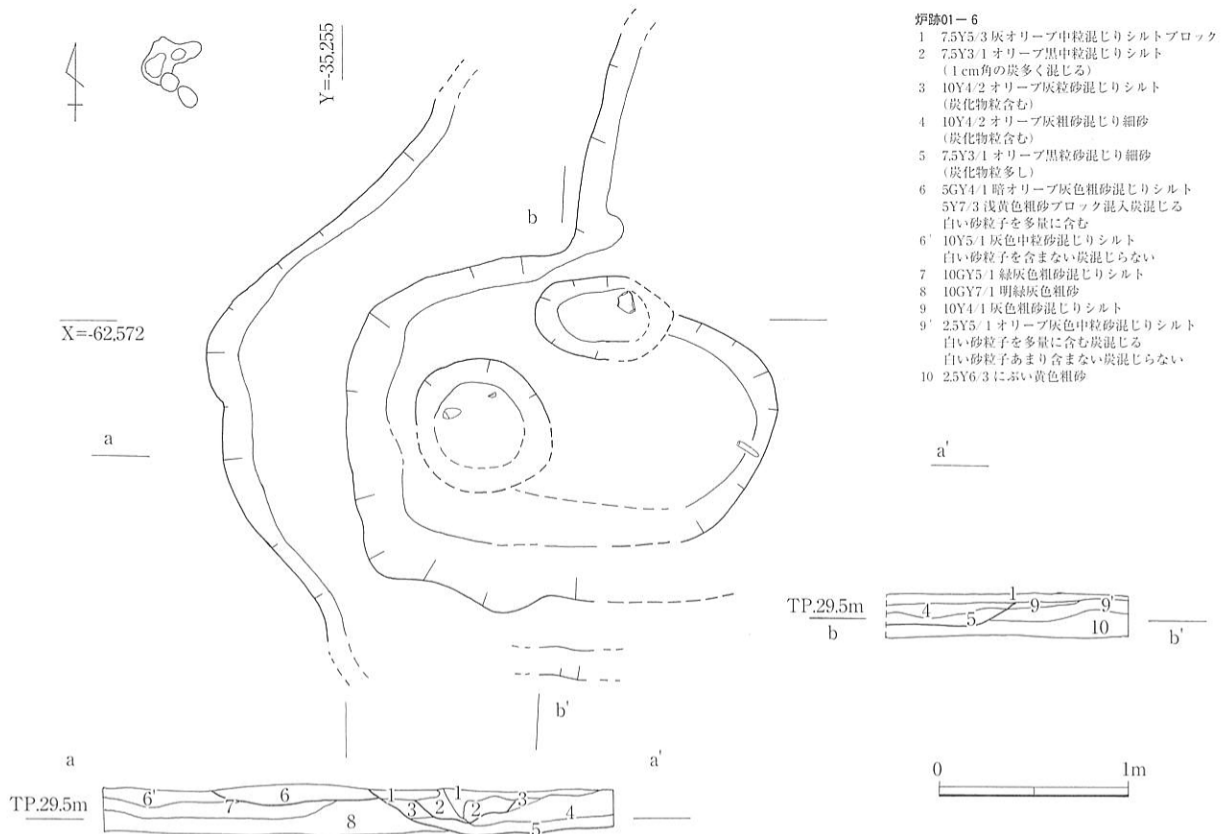


図6.12 01-4調査区各遺構平・断面図 (1/40)

埋土は暗オリーブ灰色中粒砂混じりシルトに炭化物が多く混入する。遺物は出土していない。これらの炉跡の周囲からは柱穴を確認することができなかつたため、屋外炉であったと推測される。これらの炉から炭や灰の掻き出しが繰り返され、その広がりも落込み01-15の範囲であったと推測される。土器は落込み01-15を中心に西側（F13i7-4区）にかけて比較的高い割合で出土している。また礫の出土数も多く、炉跡01-13からは被熱痕跡のある礫が出土している。ただ前述した炉跡01-6と比較して落込み01-15の周囲からはサヌカイト石核や破片の出土がみられないことは注目したい。

#### 【01-5 調査区】（図6.13）

本調査区は、東西12m、南北22m、面積259.2㎡を設定した。機械掘削により⑥層上面（GL-2m・T.P.+30.0m）まで掘り下げた。②層下層～⑥層までは無遺物層であった。⑥層上面では立木の根を数本検出した。立木の周囲からは枝や木の実が散乱していたが、遺物は出土しなかった。⑦層はT.P.+29.5mの位置で検出した。⑦層の土壌化は西隣の01-4調査区と比して色調が弱く、識別しにくい。さらに⑦層は01-4調査区より0.2mほど低いレベルで確認することができた。西に位置する01-1調査区では⑦層上面をT.P.30.1mで確認することができたが、当該調査区ではT.P.29.5mのレベルであることから、当該遺跡の東を流れる石川へと地形が傾斜している。01-4調査区では旧石川の作用による自然堤防状の高まりが形成され、当該調査区の⑧層は薄い粘土質の堆積であるため、湿潤地であったと推測される。⑧層上面で土坑、落込み、木の根痕を検出した。落込みは調査区の東西端で検出、埋土はオリーブ灰色中粒砂混じりシルトであり、いずれも自然形成によるものである。当該調査区における出土遺物の特徴としては縄文土器、サヌカイト片がまとまって出土する傾向にある。特にサヌカイトは調査区に北辺と南西端部において石核が出土し、それに伴うように剥片石器がその周囲から出土している。調査区の北辺と南西部において活動ゾーンを推定することができる。

#### 土坑01-100

土坑01-100は、F13i4-4区で検出した。規模は1.1～1.5m、深さ0.14mであり、埋土は灰色中粒砂混じり粘土である。炭化物が多く混入していたが炉跡と比較するとその量が少ないことや出土遺物の集中等の特徴がみられないことから、遺構は自然形成によるものであろう。（木嶋）

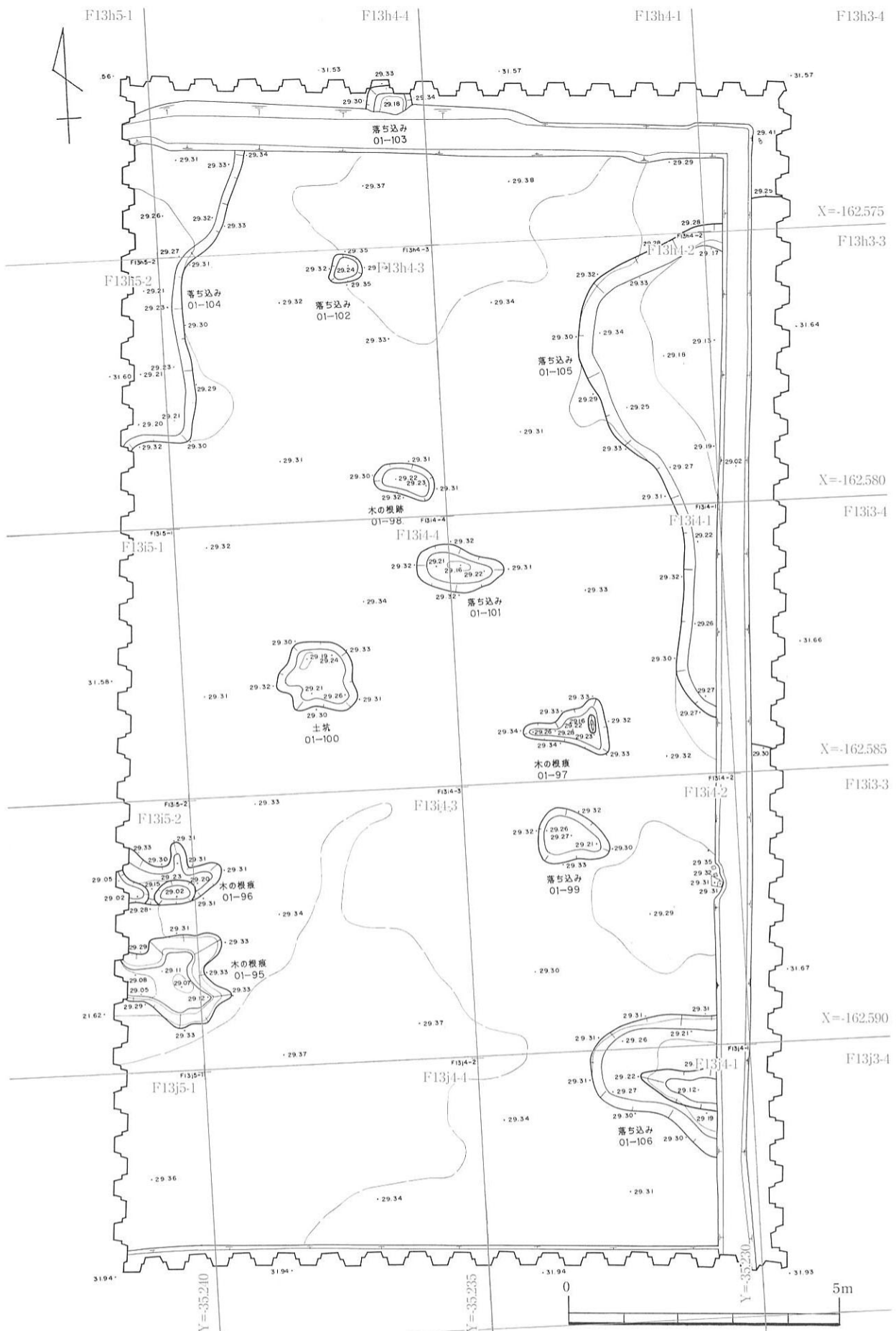


図6.13 01-5調査区⑧層上面平面図 (1/100)

表6. 1 01-1～5調査区検出遺構

	遺構種類	遺構番号	トレンチ	地区	検出面	幅 (m)	長 (m)	深さ (m)	備考
1	落込み	01-62	01-1	F14i8-1	⑦層上面	1.8～	2.4～	0.05	
2	落込み	01-63	01-1	F14j8-1 F14j7-4 F14i8-1	⑦層上面	3.9～	7.5	0.03	
3	落込み	01-64	01-1	F14i7-4	⑦層上面	0.3	2.1	0.07	
4	落込み	01-65	01-1	F14h7-3 F14i7-4	⑦層上面	0.9～	3.7	0.1	
5	落込み	01-66	01-1	F14h7-3・4	⑦層上面	2.2～	3	0.08	
6	落込み	01-67	01-1	F14i7-3・4 F14i8-1・2 F14h7-3 F14h8-2	⑦層下面	2.4～	1.2	0.05	
7	落込み	01-68	01-1	F14j7-4	⑦層下面	0.4	1	0.11	
8	落込み	01-69	01-1	F14j7-4	⑦層下面	0.4	0.6	0.08	
9	落込み	01-70	01-1	F14j7-4	⑦層下面	0.6	1.1	0.1	
10	落込み	01-71	01-1	F14j8-1	⑦層下面	0.4	1	0.03	
11	落込み	01-72	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.4	0.7	0.06	
12	落込み	01-73	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.1	0.3	0.05	
13	落込み	01-74	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.4	1.1	0.05	
14	落込み	01-75	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.4	1	0.05	
15	落込み	01-76	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.1	0.4	0.07	
16	落込み	01-77	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.8	0.8	0.07	
17	落込み	01-78	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.3～	1.1	0.06	
18	落込み	01-79	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.4	0.9	0.05	
19	落込み	01-80	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.2	0.6	0.06	
20	落込み	01-81	01-1	F14i8-2	⑦層下面	0.6	0.9	0.05	
21	落込み	01-82	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.3	0.5	0.07	
22	落込み	01-83	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.3	0.5	0.08	
23	落込み	01-84	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.2	0.5	0.06	
24	落込み	01-85	01-1	F14i7-3	⑦層下面	0.3	0.9	0.07	
25	落込み	01-86	01-1	F14i7-4	⑦層下面	0.4	0.4	0.06	
26	落込み	01-87	01-1	F14i8-1	⑦層下面	0.3	0.8	0.07	
27	落込み	01-88	01-1	F14h7-3	⑦層下面	0.4	1.1	0.1	
28	木の根痕	01-89	01-1	F14h7-3 F14h8-2	⑦層下面	1.4	3.6	0.14	
29	落込み	01-90	01-1	F14h7-3・4	⑦層下面	0.1	0.9	0.07	
30	落込み	01-91	01-1	F14h7-3・4	⑦層下面	0.3	0.5	0.08	
31	落込み	01-92	01-1	F14h7-3・4	⑦層下面	0.4	0.4	0.06	
32	落込み	01-93	01-1	F14h8-1	⑦層下面	0.3	0.5	0.1	
33	落込み	01-94	01-1	F14h8-1	⑦層下面	0.8	1.5～	0.11	
34	井戸	01-107	01-2	F14i3-3 F14i4-2 F14j3-4 F14j4-1	⑦層上面	1.7	2	2～	中世
35	落込み	01-108	01-2	F14g2-2・3	⑦層上面	0.3～	1.5	0.17	
36	落込み	01-109	01-2	F14h2-4	⑦層上面	0.7	2.7	0.1	
37	落込み	01-110	01-2	F14h2-4 F14h3-1	⑦層上面	0.4	1	0.05	
38	落込み	01-111	01-2	F14h2-4 F14h3-1	⑦層上面	0.4	1	0.05	
39	落込み	01-112	01-2	F14h2-4	⑦層上面	0.4	0.6	0.04	
40	落込み	01-113	01-2	F14h4-3・4	⑦層上面	0.3	0.6	0.05	
41	落込み	01-114	01-2	F14h4-3	⑦層上面	0.5	0.7	0.05	
42	落込み	01-115	01-2	F14h4-3	⑦層上面	0.6	0.6	0.05	
43	落込み	01-116	01-2	F14h3-1・4 F14h4-1・4 F14h5-1・4	⑦層上面	3.6～	24	0.17	
44	落込み	01-117	01-2	F14i4-3 F14i5-2	⑦層上面	0.8	1	0.04	
45	落込み	01-118	01-2	F14i4-3 F14j4-4	⑦層上面	1.5	2.1～	0.11	
46	落込み	01-119	01-2	F14i3-3・4 F14i4-1・2	⑦層上面	4	7.5	0.19	
47	落込み	01-120	01-2	F14i4-2	⑦層上面	0.6	0.5	0.06	
48	落込み	01-121	01-2	F14i4-2 F14j4-2	⑦層上面	1	1～	0.07	
49	落込み	01-122	01-2	F14i3-3 F14i4-2 F14j3-4 F14j4-1	⑦層上面	0.5	1.5	0.08	
50	落込み	01-123	01-2	F14j3-1・4	⑦層上面	0.3～	1.5	0.07	
51	落込み	01-124	01-2	F14i3-3	⑦層上面	0.5	0.7	0.07	
52	落込み	01-125	01-2	F14i3-3	⑦層上面	0.5	1	0.07	
53	落込み	01-126	01-2	F14i3-3	⑦層上面	0.7	0.8	0.1	
54	落込み	01-127	01-2	F14i3-4	⑦層上面	0.8	0.9	0.09	
55	落込み	01-128	01-2	F14i3-1・4	⑦層上面	0.5	0.7	0.05	
56	落込み	01-129	01-2	F14i3-1・4	⑦層上面	1	1.5	0.07	



	遺構種類	遺構番号	トレンチ	地区	検出面	幅 (m)	長 (m)	深さ (m)	備考
57	落込み	01-130	01-2	F14i3-1	⑦層上面	1.4	1.5	0.1	
58	落込み	01-131	01-2	F14i3-1・2	⑦層上面	3.5	6～	0.09	
59	落込み	01-132	01-2	F14i2-3・4	⑦層上面	0.4	0.7	0.06	
60	落込み	01-133	01-2	F14i3-2	⑦層上面	0.8	0.9	0.12	
61	落込み	01-134	01-2	F14i2-1・4	⑦層上面	3.5	4.1～	0.1	
62	落込み	01-135	01-2	F14i2-2・3	⑦層上面	0.7	1.6	0.13	
63	落込み	01-136	01-2	F14i2-3	⑦層上面	1.4	3	0.06	
64	落込み	01-137	01-2	F14h2-1・4 F14h3-1	⑦層下面	5.3	14～	0.13	
65	落込み	01-138	01-2	F14h2-4 F14h3-1	⑦層下面	1.1	1.5	0.09	
66	炉跡	01-139	01-2	F14h5-2 F14h4-3	⑦層下面	1.2	2.1	0.05	
67	落込み	01-140	01-2	F14h2-2	⑦層下面	0.7	0.6	0.08	
68	落込み	01-141	01-2	F14h2-2・3	⑦層下面	0.6～	1	0.06	
69	落込み	01-142	01-2	F14g2-2・3	⑦層下面	1.3	1.4	0.08	
70	落込み	01-143	01-2	F14h3-4 F14h4-1・4 F14h5-1・4	⑦層下面	2.7～	2.3	0.15	
71	落込み	01-144	01-2	F14h3-3 F14h4-2	⑦層下面	1.1	1.2	0.05	
72	落込み	01-145	01-2	F14h4-2・3	⑦層下面	2	5.1	0.09	
73	落込み	01-146	01-2	F14h4-3	⑦層下面	1	1.4	0.1	
74	落込み	01-147	01-2	F14h5-3	⑦層下面	0.6～	1.3	0.08	
75	落込み	01-148	01-2	F14h5-3	⑦層下面	0.8～	1.7	0.06	
76	落込み	01-149	01-2	F14i2-1・4	⑦層下面	0.6	1.1	0.06	
77	落込み	01-150	01-2	F14i2-4	⑦層下面	0.55	1	0.04	
78	落込み	01-151	01-2	F14i2-4	⑦層下面	0.75	1	0.06	
79	落込み	01-152	01-2	F14i2-1	⑦層下面	0.3	0.4	0.04	
80	落込み	01-153	01-2	F14i2-1	⑦層下面	0.5	0.7	0.05	
81	落込み	01-154	01-2	F14i2-2	⑦層下面	0.3	0.5	0.03	
82	落込み	01-155	01-2	F14i2-1・2	⑦層下面	0.7	0.85～	0.06	
83	落込み	01-156	01-2	F14i2-1・2・3・4	⑦層下面	0.8	1.3	0.06	
84	落込み	01-157	01-2	F14i2-2	⑦層下面	0.4～	1.6	0.02	
85	落込み	01-158	01-2	F14i2-2	⑦層下面	0.65	1.7	0.06	
86	落込み	01-159	01-2	F14i2-3	⑦層下面	1.8	3.1	0.17	
87	落込み	01-160	01-2	F14i2-3 F14i3-2	⑦層下面	1.8～	7.5	0.06	
88	落込み	01-161	01-2	F14i3-1	⑦層下面	0.9	1	0.09	
89	落込み	01-162	01-2	F14i3-1	⑦層下面	0.85	0.85	0.1	
90	落込み	01-163	01-2	F14i3-2	⑦層下面	0.4	0.6	0.05	
91	落込み	01-164	01-2	F14i3-2	⑦層下面	1.2	2.9	0.12	
92	落込み	01-165	01-2	F14i3-1	⑦層下面	1.3～	3.2	0.05	
93	落込み	01-166	01-2	F14i3-1	⑦層下面	0.7	1	0.03	
94	落込み	01-167	01-2	F14i3-1・2	⑦層下面	0.65	0.9	0.08	
95	落込み	01-168	01-2	F14i3-4 F14i3-3	⑦層下面	1.1	2.7	0.05	
96	落込み	01-169	01-2	F14i4-1・2・4	⑦層下面	1.6	4.75～	0.15	
97	落込み	01-170	01-2	F14i3-2 F14j3-1	⑦層下面	0.6	1	0.02	
98	落込み	01-171	01-2	F14j3-4	⑦層下面	0.6	0.65～	0.02	
99	落込み	01-172	01-2	F14i3-3	⑦層下面	0.75	0.9	0.02	
100	落込み	01-173	01-2	F14j3-4	⑦層下面	0.5	1～	0.05	
101	落込み	01-174	01-2	F14i4-2 F14j4-1・4	⑦層下面	1.7～	9.1	0.06	
102	落込み	01-175	01-2	F14h5-2	⑦層下面	1	3	0.04	
103	落込み	01-176	01-2	F14i2-3	⑦層下面	0.4～	1	0.07	
104	落込み	01-177	01-2	F14i5-3	⑦層下面	1.2	0.5	0.05	
105	落込み	01-1	01-3	-	第2層上面	0.5	1.2	0.15	中世
106	滞	01-2	01-3	-	第2層上面	0.4	6.6	0.06	中世
107	落込み	01-3	01-3	-	第2層上面	0.03	0.4	0.01	中世
108	落込み	01-4	01-3	-	第2層上面	0.3	0.4	0.01	中世
109	落込み	01-25	01-3	F14h1-1・2	⑦層上面	3～	7	0.26	
110	落込み	01-26	01-3	F13h10-1	⑦層上面	1.8～	2.2	0.17	
111	落込み	01-31	01-3	F14i1-2	⑦層下面	1～	2.3	0.13	
112	落込み	01-32	01-3	F14i1-2	⑦層下面	0.9	1.1	0.12	
113	落込み	01-33	01-3	F14i1-2	⑦層下面	0.5	0.7	0.11	
114	落込み	01-34	01-3	F14i1-1・2	⑦層下面	0.5	0.8	0.08	
115	落込み	01-35	01-3	F14i1-1	⑦層下面	0.8	0.9	0.05	
116	落込み	01-36	01-3	F14i1-1	⑦層下面	1.3	2.1	0.09	

	遺構種類	遺構番号	トレンチ	地区	検出面	幅 (m)	長 (m)	深さ (m)	備考
117	落込み	01-37	01-3	F13i10-4 F14i1-1・2	⑦層下面	1.3	4.3	0.12	
118	落込み	01-38	01-3	F14i1-1	⑦層下面	0.6	1	0.18	
119	落込み	01-39	01-3	F14i1-1	⑦層下面	0.7	2.1	0.06	
120	落込み	01-40	01-3	F14i1-1	⑦層下面	0.7～	1.5	0.06	
121	落込み	01-41	01-3	F13i10-3・4	⑦層下面	1.1	3.5～	0.17	
122	落込み	01-42	01-3	F13i10-1	⑦層下面	1.3	1.8	0.07	
123	落込み	01-43	01-3	F13i10-1	⑦層下面	2.5～	3.3	0.12	
124	落込み	01-44	01-3	F13i10-4	⑦層下面	0.6	0.8	0.03	
125	落込み	01-45	01-3	F13h10-2・3	⑦層下面	1	2.4	0.04	
126	落込み	01-46	01-3	F13h10-2	⑦層下面	0.6～	2.5	0.12	
127	落込み	01-47	01-3	F13h10-1・2・3・4	⑦層下面	4.5	4.2～	0.05	
128	落込み	01-48	01-3	F13h10-3	⑦層下面	0.4	0.4	0.03	
129	落込み	01-49	01-3	F13h10-3	⑦層下面	0.5	0.7	0.06	
130	落込み	01-50	01-3	F14h1-2	⑦層下面	0.4	0.6	0.03	
131	落込み	01-51	01-3	F13h10-4 F14h1-1	⑦層下面	1.2	1.3	0.09	
132	落込み	01-52	01-3	F13h10-4	⑦層下面	0.7	1.6	0.06	
133	炉跡	01-53	01-3	F13h10-4 F14h1-1	⑦層下面	1.6	2.1～	0.05	
134	落込み	01-54	01-3	F14h1-1・2	⑦層下面	3.7～	6.7	0.1	
135	落込み	01-55	01-3	F13h10-1	⑦層下面	0.5	1	0.12	
136	落込み	01-56	01-3	F13h10-1	⑦層下面	0.8	1.2	0.06	
137	落込み	01-57	01-3	F213h10-1	⑦層下面	0.5～	0.9	0.11	
138	落込み	01-58	01-3	F14h1-2・3	⑦層下面	0.6～	1.3	0.14	
139	河道	01-60	01-3	F13i10-1・2・3	⑦層下面	8.4～	11.2～	0.6～	
140	落込み	01-5	01-4	F13h-3・4 F13h7-1・ 2・3・4 F13i6-3・4 F13i7-1・2・3・4	⑦層上面	8.5	16～	0.17	
141	炉跡	01-6	01-4	F13h6-1	⑦層上面	1.4～	3	0.23	
142	落込み	01-7	01-4	F13i7-2	⑦層下面	0.4～	1.3	0.09	
143	落込み	01-8	01-4	F13i6-3	⑦層下面	0.3	0.4	0.05	
144	落込み	01-9	01-4	F13i6-4	⑦層下面	0.2	0.3	0.04	
145	木の根痕	01-10	01-4	F13i6-4	⑦層下面	0.2	1.3	0.07	
146	木の根痕	01-11	01-4	F13i6-4	⑦層下面	0.5	3	0.04	
147	落込み	01-12	01-4	F13i6-3	⑦層下面	0.7～	1.2～	0.1	
148	炉跡	01-13	01-4	F13i7-1	⑦層下面	1	1.2～	0.09	
149	炉跡	01-14	01-4	F13i7-1	⑦層下面	0.9	1	0.06	
150	落込み	01-15	01-4	F13i7-1・2・3・4	⑦層下面	2.3	4	0.19	
151	落込み	01-16	01-4	F13h7-2	⑦層下面	1.1	1.4	0.12	
152	落込み	01-17	01-4	F13h7-1・2	⑦層下面	0.9	2.5	0.14	
153	落込み	01-18	01-4	F13h7-1	⑦層下面	0.2	1.2	0.16	
154	炉跡	01-19	01-4	F13i7-1	⑦層下面	0.6	1.1	0.18	
155	焼土	01-21	01-4	F13h6-4	⑦層下面	0.2	0.4		
156	落込み	01-22	01-4	F13g6-3	⑦層下面	0.6	1.2	0.05	
157	落込み	01-23	01-4	F13h6-4	⑦層下面	0.2	0.5	0.07	
158	落込み	01-27	01-4	F13h7-1	⑦層下面	0.4～	0.6	0.08	
159	落込み	01-28	01-4	F13h7-1	⑦層下面	0.5	0.5	0.07	
160	落込み	01-29	01-4	F13h7-1	⑦層下面	0.2	0.7	0.08	
161	落込み	01-30	01-4	F13h7-1	⑦層下面	0.3	0.8	0.08	
162	炭集中部	01-59	01-4	F13g6-3	⑦層下面	0.6	0.7	0.09	
163	木の根痕	01-95	01-5	F13i4-3 F13i5-2	⑦層下面	0.9	1.7	0.28	
164	木の根痕	01-96	01-5	F13i4-3 F13i5-2	⑦層下面	0.4	1.9～	0.31	
165	木の根痕	01-97	01-5	F13i4-1	⑦層下面	0.3	1.5	0.18	
166	木の根痕	01-98	01-5	F13h4-3	⑦層下面	0.6	1.1	0.01	
167	落込み	01-99	01-5	F13i4-2	⑦層下面	0.6	1.4	0.12	
168	落込み	01-100	01-5	F13i4-4	⑦層下面	1.1	1.5	0.14	
169	落込み	01-101	01-5	F13i4-1・4	⑦層下面	0.5	1.6	0.16	
170	落込み	01-102	01-5	F13h4-3	⑦層下面	0.3	0.7	0.11	
171	落込み	01-103	01-5	F13h4-4	⑦層下面	0.5	0.9	0.16	
172	落込み	01-104	01-5	F13h4-3 F13h5-2	⑦層下面	1～	5.7～	0.12	
173	落込み	01-105	01-5	F13h3-4 F13i4-1 F13i4-1	⑦層下面	0.5～	9.1	0.02	
174	落込み	01-106	01-5	F13j4-1	⑦層下面	1.2	2.6	0.19	

### 6.3 出土した遺物

各調査区の⑥層下層～⑦層からは縄文土器・サヌカイト片をはじめとする遺物が出土している。水流等による摩滅を受けた形跡がみられないことから、二次堆積資料とは考えられない。出土した土器の編年的位置づけは千葉豊氏の編年研究（千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』72巻6号1989年）を参考とし、当該遺跡出土の土器の大半は北白川上層式2期にあたる。また、ここには、口縁部が残存する個体、器面に文様がうかがわれる出土土器をすべて掲載した。サヌカイト製石器・剥片・石核については出土品のすべてを掲載し、礫石器については使用痕跡の明確なもののみを選択的に掲載している。

#### 【01-1～5調査区遺構出土遺物】（図6.14,15）

落込み01-43から出土した6.14-1は、胴部外面に縄文を施す個体である。胴部が直立する形態から深鉢の可能性が高い。土坑01-36から出土した6.14-2は、深鉢の底部である。平底で、胴部下半で器体がくびれ外方に立ち上がる特徴をもつ。01-177から出土した6.14-3は、口縁部を肥厚させ、外面は条痕による調整で仕上げられる。

6.14-4～7と6.15-1～3は、いずれも炉跡01-6からの出土品である。6.14-4は胴部外面を条痕で調整する深鉢。6.14-5は2条沈線文を描き、内部に縄文を施す深鉢で、内・外面がヘラミガキ調整で仕上げられる。3～5は生駒西麓の胎土である。6.14-6は口頸部が大きく外傾する深鉢で、肥厚させた口縁部の外面に縄文が施される。

6.14-7は舟形土器である。器形は平面が楕円形、断面形状は半球状を呈する。器面は丁寧なヘラミガキ調整で仕上げられる。大阪府下では東大阪市縄手遺跡・和泉市仏並遺跡などで類似品が出土している。本例を含め、いずれも縄文時代後期の所産である。

6.15-1は小型石棒である。素材は、節理の発達する黒色岩で、いわゆる「粘板岩」の範疇で捉えうるものである。全体を丁寧に研磨し、先端部は丸く仕上げる。縦位に割れており、意図的に打撃して破壊させた可能性がある。6.15-26・3は、いずれも原礫面を残す剥片に細部加工を施した石器である。とくに6.15-3の両側縁には、規則的な剥離痕がみられ、長い刃部がつくりだされている。

6.14-8～10は、屋外炉を形成する一連の遺構である炉跡01-14・落込み15からの出土品である。口縁部を肥厚させる深鉢である。外面は条痕調整を行う。9は口縁部を肥厚させる深鉢である。縁帯部下に沈線を刻む。頸部は条痕調整である。10は口頸部から口縁部にかけて大きく外反する深鉢である。縁帯部に縄文を施す。頸・胴部は条痕による調整を行う。生駒西麓の胎土である。11は口縁部が内傾する深鉢である。口縁部を肥厚させ、縄文を施す。

#### 【01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土土器】（図6.16,17,18）

6.16-1は口縁部を「く」の字に屈曲させ、突起を付す深鉢である。内・外面は条痕による調整を行い、口縁部・口頸部・突起部に縄文を施す。6.16-2～6は口頸部が外反する鉢である。口縁部端部は丸く仕上げる。6.16-3～5は口縁端部まで縄文を施す。6は生駒西麓の胎土である。3条沈線を口縁部から胴部にかけて文様を描き、口縁部内面にも沈線を施す。

6.16-7～9は鉢の平底部である。8・9は生駒西麓の胎土である。6.16-7は内・外面をヘラミガキ調整で仕上げる。6.16-10は口頸部がやや内弯し、外面に沈線を施す。6.16-11～14は胴部外面に縄文を施す深鉢である。6.16-11・13は生駒西麓の胎土である。

6.16-15～17は深鉢の口縁部である。6.16-15・16は生駒西麓の胎土である。6.16-15は2条の沈線内部に縄文を施す。6.16-16は口頸部外面を縄文で調整し、横位と蛇行する沈線を施す。口縁部内面は1条の沈

線をめぐらす。6.16-17は2条沈線内部に縄文を施す。6.16-18～27は2条沈線文を描き、内部に縄文を施す。6.16-20～27は生駒西麓の胎土である。

6.17-1～6は口縁部外面に平行する沈線を施す深鉢である。6.17-1・3・5は生駒西麓の胎土である。6.17-1は口頸部外面に6条の沈線、口縁部内面に1条の沈線を施す。6.17-3は外面に弧状文を施す。v 4・6は口縁部が内へ屈曲する波状口縁であり、口縁部外面に平行する沈線を施す。6.17-5の口縁部は大きく外傾する。口縁端部は面をつくり、2条沈線を施す。

6.17-7～12は口頸部に垂下条線文を施した深鉢である。6.17-7・8は生駒西麓の胎土である。6.17-7・12は口縁部を肥厚させ、その外面に縄文を施す。6.17-8は2次焼成をうけ、外面が赤変する。6.17-13は波状口縁をもつ深鉢である。口頸部は大きく外反し、波頂部から垂下する粘土帯を貼付する。生駒西麓の胎土である。

6.17-14～32は平縁の口縁部をもつ深鉢である。口縁部を肥厚させ、その外面に縄文を施す。6.17-14・17・18・30～32は生駒西麓の胎土である。6.17-28～30は縁帯部下に沈線を施す。6.17-32は口頸部が強く外反し、胴部外面に縄文を施す。6.17-34～36は深鉢胴部である。外面に縄文を施す。

6.18-1～10は口頸部が外反する粗形の深鉢である。6.18-1・2・5は口縁端部まで条痕による調整を行う。6.18-2・5・9は口縁部をやや肥厚させ、端部を丸くおさめる。6.18-11～19は平底の深鉢底部である。6.18-11・17は底部を肥厚させ、立ち上がりは大きく外反する。15の外面は2次焼成により一部赤変する。16は生駒西麓の胎土である。底部から直線的に立ち上がる。6.18-20・21は突帯を付す深鉢である。口縁部を突帯状に肥厚させ、刺突文を施す。口頸部には沈線をめぐらす。6.18-21は胴部に突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施す。内外面は条痕調整を行う。

#### 【01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土石器】(図6.19,20)

6.19-1～7は、横長のサヌカイト剥片の側縁に二次加工を施して刃部を作り出した石器である。6.19-2・4・5は背面に原礫面を残す。6.19-20は外形が五角形を呈す。6.19-2～7の外形は様々な形状を呈するが、いずれも刃部長が約7cmという規格性がうかがわれる。平面形態の多様性にもかかわらず、一定の機能目的を製作された一群と考えられよう。

6.20-1～3は、縦長のサヌカイト剥片の側縁に二次加工を施した石器である。両側縁に連続的な剥離調整を施し、刃部を作り出す。これら3点にも、類似した形態・製作手法が看取でき、共通の機能目的のもとに製作されたと考えられる。

6.20-4・5はいずれも不整形な形状であるが、上記2種同様にサヌカイト剥片を二次加工してつくられた石器である。ただし、調整剥離の単位は粗雑で規則性も希薄である。ただ、側縁長は上記2種の剥片石器に類似しており、同様の意図のもとに製作された石器の可能性はある。

#### 【01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土サヌカイト石核】(図6.21)

6.21-1～4は原礫面を残す石核である。石核はいずれも肉厚で、多方向に打ち割られ、幅3～7cm程度の剥離面が残る。これらの石核は2・4・5調査区で出土している。これは剥片が多く出土する調査区と一致しており、石核に伴って剥片が出土している。剥片の出土が少なかった01-1・3調査区から石核は出土していない。

#### 【01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土サヌカイト剥片】(図6.22・23・24・25・26)

図6.22・23・24・25・26に掲載したものはサヌカイト剥片である。6.22-1～4は、原礫面を大きく残し、剥離面が粗く大きな大型剥片である。図6.19・20に掲載した石器よりも大きな剥片で、これらをさらに

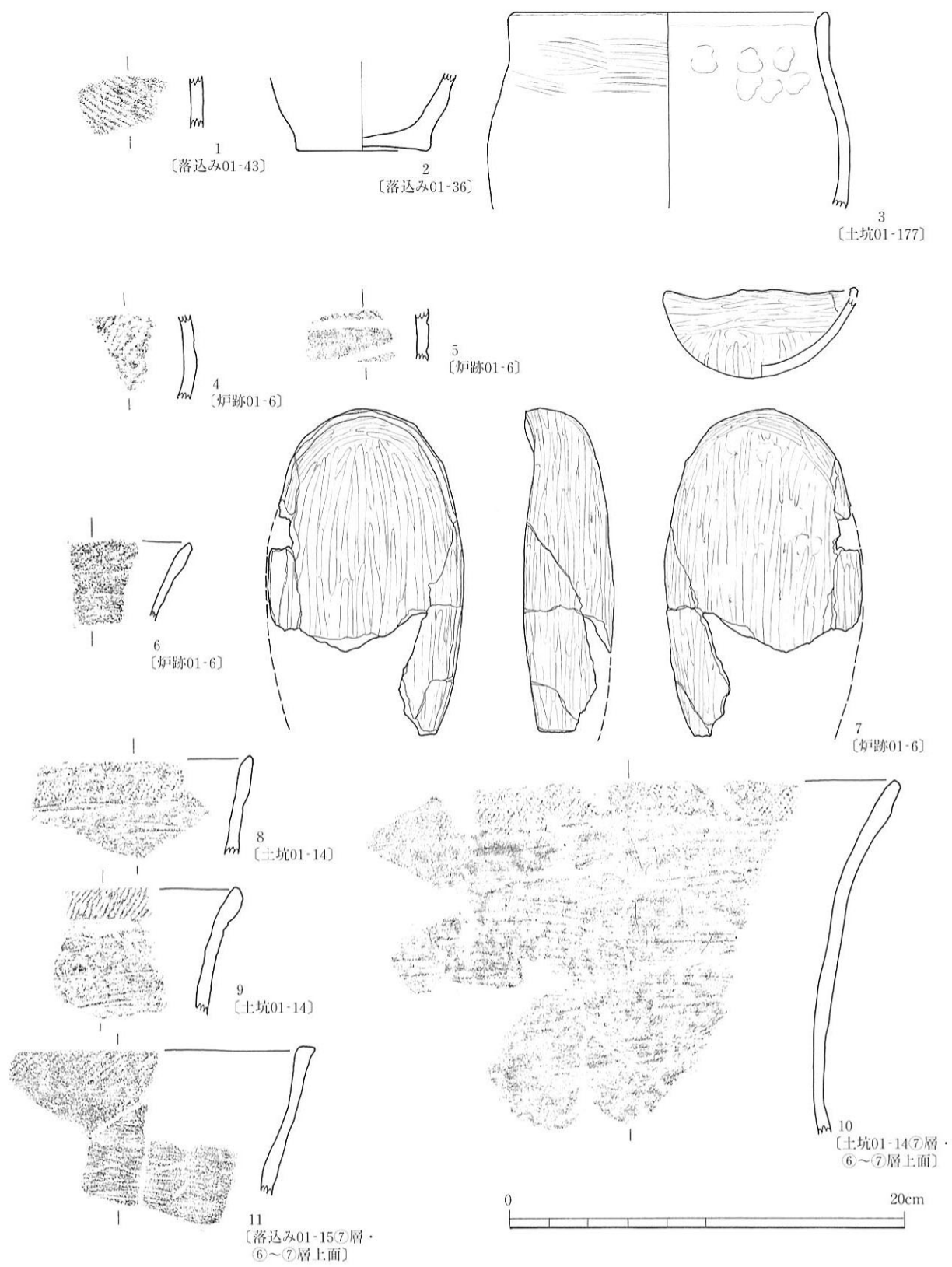


図6.14 01-1~5調査区各遺構出土土器 (1/3)

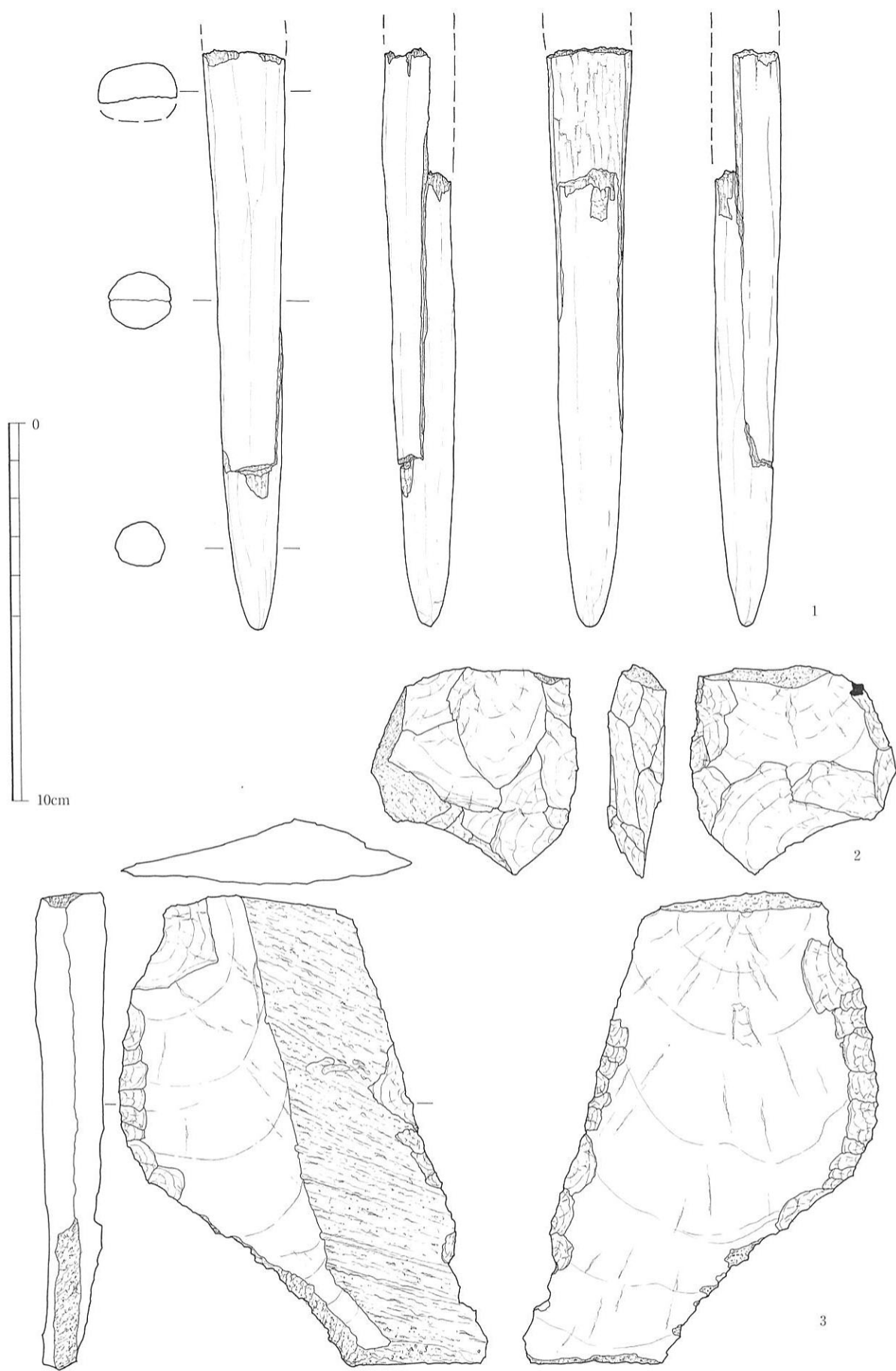


图6.15 01-4調査区炉跡01-6出土石製品 (2/3)

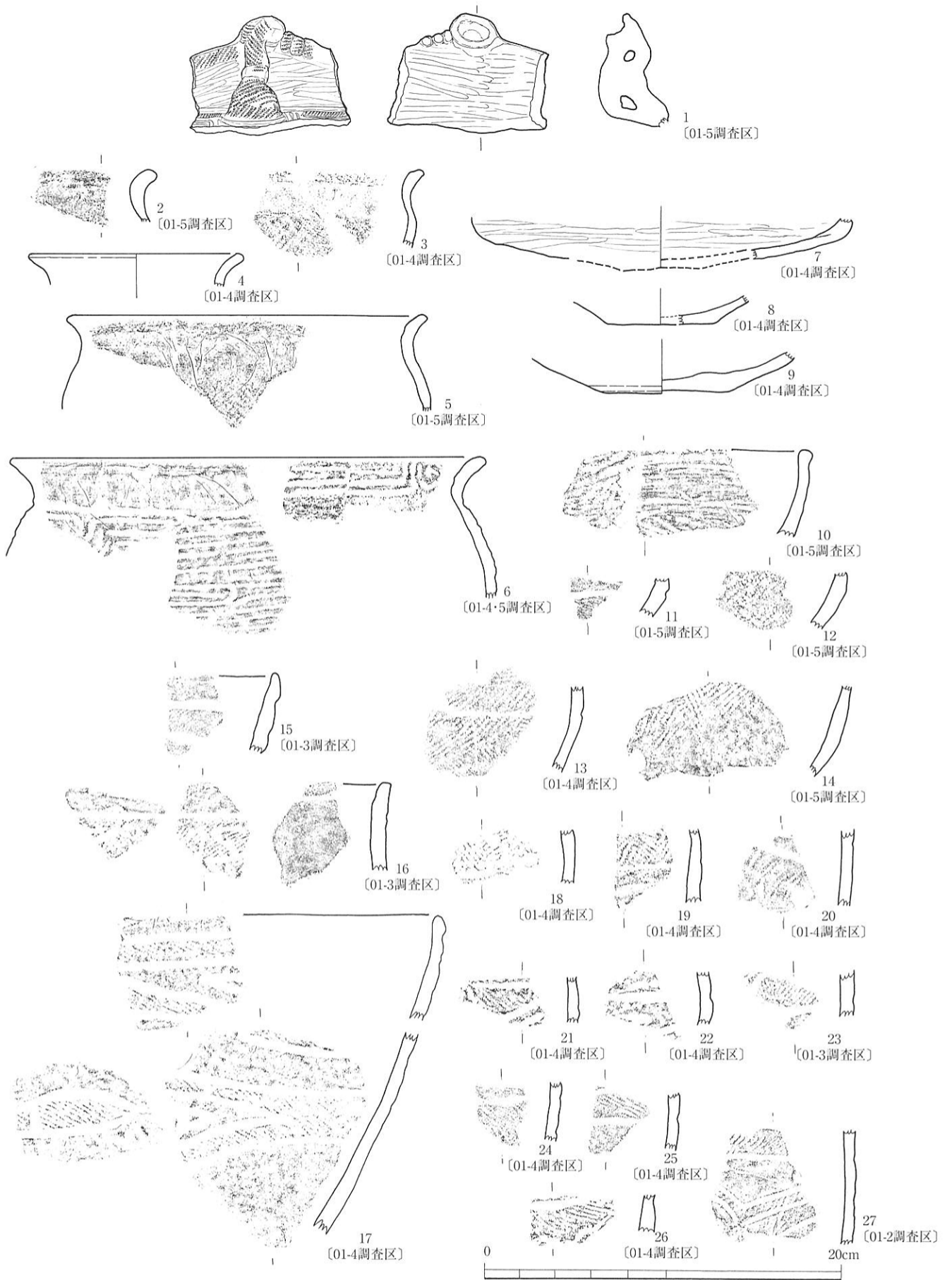


図6.16 01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土土器 (1/3)

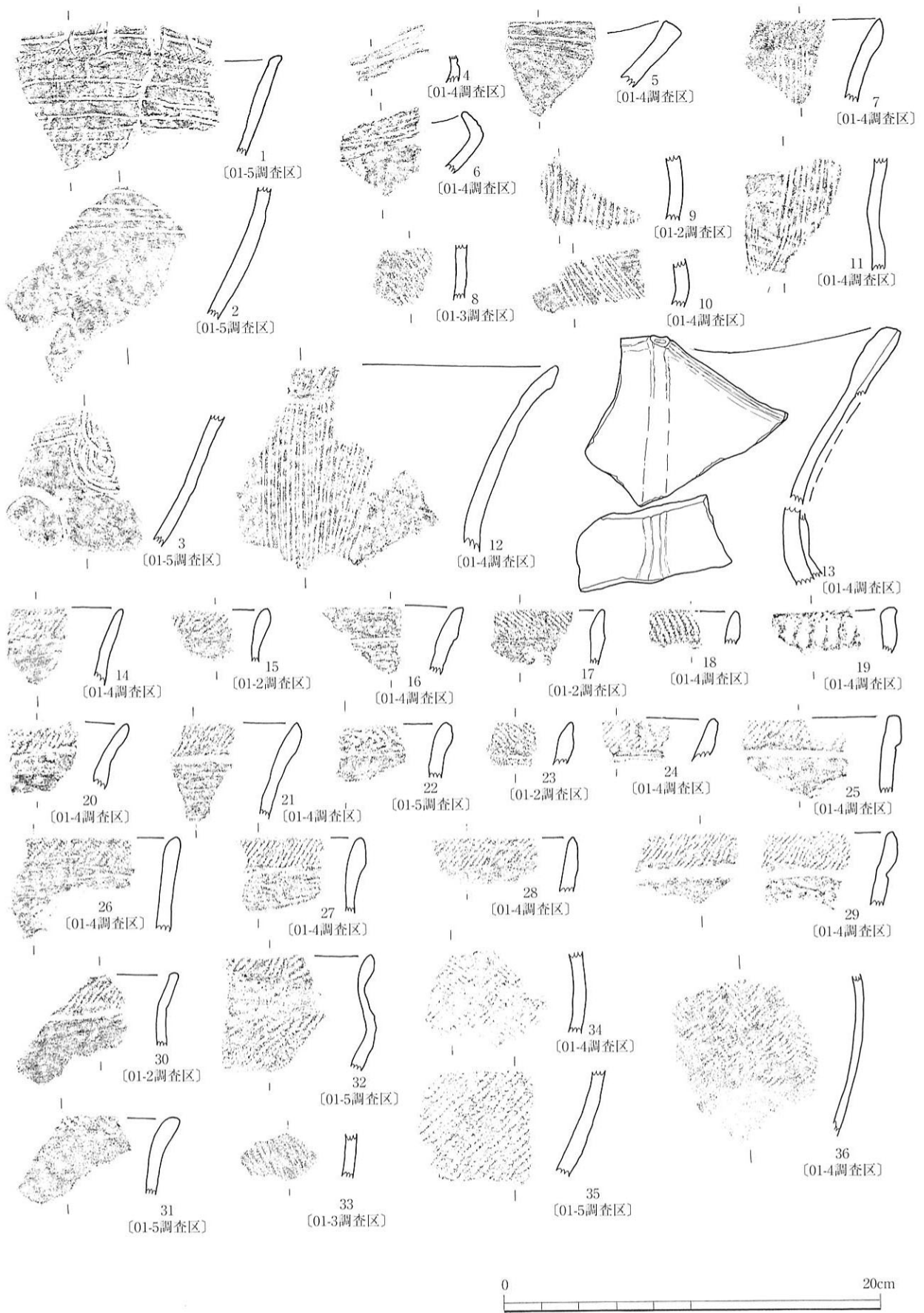


図6.17 01-1~5調査区⑥層下部~⑦層出土土器 (1/3)



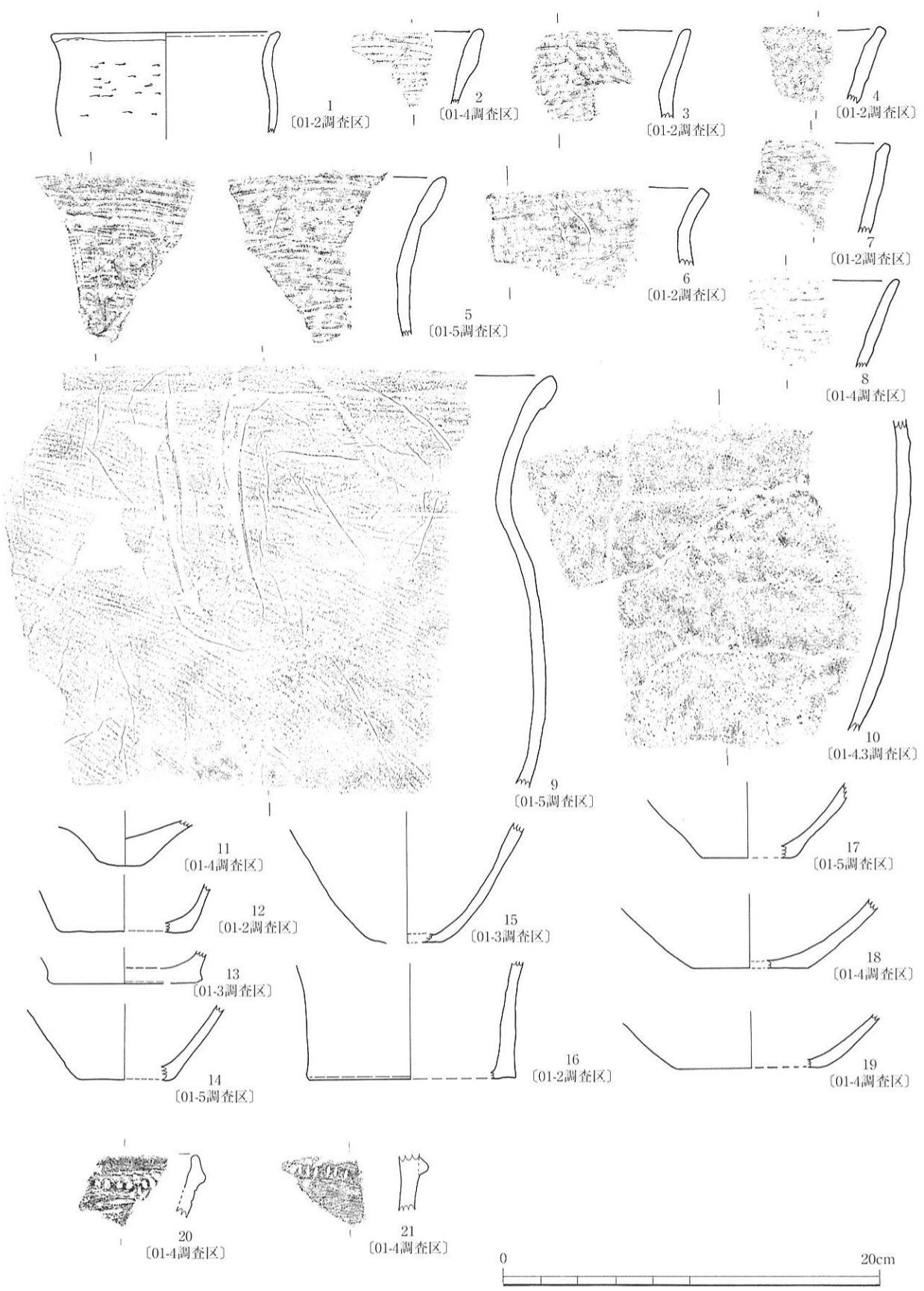


图6.18 01-1~5調査区⑥層下部~⑦層出土土器 (1/3)

打割して上記のような剥片石器に仕上げたのかもしれない。剥片素材の一種とも考えられる。

図6.23～26に掲載したものは、中小型の剥片類である。図6.23・24・25には横長もしくは平面形態が台形様の剥片を、図6.26には縦長形態の剥片をそれぞれ掲載している。いずれの形態でも、幅長が3～7 cmのサイズのものがある。このサイズは、図6.21に掲載した石核の剥離面規模のバリエーションにほぼ相当する。おそらく上記石核のような拳大のサヌカイト礫を母岩とする剥片類と考えられる。

これらのうち幅長が7 cm前後のものは、側縁に細部加工を施せば、図6.19・20に掲載したものと同様の石器に仕上がる剥片である。いわば、上記石器の最終加工直前の剥片といえよう。幅長が5 cmを下回る剥片については、二次加工した個体が存在しないことから、幅長7 cm前後の剥片を採取する過程で発生した屑片と考えられる。

当遺跡から出土したサヌカイト石器には石鏃・石匙などの定型的小型品は1点も見当たらない。しかし、石器・剥片・石核の様相を総合すると、幅長7 cm前後の剥片を拳大の原礫から採取し、細部加工を施して刃器・削器を作り出そうとした行為が復元できる。つまり、定型のサヌカイト素材をもとに、特定の器種を意図的に作り出そうとしていたことがわかる。しかも、後述するように遺構や土器密集地点でこれらの剥片・石核・石器が多く出土することは、こういった石器製作が生業上のある目的のもとに行われていた可能性を示唆している。

#### 【01-1～5調査区⑥層下部～⑦層出土礫石器】(図6.27・28)

6.27-1～5は円柱状の砂礫岩である。6.27-1・2は先端部に、6.27-4・5は背・腹面に敲打痕が残ることから、敲石として使用されていたと考えられる。6.27-3は、外面が被熱して黒化した楕円球形の礫である。炉石として使用された可能性がある。6.28-1～3は扁平な形状の円礫である。顕著な敲打痕、研磨痕はみられないものの、その形態から台石として機能した可能性がある。(木嶋・若林)

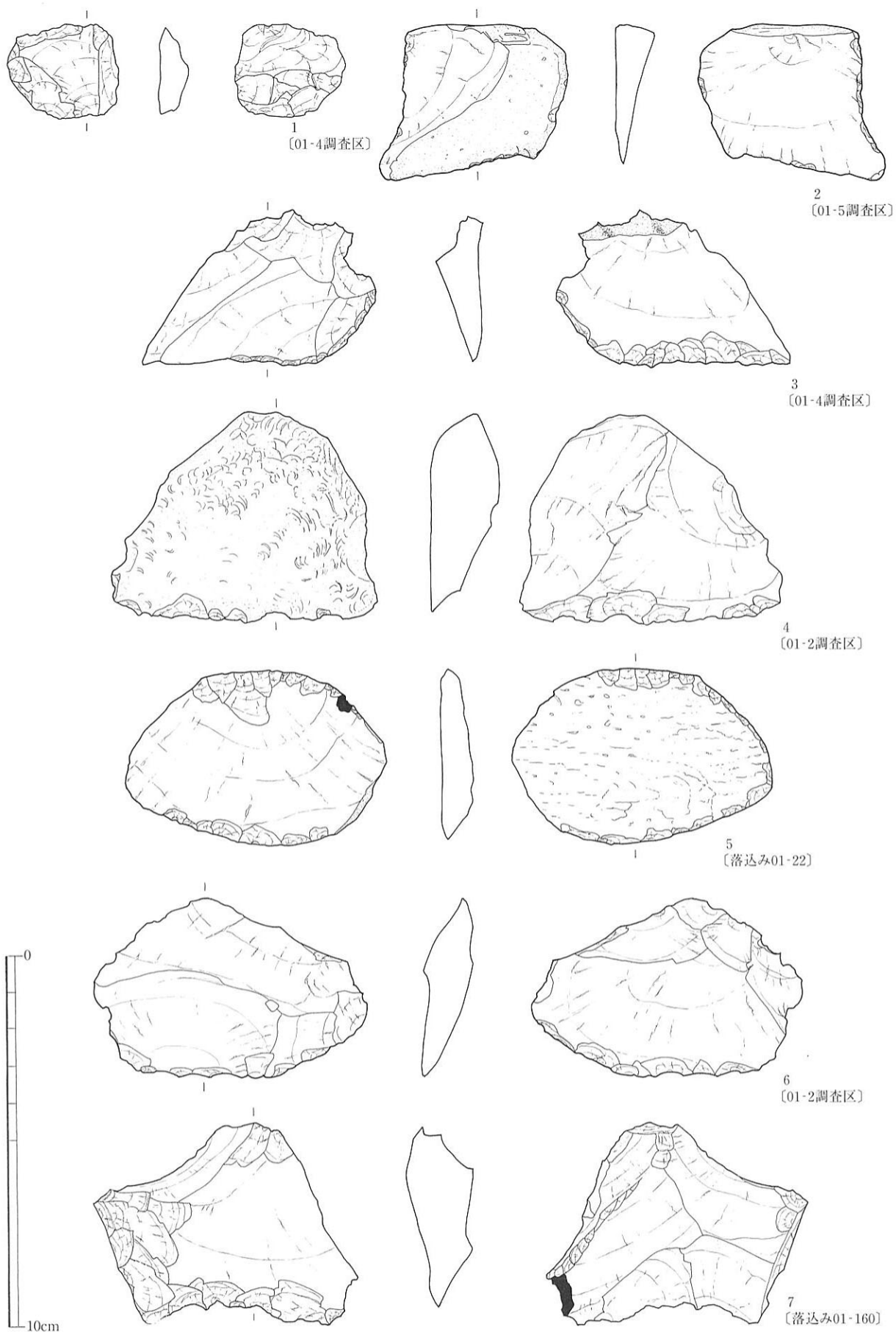


図6.19 01-1~5調査区⑥層下部~⑦層出土石器 (2/3)

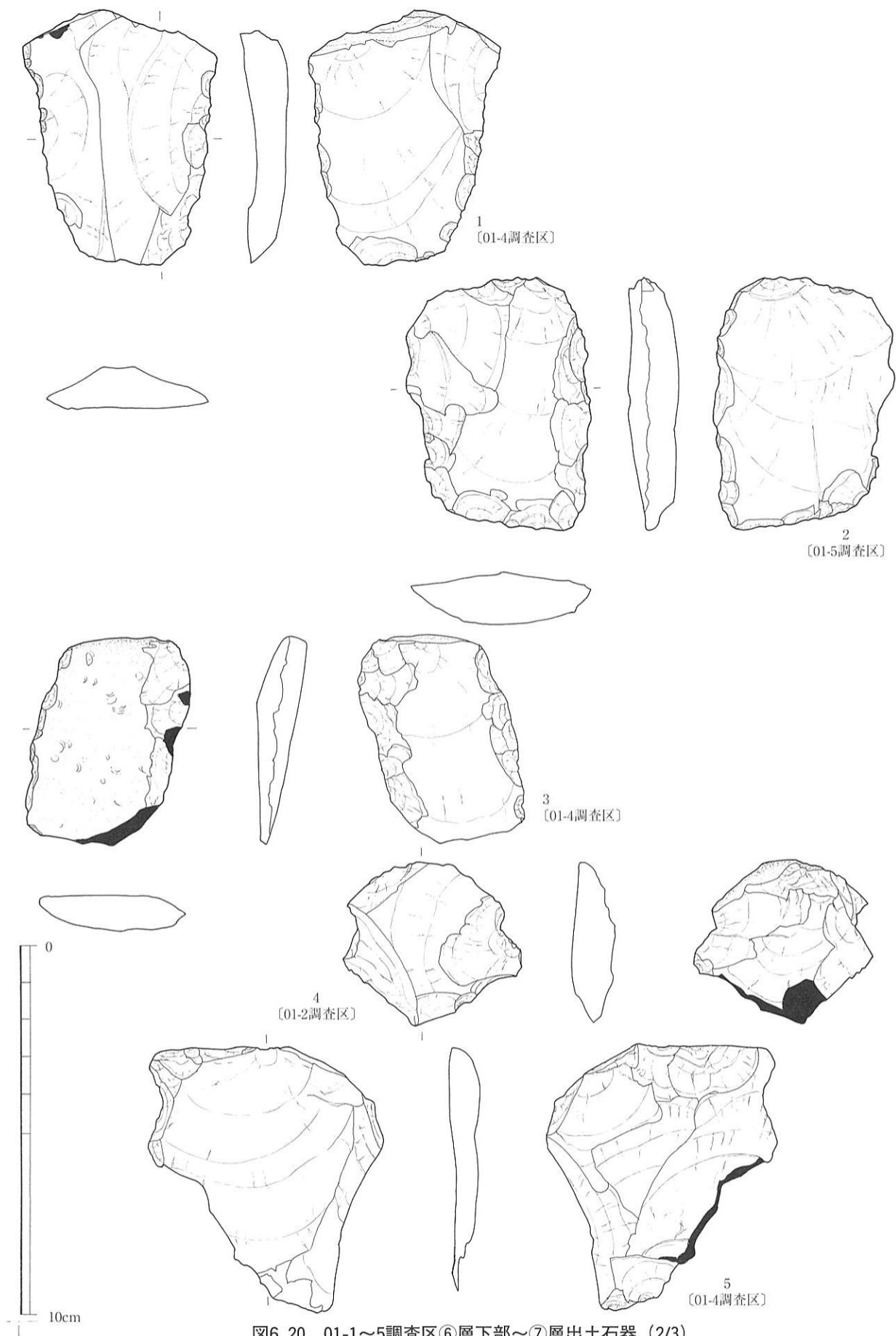


図6.20 01-1~5調査区⑥層下部~⑦層出土石器 (2/3)

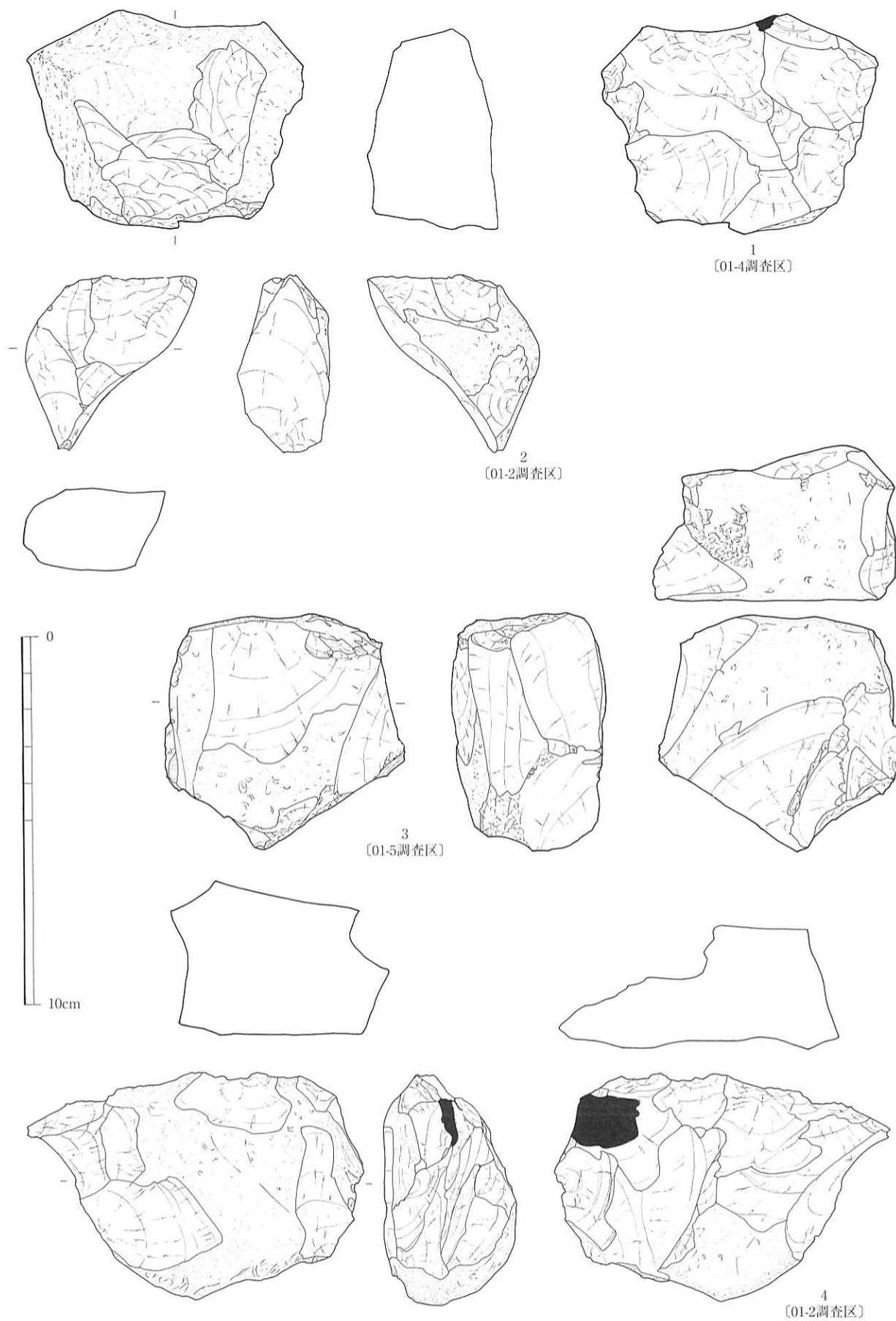


図6.21 01-1~5調査区出土の石核 (2/3)

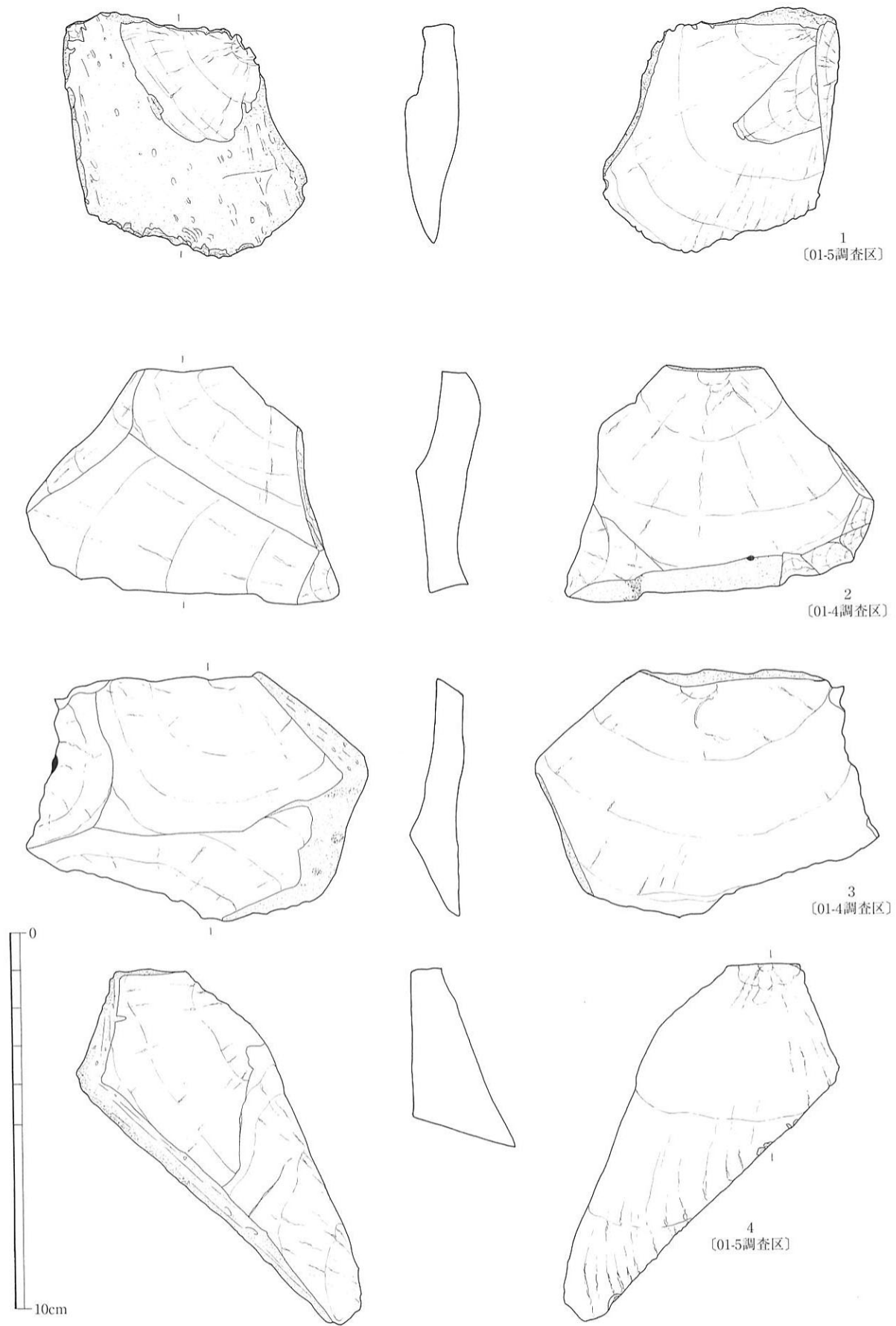


図6.22 01-1~5調査区出土オカサ石核・剥片 (2/3)

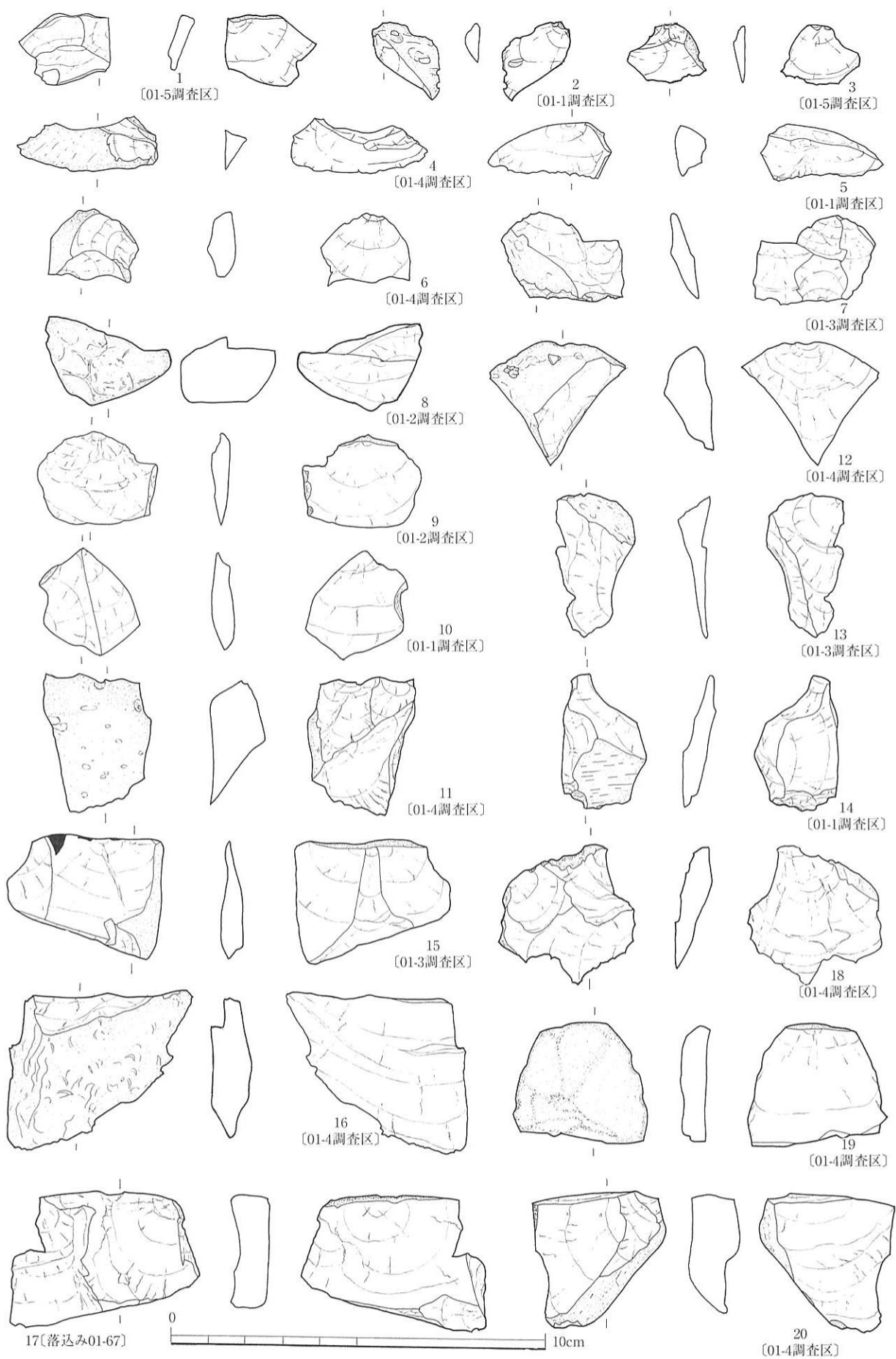


图6.23 01-1~5調査区出土サカト剥片 (2/3)

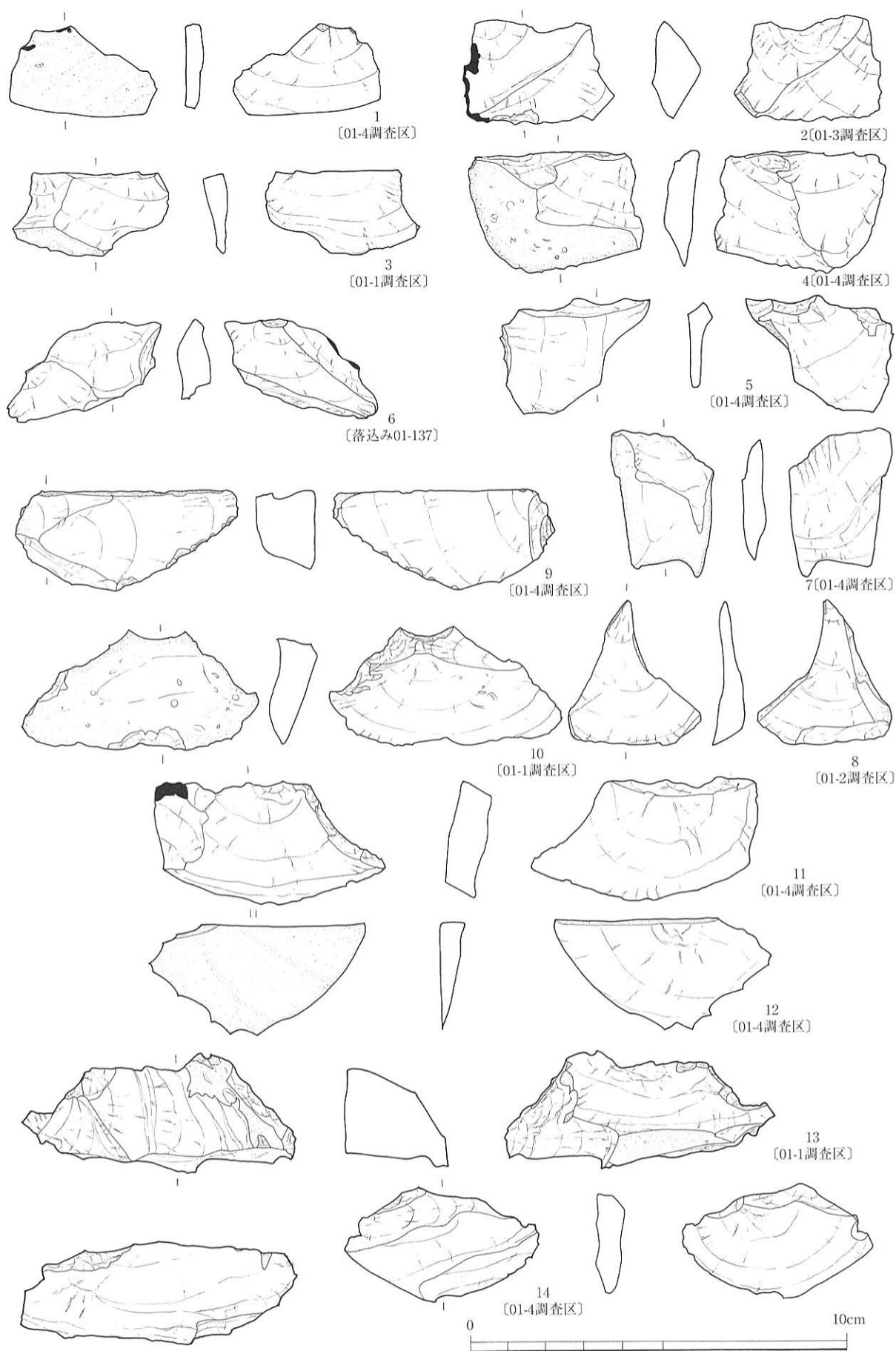


图6.24 01-1~5調査区出土サカト剥片 (2/3)



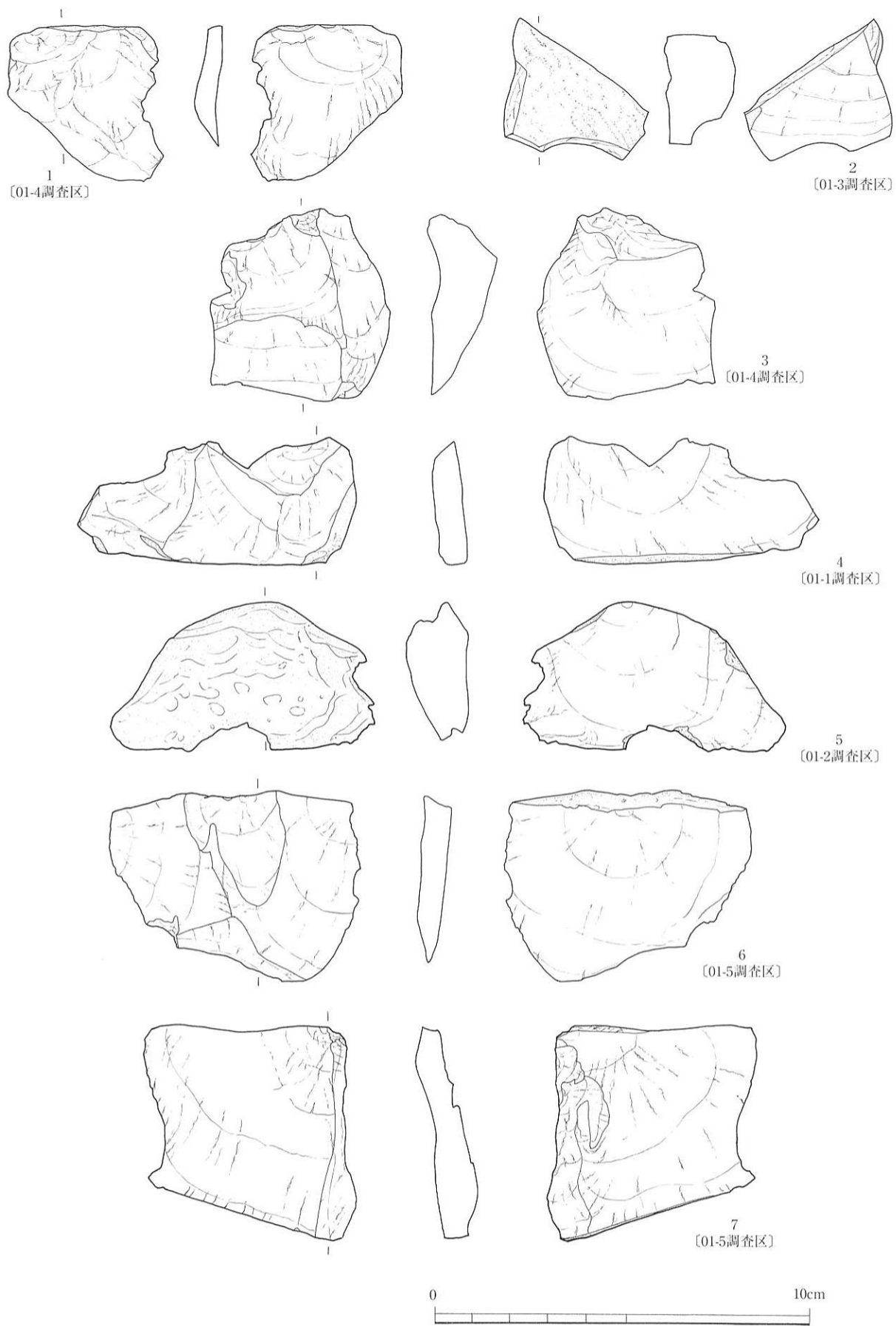


図6.25 01-1～5調査区出土物剥片 (2/3)

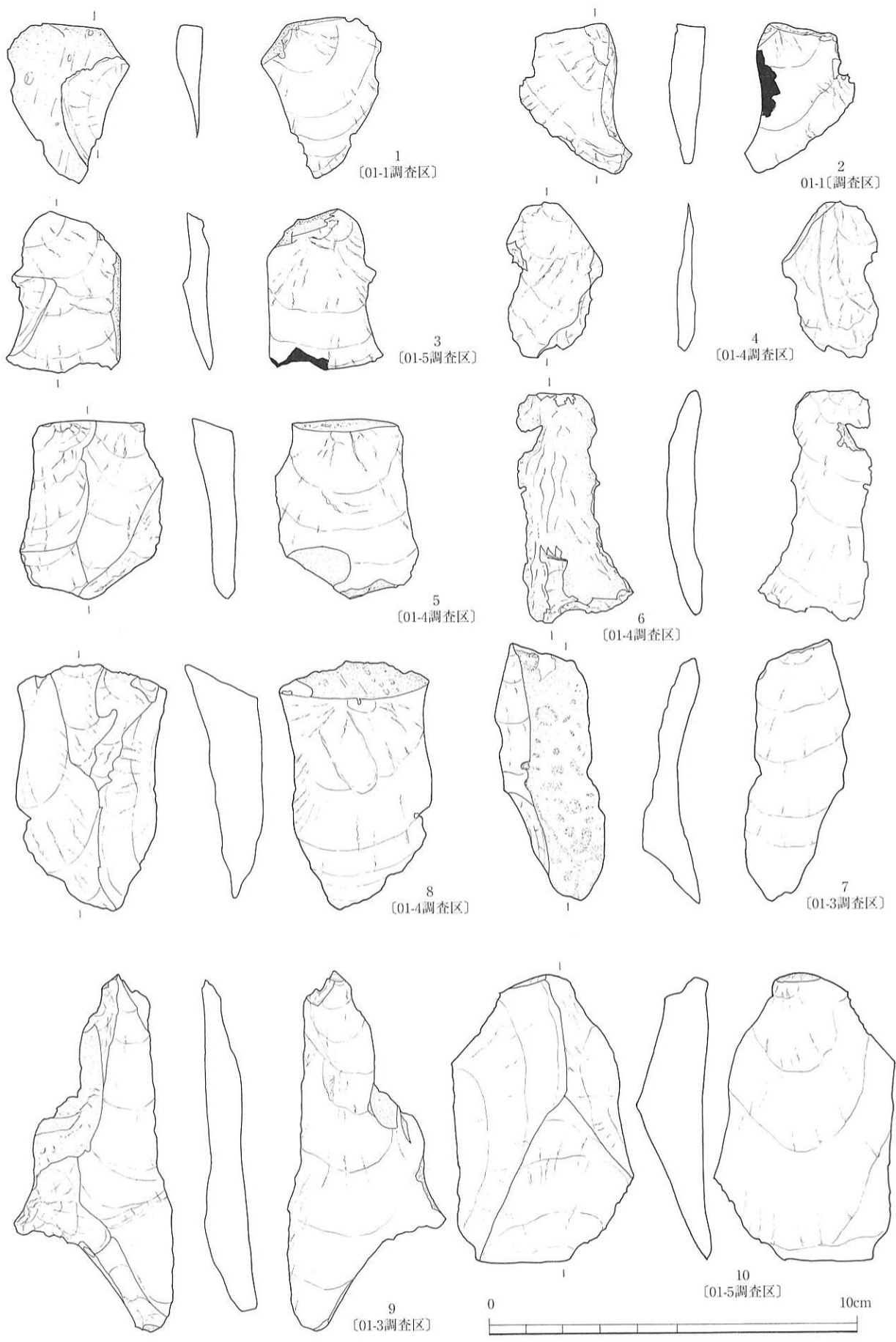


图6.26 01-1~5調査区出土サカト剥片 (2/3)

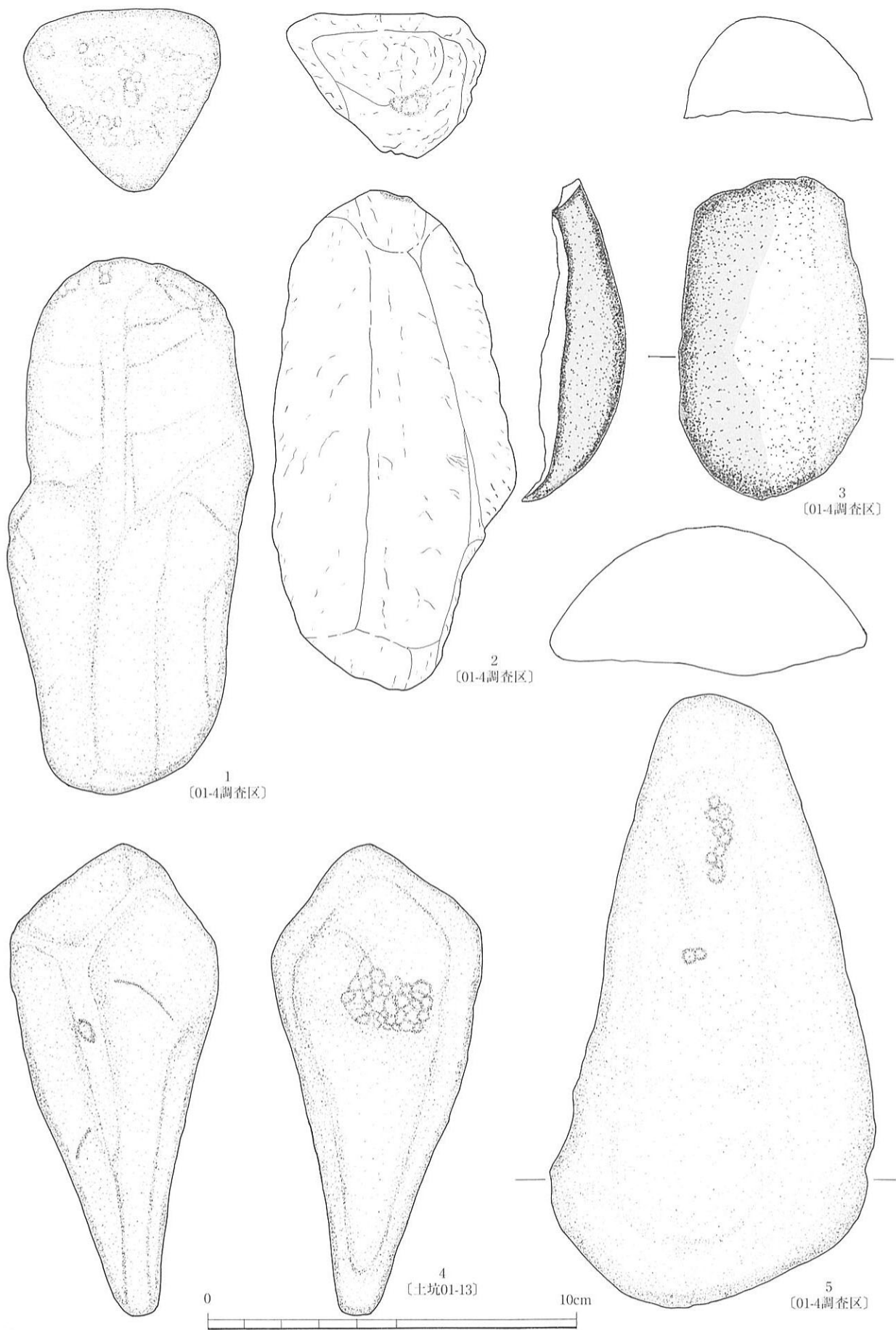


图6.27 01-1~5調査区出土礫石器 (2/3)

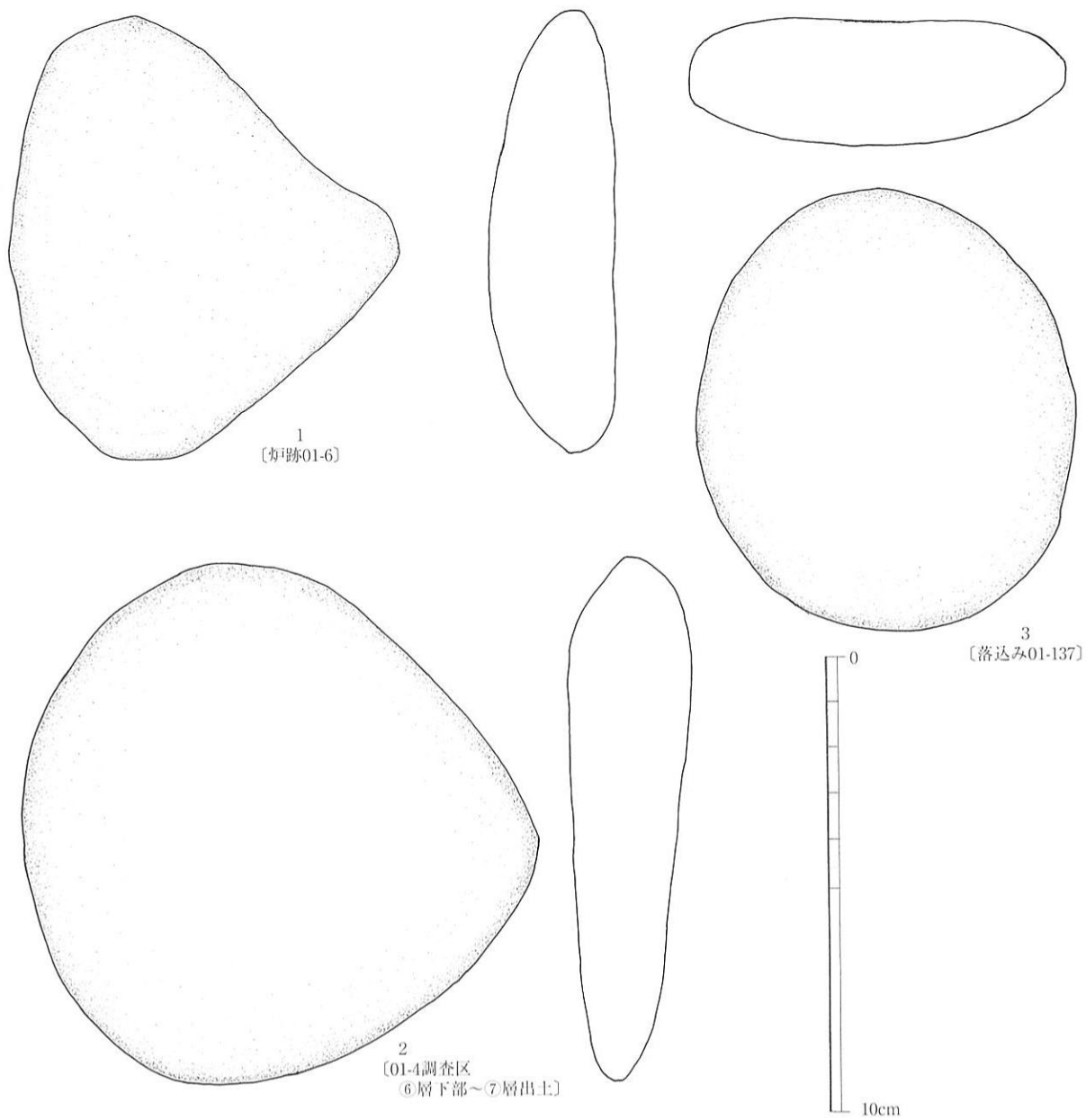


図6.28 01-1~5調査区出土礫石器 (2/3)

## 第7章 基礎分析 第1節 01-1～5調査区出土遺物の分布について

01-1～5調査区では、⑥層下層および⑦層から縄文時代後期の遺物が出土している。遺物は各調査区内でまとまって出土する地区と出土しない地区とに分けられる傾向にあることから、土器・サヌカイト・礫の各遺物の重量をもとに出土率の算出を試みた。遺物出土率は各調査区で5×5mの地区を方眼状に設定し、各地区内より出土した土器・サヌカイト・礫のそれぞれの重量を地区の面積で割って算出したものである。

【01-1調査区】(図7.1) 01-1調査区の出土遺物の特徴は、調査区の北部・南部で遺物の出土状況が異なる点である。南部を中心に土器・サヌカイトが出土しているが、土器は他調査区と比して3cm程の小さい破片が多い。遺物が出土する調査区南部は、小規模の落込みを多数検出した。その大半は自然形成によるものと思われるが、出土遺物の割合が比較的高いことや微高地であることを考慮すると活動ゾーンであった可能性があり、これらの落込みには人為的なものも含まれる可能性がある。調査区北部は南部に比べ遺物の出土量が少ない。これは遺物包含層である土壌化層が調査区南部では良好にみられるのに対し、北部では土壌化の作用が弱く、遺物の出土量も減少傾向にある。

遺物の出土状況から当該調査区より北は遺構の密度が稀薄になるものと思われる。また調査区南部の土器の出土傾向は、後述する01-2調査区南部の出土状況も考慮すると遺物分布は南域へ広がる可能性を示す。

【01-2調査区】(図7.2) 01-2調査区は、遺物の出土量が他の調査区と比して非常に少ないことである。特にサヌカイトの出土量が少ないことがあげられ、当該調査区域におけるサヌカイトの加工作業は消極的であったと想像される。土器は調査区の北東端部でまとまって出土し、その大半は落込み01-137からである。周囲より人為的な遺構は検出されていないが、遺物の出土状況から遺構は北東方向に広がる可能性がある。

炉跡01-139およびその周囲からの遺物の出土量は、調査区北東部に比べ低い。遺物が集中して出土する01-4調査区の炉跡01-6や炉跡01-13・14と比して対照的である。これは炉跡の断面観察から01-4調査区の炉跡の使用頻度が高いことがあげられる。炉跡の使用頻度と土器の出土量は比例するようであり、炉跡01-139は使用頻度が低く、遺物の出土量も少ない。土器の出土範囲は広域に広がっているが、まとまった出土は調査区北東部に限定される。これは人の活動ゾーンを反映するものと推測され、調査区北東部以外では活発な活動を認めることはできない。ただ01-1調査区南部の遺物の出土比率を考慮すると、調査区の以南に活動ゾーンが広がる可能性がある。

【01-3調査区】(図7.3) 01-3調査区は、土器の出土域が偏ることなく出土している。この状況は先述した01-2調査区の状況と類似するものであり、土器も比較的小さい破片が出土する。調査区南部では落込みが多数みられる。大半は自然形成されたものであろうが、これらの落込みからは少量だが土器が出土していることから、人為的なものも含まれている可能性がある。

当該調査区では炉跡01-53を検出したが、その周囲から遺物はあまり出土していない。これは01-4調査区の炉跡01-6・13・14のように遺構を中心に周囲から遺物が出土する状況と対照的である。遺物の出土域が炉跡01-53よりも以北に広がる可能性も考えられる一方で、炉跡01-53が他の炉跡と比して使用頻度が少ないことが想定される。01-2調査区の炉跡01-139と同様に遺物出土量は使用頻度を反映したものであろう。

【01-4調査区】(図7.4) 01-4調査区は、遺物が炉跡およびその周囲より出土する割合が高い。

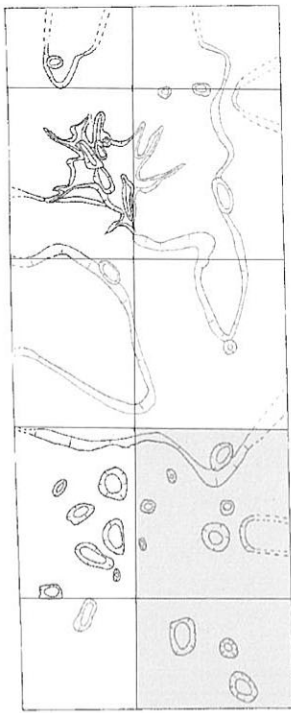
特に石核が炉跡01-6内外で計3点、これに伴う剥片が多数出土している。さらに剥片石器が5点出土しており、これは炉跡の外縁部やその周囲において調理および石器製作が行われていたことを示すものであろう。また礫は炉跡01-6の西側で多く出土しており、このゾーンが調理もしくは作業ゾーンであったことを示しているのではなかろうか。

炉跡01-6は、小型石棒や舟形土器などの特異な遺物が出土することから祭祀的なゾーンとしても利用されており、重要な位置を占めていた可能性が考えられる。炉跡01-6の南西に位置する炉跡01-13・14・19は、内部およびその周囲(落込み01-15)から遺物が多く出土しており、炉跡01-6とは対照的である。落込み01-15西側で土器が多く出土することから、活動ゾーンが炉跡の西側であった可能性がある。

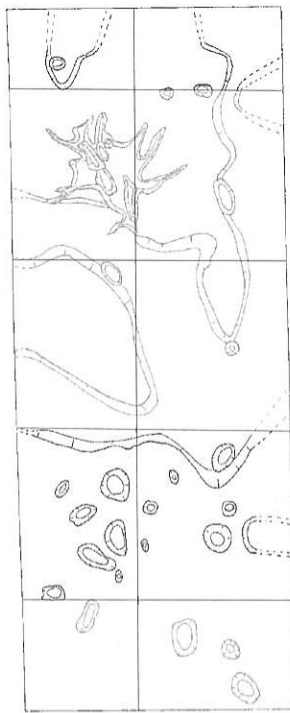
炉跡01-6と炉跡01-13・14は、サヌカイトと礫の出土状況に差異がみられる。礫の出土状況は両炉跡とも炉の内外で高い比率を示し、炉跡の周囲で礫を用いた作業が行われていたことが推定される。次に両炉跡のサヌカイトの出土状況をみた場合、その差は歴然とする。炉跡01-6の内外でサヌカイトの散布が認められるのに対し、炉跡01-13・14からのサヌカイト片の出土がその周囲を含めても皆無である。このことは炉跡01-6の周囲における活動に石器製作が含まれていたことを示唆する。また炉跡01-13・14は調理を主体とした利用がなされていた可能性がある。ただ炉跡の同時期、機能分化についての関係は不明である。サヌカイトの有無だけでなく、炉跡01-6より出土した舟形土器や小型石棒の特異な遺物は祭祀的な利用も行われていた可能性がある。

【01-5調査区】(図7.5) 01-5調査区では人為的な遺構は認められないものの、比較的多くの遺物が出土しており、調査区北東端部南西端部で土器・サヌカイト片が多く出土する。両地区とも石核や剥片石器が出土しており、活動ゾーンの存在を示唆するものであろう。またサヌカイト片の出土が顕著なため、石器の製作場が存在した可能性がある。当該調査区より東は、試掘調査の成果から遺物の出土範囲が広がらないことが明らかとなっている。

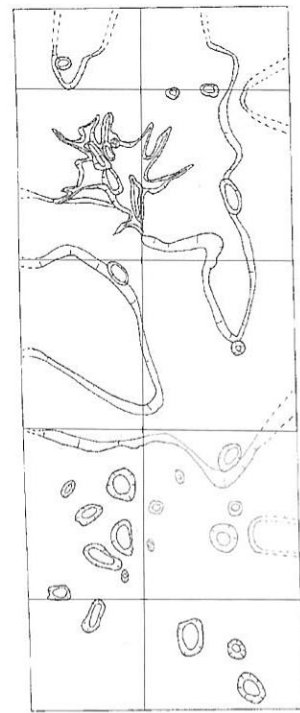
まとめ 遺物の出土状況と遺構の検出状況から活動ゾーンは01-3・4調査区が位置する自然堤防上が中心であったと考えられる。炉跡01-6・01-13・14が位置する地区は、出土遺物量が他地区と比して群を抜いている。これは東大阪市の縄手遺跡の住居跡とその周囲でもみられる状況であり、その領域での活動の頻度を反映したものであろう。炉跡01-53・01-139を含む周囲からの出土遺物が少ないのは、同種の炉跡でも使用頻度が低かったことによるものであり、遺物の出土比率に影響するものと考えられる。炉の周囲から出土するサヌカイト石核や剥片はその周囲における活動に石器製作が含まれていることを裏付けるものである。検出されたすべての炉の周囲で石器製作が行われていたのではなく、炉跡01-6と炉跡01-13・14のように炉によって利用目的が分化していた可能性も考えられる。今回の調査では定住的な集落が形成されていた痕跡を見出すことはできなかったことから、当該遺跡は石川周辺における狩猟・魚撈・採集活動の拠点となるキャンプサイト的な性格であったと考えられる。このようなキャンプサイトが石川の縁辺部に点在し、01-1・2調査区の以南、01-2調査区の炉跡01-139周辺、01-2調査区の北東域、01-3調査区の炉跡01-53周辺、01-3調査区の以南、01-4調査区の炉跡01-6・炉跡01-13・14周辺、01-5調査区の南部以南にその活動ゾーンが存在していた可能性が考えられ、水辺での生業活動が盛んに行われていたことが想像される。



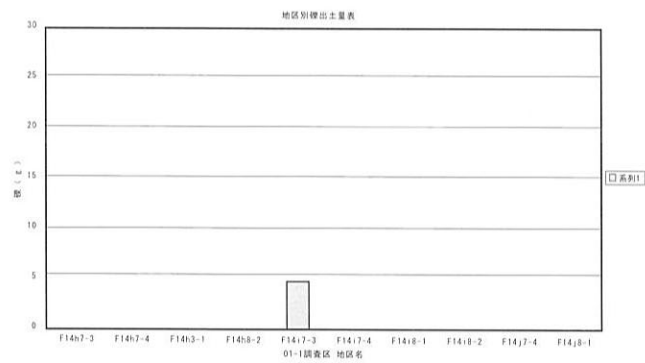
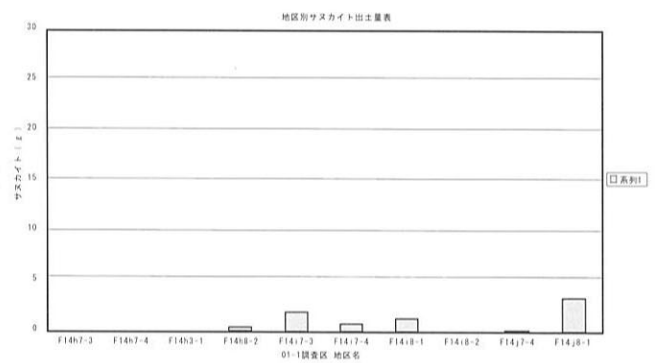
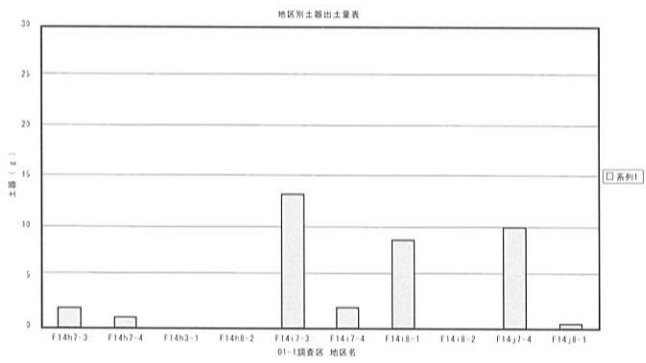
土器出土量



サヌカイト出土量

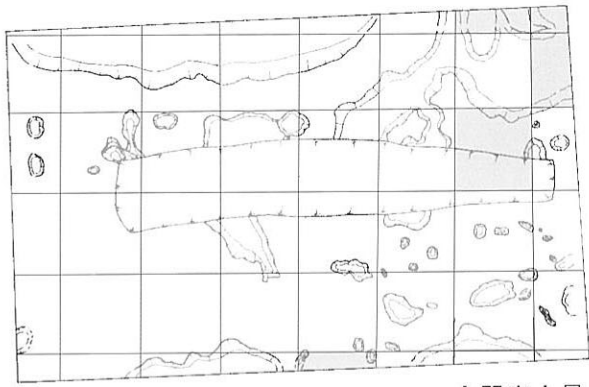


礫出土量

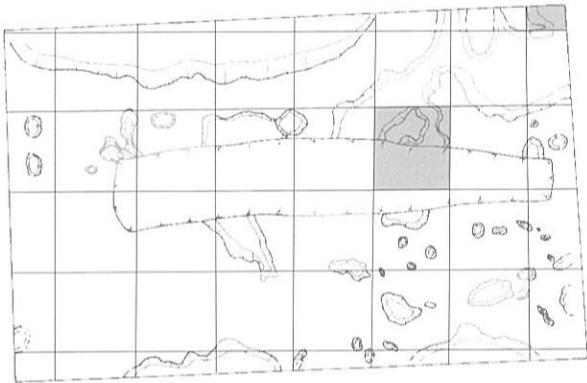
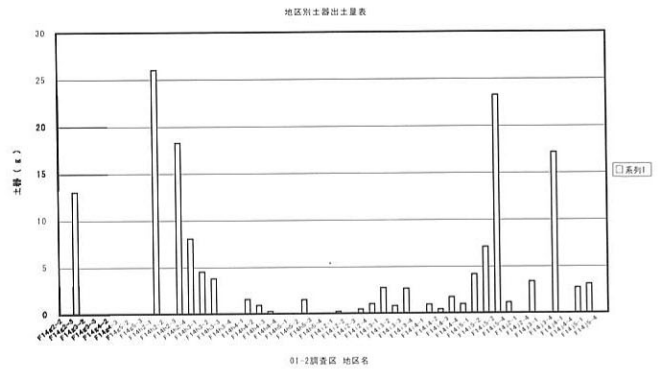


- 0g
- 10g以下
- 30g以下
- 30g以上 (1 m<sup>2</sup>中)

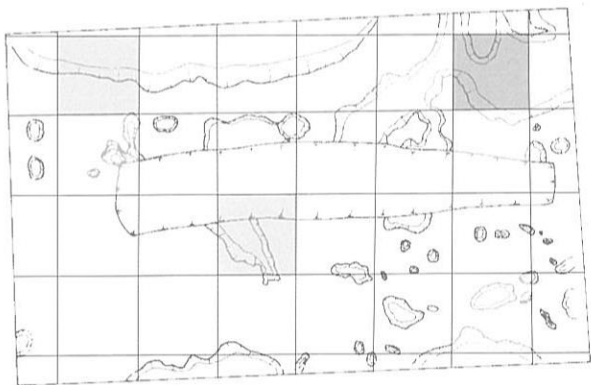
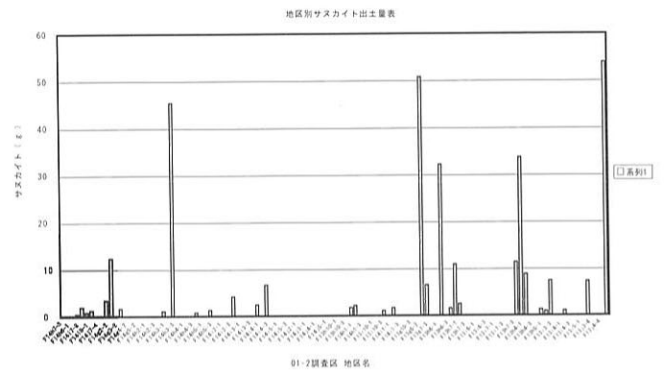
図7.1 01-1調査区遺物出土率分布図



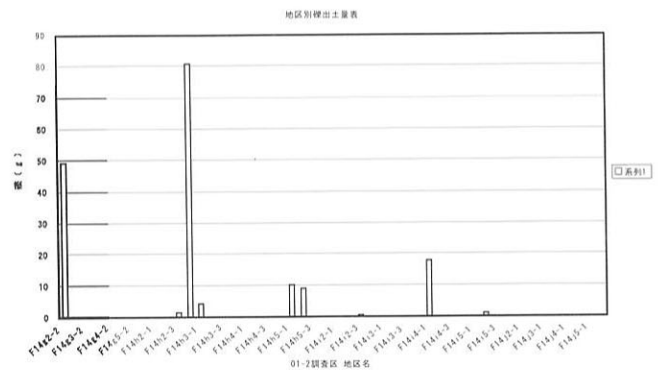
土器出土量



サヌカイト出土量



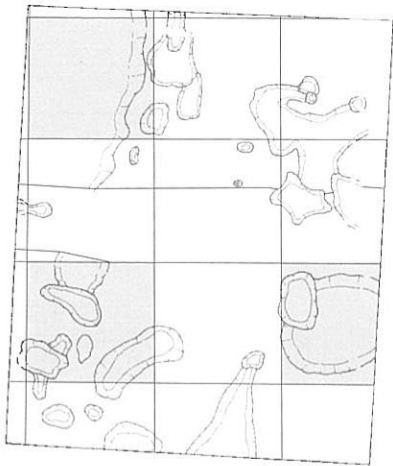
礫出土量



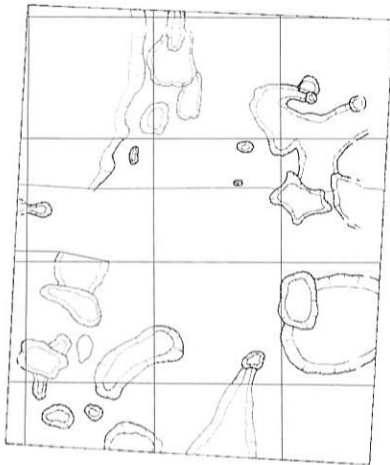
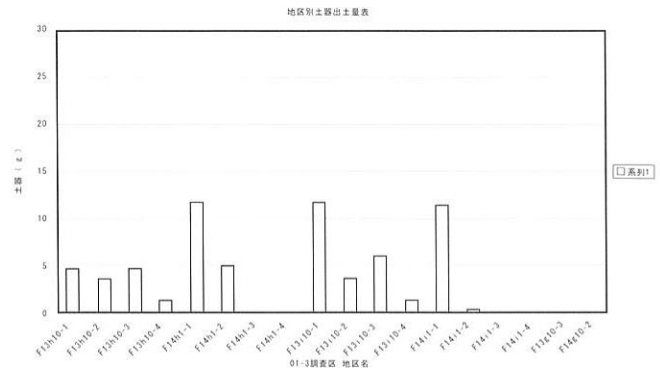
- 0g
- 10g以下
- 30g以下
- 30g以上〔1㎡中〕

図7.2 01-2調査区遺物出土率分布図

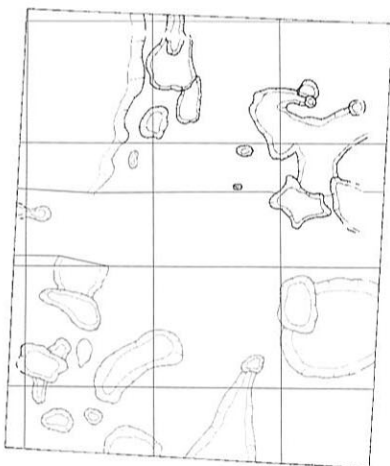
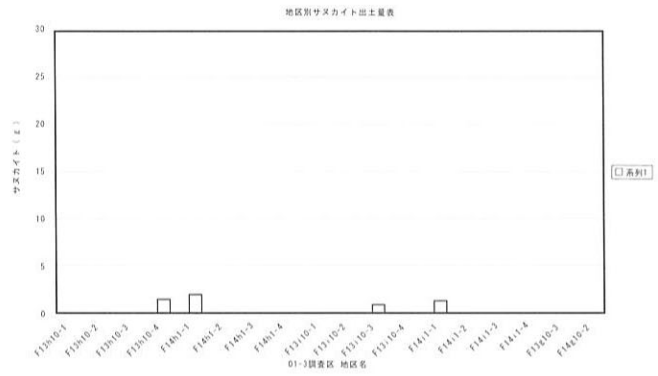




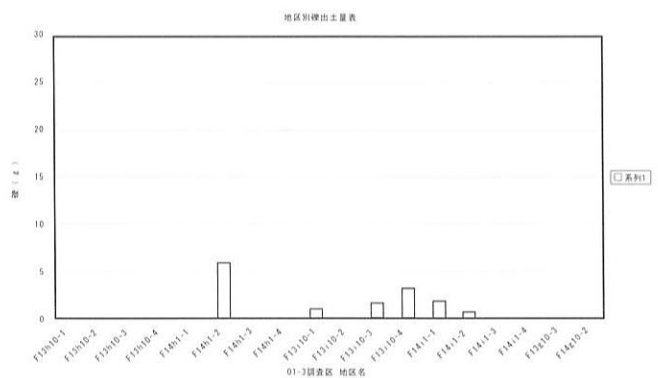
土器出土量



サヌカイト出土量

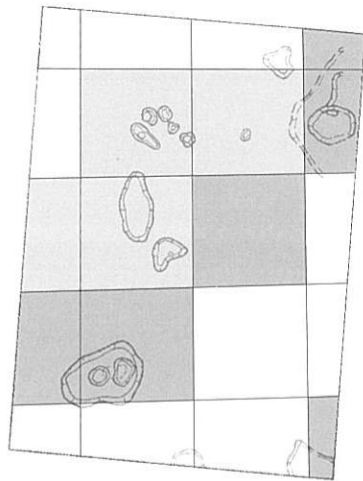


礫出土量

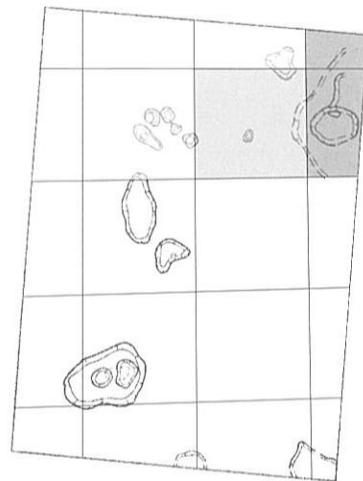
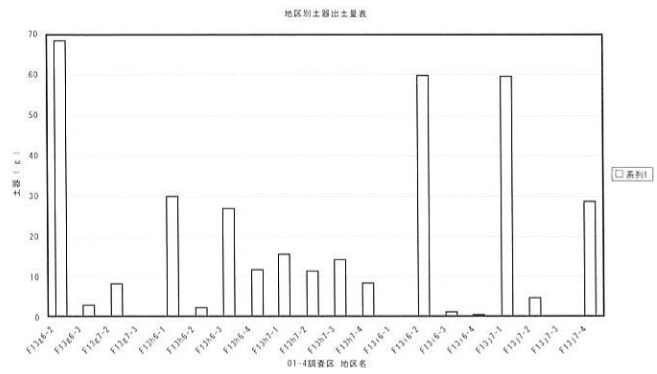


- 0g
- 10g以下
- 30g以下
- 30g以上 [1 m<sup>2</sup>中]

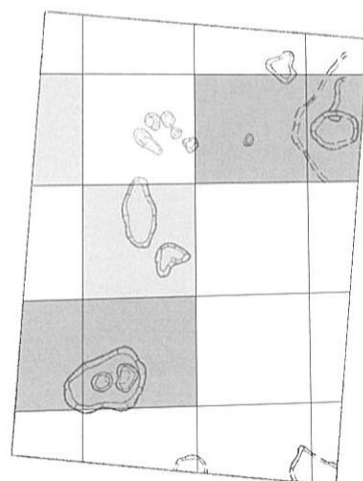
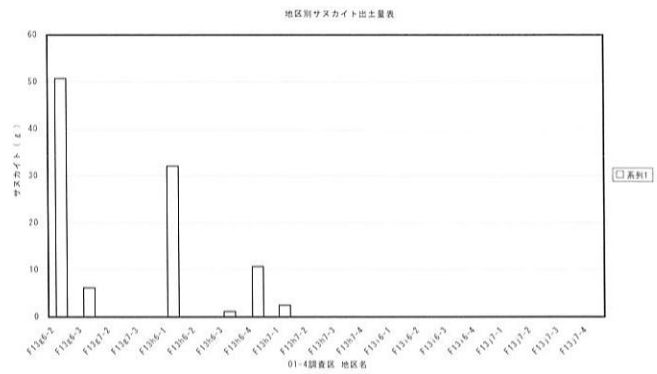
図7.3 01-3調査区遺物出土率分布図



土器出土量



サヌカイト出土量



礫出土量

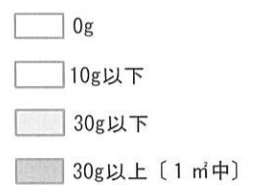
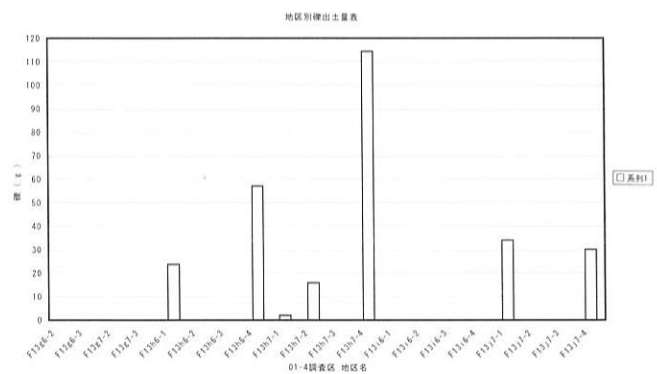
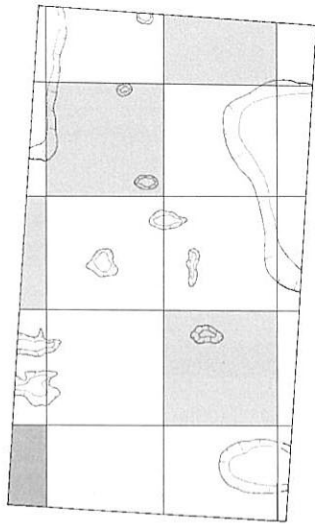
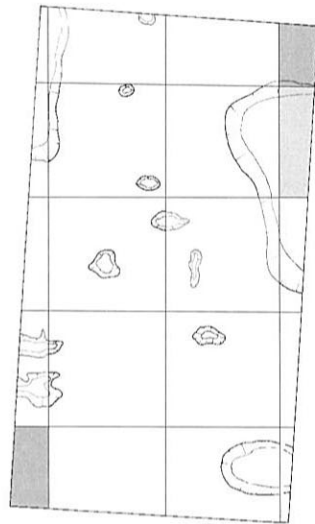
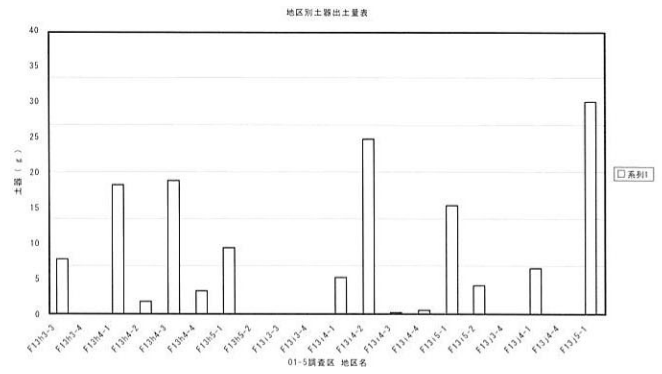


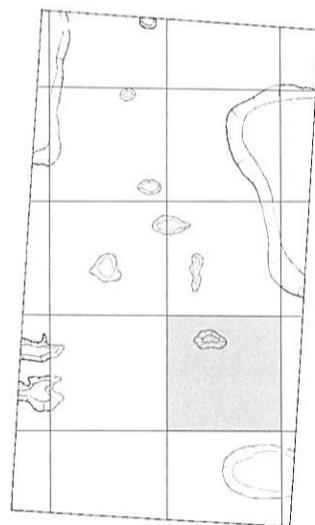
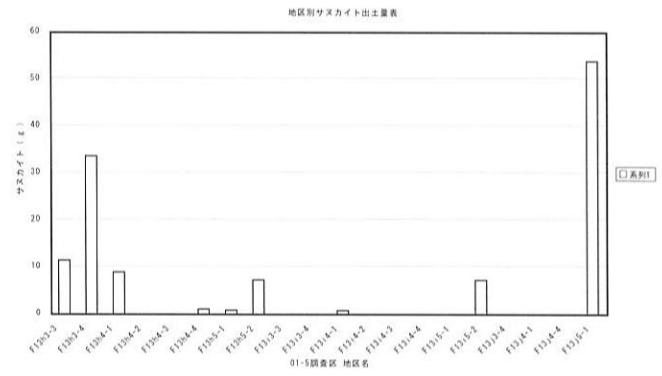
図7.4 01-4調査区遺物出土率分布図



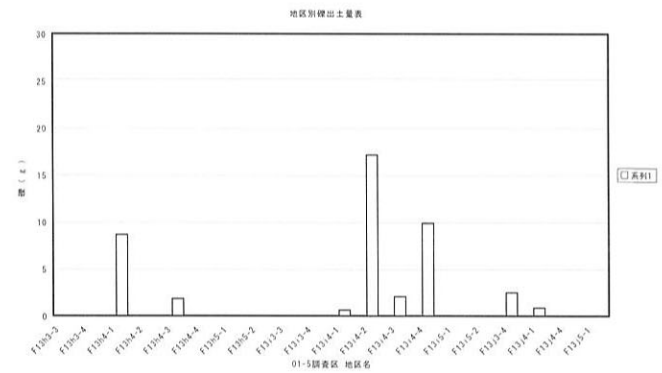
土器出土量



サヌカイト出土量



礫出土量



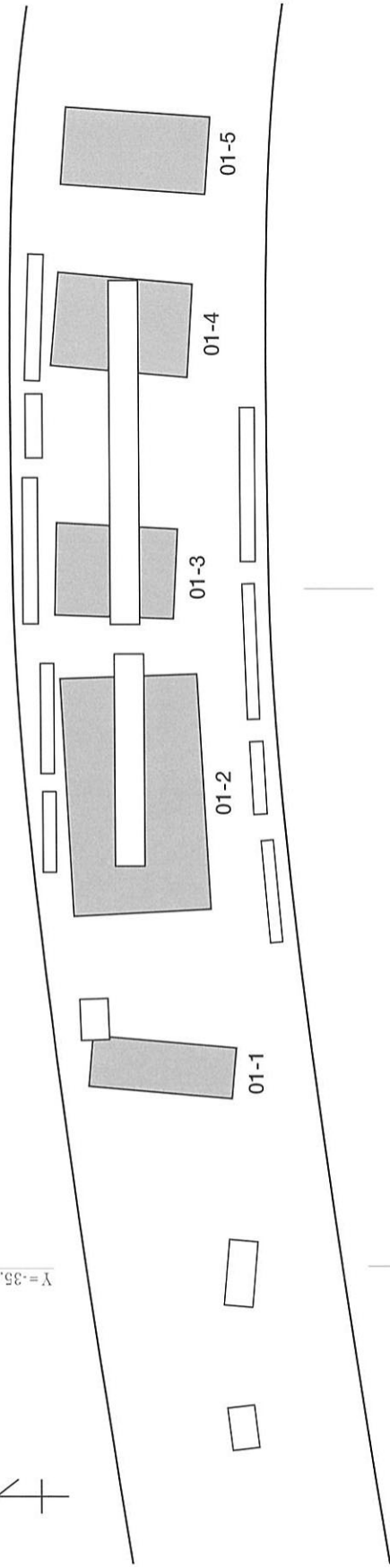
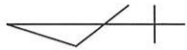
- 0g
- 10g以下
- 30g以下
- 30g以上 [1 m<sup>2</sup>中]

図7.5 01-5調査区遺物出土率分布図

Y = -35,200

Y = -35,300

Y = -35,400



□ 平成11・12年度試掘調査区  
 ■ 01-1～5調査区



	縄文 土器片	弥生 土器片	石核	石片	石片数/m <sup>2</sup>	土器片数/m <sup>2</sup>	弥生土器片数/m <sup>2</sup>	その他
01-1	82	188	10	4	0.493976	0.060241	0.024096386	
01-2	188	192	5	9	0.242894	0.000646	0.011627907	
01-3	192	347	6	8	0.741313	0.023166	0.030888031	
01-4	141	141	23	14	1.204861	0.079861	0.048611111	石棒2片(1点)
01-5	141	141	11	12	0.544402	0.042471	0.046332046	

01-1～5調査地区出土土器片・弥生土器片数(調査区別)

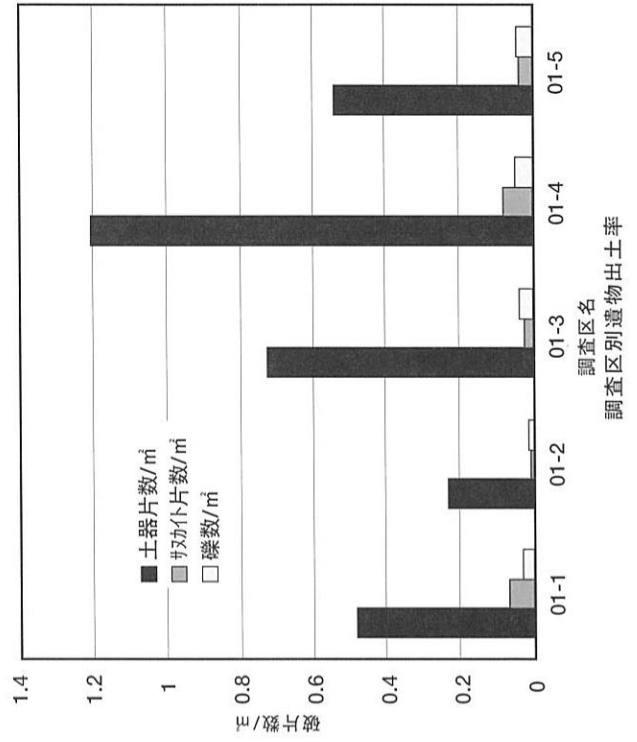


図7.6 調査区別遺物出土量分布図

## 第2節 出土自然木・炭化物の<sup>14</sup>C年代測定分析

株式会社 古環境研究所

(財)大阪府文化財調査研究センター 木嶋崇晴

### 西浦東遺跡における放射性炭素年代測定

#### 1) <sup>14</sup>C年代測定値

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。<sup>14</sup>Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

#### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

#### 3) 補正<sup>14</sup>C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

#### 4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

1 $\sigma$ (68%確率)および2 $\sigma$ (95%確率)は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 $\sigma$ ・2 $\sigma$ 値が表記される場合もある。

### 方法

試料No.	種類	前処理・調整	測定法
No.1	木片	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.2	木炭	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.3	木炭	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.4	木炭	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法
No.5	木炭	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

測定結果

試料No. No.	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 <sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	測定 (IAAA-)
No. 1	3760 ± 30	-26.8	3730 ± 30	1 $\sigma$ : cal BC 2200 ~ 2160, cal BC 2150 ~ 2120, cal BC 2090 ~ 2040 2 $\sigma$ : cal BC 2270 ~ 2250, cal BC 2210 ~ 2030	10162
No. 2	3700 ± 30	-25.1	3700 ± 30	1 $\sigma$ : cal BC 2140 ~ 2030 2 $\sigma$ : cal BC 2200 ~ 2160, cal BC 2150 ~ 2010, cal BC 2000 ~ 1970	10163
No. 3	4090 ± 30	-25.0	4090 ± 30	1 $\sigma$ : cal BC 2840 ~ 2810, cal BC 2670 ~ 2570, cal BC 2510 ~ 2500 2 $\sigma$ : cal BC 2860 ~ 2810, cal BC 2760 ~ 2720, cal BC 2710 ~ 2560, cal BC 2520 ~ 2490	10164
No. 4	3680 ± 30	-21.8	3740 ± 30	1 $\sigma$ : cal BC 2200 ~ 2130, cal BC 2090 ~ 2040 2 $\sigma$ : cal BC 2280 ~ 2250, cal BC 2210 ~ 2030	10165
No. 5	3650 ± 30	-23.6	3670 ± 30	1 $\sigma$ : cal BC 2140 ~ 2080, cal BC 2050 ~ 2010, cal BC 2000 ~ 1970 2 $\sigma$ : cal BC 2140 ~ 1950	10166

放射性炭素年代測定の結果について

01-1~5調査区からは、立木・倒木および炉跡を含めた遺構より炭化物が出土している。遺物包含層からは土器やサヌカイト等が出土するが、遺構内より遺物の出土が乏しい状態であった。遺構内に炭化物を含むものがあり、そこから得られたサンプルを放射性炭素年代測定にかけ、遺跡の年代判断の参考にするものである。

No.1 : 00-2調査区出土の倒木

サンプルNo.1は、00-2調査区のT.P.+29.2mの位置で有機物層中の倒木を検出した。この倒木の下層にあたる灰黄色粘質シルト層より北白川上層式期の土器片(図4.1)が出土している。出土した土器はこ

の1点のみであり、時期を判断するには物証的に乏しかった。01-1～5調査区の暗色土壌化層（⑦層）からも北白川上層式2期の土器が多数出土しており、遺物包含層の対応関係を確認する必要があった。測定の結果、00-2調査区の倒木の年代数値がB.P.3760±30年と⑦層下面検出の炉跡よりも古いものの、おおよそ暗色土壌化層と対応関係にあることが確かめられた。

#### No.2：01-4調査区（F13h6-1区）炉跡01-6・2層検出の炭化物

炉跡01-6の炭化物堆積層より採取したサンプルである。炉跡01-6は炭化物の混入密度等から使用頻度の高い炉であったと推測される。サンプルを採取した堆積層は最も炭化物の混入密度が高く、層中よりサヌカイト石核が出土している。このことから炉の周囲で石器製作を行っていた可能性がある。さらにこの炉跡内より舟形土器や小型石棒も出土しており、祭祀行為にかかわる炉跡として注目される。測定の結果、B.P.3700±30年の数値が得られた。

#### No.3：01-4調査区（F13g6-3区）⑨層-2検出の炭化物

⑧層下層の確認のために調査区の北辺にトレンチを設け、T.P.+29.2mで炭化物集中部を検出し、サンプルを採取した。サンプルを採取した炭化物集中部およびその周囲より明確な遺構掘り方は検出されず遺物も出土していない。この炭化物集中部の上層にあたる弱い土壌化層（⑨層-1）から摩滅した土器片が出土した。土器の色調はチョコレート色を呈すが、形状・文様を確認することはできなかった。測定の結果、炭化物の集中部はB.P.4090±30年の数値が得られた。また01-3調査区においても⑨層と対応する土壌化層を確認しており、少量の土器片が出土している。この土器片の時期は、炭化物の測定年代より縄文時代中期頃と考えられる。

#### No.4：01-4調査区（F13h7-1区）土坑01-18出土の炭化物

土坑01-18中央部の炭化物堆積層より採取したものである。当該土坑は炉跡01-6の西側に位置し、周囲に土坑や落込み状の遺構が集中する。当該土坑は、炉跡01-6に次いで炭化物がまとまって出土していることから炉跡と推測される。他の炉跡と異なる点は、炉心から掻き出された炭や灰がその周囲に広がるのに対し、当該土坑は周囲に広がらず遺構の掘方も良好に残る。おそらく炉の使用頻度が他の炉跡と比べ低かったことによるものであろう。測定の結果、B.P.3680±30年の数値が得られた。

#### No.5：01-2調査区（F13h6-1）炉跡01-139出土の炭化物

01-4調査区以外の調査区で炉跡と推定される遺構は、炉跡01-53と炉跡01-139のみである。炉跡01-139は他の炉跡と比して炭化物は少量であるが、まとまった状態で出土している。当該炉跡はその形状を比較的良好に残すものであり、先述した土坑01-18と同様に使用頻度の低い炉であったと推測される。01-2調査区は遺物の出土量が01-4調査区と比べ少ないことから人的活動頻度の低い領域であったと推測される。測定の結果、B.P.3650±30年の数値が得られた。

サンプルNo.2・4・5は炉跡と推定される遺構である。測定の結果、B.P.3700±30年～3650±30年の年代数値が得られた。また土器型式も北白川上層式2期の範囲でおさまることから、⑧層上面で検出した遺構は縄文時代後期前半に位置づけられる。

## 第8章 調査成果のまとめ

### 【縄文時代後期以前】

西浦東遺跡における人的活動の痕跡は縄文時代中期以後に形成されたと推定される。

01-4・3調査区においては、土壌化した⑨層から角閃石を多量に含む生駒西麓産胎土の土器片が出土した。摩滅が顕著なため、文様・器面調整等は不分明であり、量的にも極めて少ないこともあって時期の判断は困難である。ただ、第7章に述べたように、⑨層下層出土炭化物の炭素測定の結果、B.P.4090±30年の数値が得られた。これは、既往の学説においては、ほぼ縄文時代中期に対応する年代といえよう。⑨層上面より遺構の検出はできなかったが、縄文時代中期～後期前葉にこの地で生業活動が行われていた時期があったと推測される。⑨層以前に形成された堆積層については、今回調査を行っていないために人的活動の有無は不明である。ただし、機械掘削による下層確認作業を行った箇所では、⑨層より下位に土器包含層などを確認することはできなかった。

### 【縄文時代後期】

縄文時代後期になると、遺跡東部を中心に遺物の出土量がそれ以前に比べ明確に増加する。出土土器については、型式学的特徴から北白川上層式2期（千葉豊「緑帯文土器群の成立と展開」『史林』72巻6号1989年）の所産と考えられるものが大半を占める。当該期に関する既往の土器編年研究成果を考慮すると、考古学的には極めて短期間に包含層や遺構群が形成されたと推測できる。検出遺構については、多数の落込み状土坑とともに屋外炉とみられる炭化物を多く含む遺構が検出された。住居跡などは確認されないものの、これらの遺構群は生活に伴う調理作業や廃棄活動が行われた痕跡であろう。短期間における明確な住居痕跡を伴わない生活遺構の形成といった状況からは、当遺跡が長期定住集落ではなく、一時的な居留地であるキャンプサイトであった可能性を示唆している。

各遺構の詳細な状況は第6章に示しているが、幾つかの屋外炉については注目すべき共通の特徴が観察された。炉跡01-13・14、炉跡01-6、炉跡01-139、炉跡01-53などは、いずれも炭化物の集中する炉心が複数形成され、周囲にはそこから掻き出されたと考えられる炭化物を一定量含む土壌が広がるという属性を共有している。つまり、炭・灰の掻き出しを行いながら炉を使用し続けた結果、炉心の位置が移動していくことによって形成された遺構と考えられる。

特に、炉跡01-6は広範囲に炭化物を含む土壌が広がり、炉心も多数重複しながら形成されていた。最も中心的な施設と考えられ、その埋土からは、石棒や舟形土器などの祭祀関連遺物が出土している。炉跡01-6は単なる生活遺構だけではなく、当遺跡で活動した人間集団の核となる施設だったと想定できる。それを反映するように、01-1～5調査区のうち、炉跡01-6を検出した01-4調査区は最も遺物出土量が多く、炉跡も複数検出している。01-4調査区は、当遺跡の縄文後期集落の中心領域に相当すると理解できる。

また、当遺跡では、サヌカイト剥片・石核・石器類が多数出土している。これは、一時的（季節性？）行動領域として機能した当遺跡では、生業活動の一環として打製石器製作が行われていたことを示している。それ以外の活動内容や生業については、不明な点が多い。しかし、当遺跡における遺構・遺物の分布域が旧石川を形成する流路帯の縁辺に位置することから、淡水産魚介類の捕獲・採集が活動目的の一つであった可能性は高い。小型のサヌカイト製剥片石器が多量に出土するにもかかわらず、石鏃などの明確な狩猟用石器が1点も出土していない事実は、特定の生業に比重がおかれていたという推定を首



肯する。ただし、いくつかの遺構埋土土壌の水洗作業を試みたにもかかわらず、明確な漁具や魚類遺体・貝類などが全く出土しないため、具体的生業の断定は難しい。

もう一点、縄文時代後期に関する今回調査の成果として挙げられるのは、出土炭化物の放射性炭素年代分析の結果である。北白川上層式土器に伴う各炉跡の炭化物については、分析の結果、いずれもB.P.3700年前後の測定値が得られている。また、それを前後する堆積土層からの出土炭化物の分析結果についても測定値が逆転するような矛盾はない。このことから、これらの分析結果は縄文時代後期における縁帯文土器様式の年代の一定点を示す例として評価できるのではないかと考えられる。

#### 【弥生時代以後】

弥生時代以後の遺構・遺物は、遺跡西部に相当する98-1調査区から検出されている。ただし、その大半は河川に平行あるいは直交する小規模な溝群である。おそらく、水田経営のための河道からの取排水路だったと想定できる。これらの溝群の時期は弥生時代中期～古代にわたり、継続的・断続的に水田域として当遺跡が機能していたことを示している。ただ、古墳時代後期に形成された柱穴がいくつか検出されていることから、6世紀に一時的に居住施設が形成された可能性は考慮する必要がある。

また、明確な遺構は検出できなかったものの、遺跡全域にわたり、現代耕土直下に古代土器を含む土壌化層が確認された。このことは、耕作地あるいは居住域の縁辺領域として、古代以後には継続的に当遺跡の土地利用が行われていたことを類推させる事実である。今後、当遺跡において、他地点で発掘調査が行われる場合は、古代を中心とする生活関連遺構が検出される可能性を考慮する必要がある。





98-1調査区北半部の遺構群（南西から）



98-1調査区北半部の遺構群（西から）



98-1調査区南半部の遺構群（南西から）



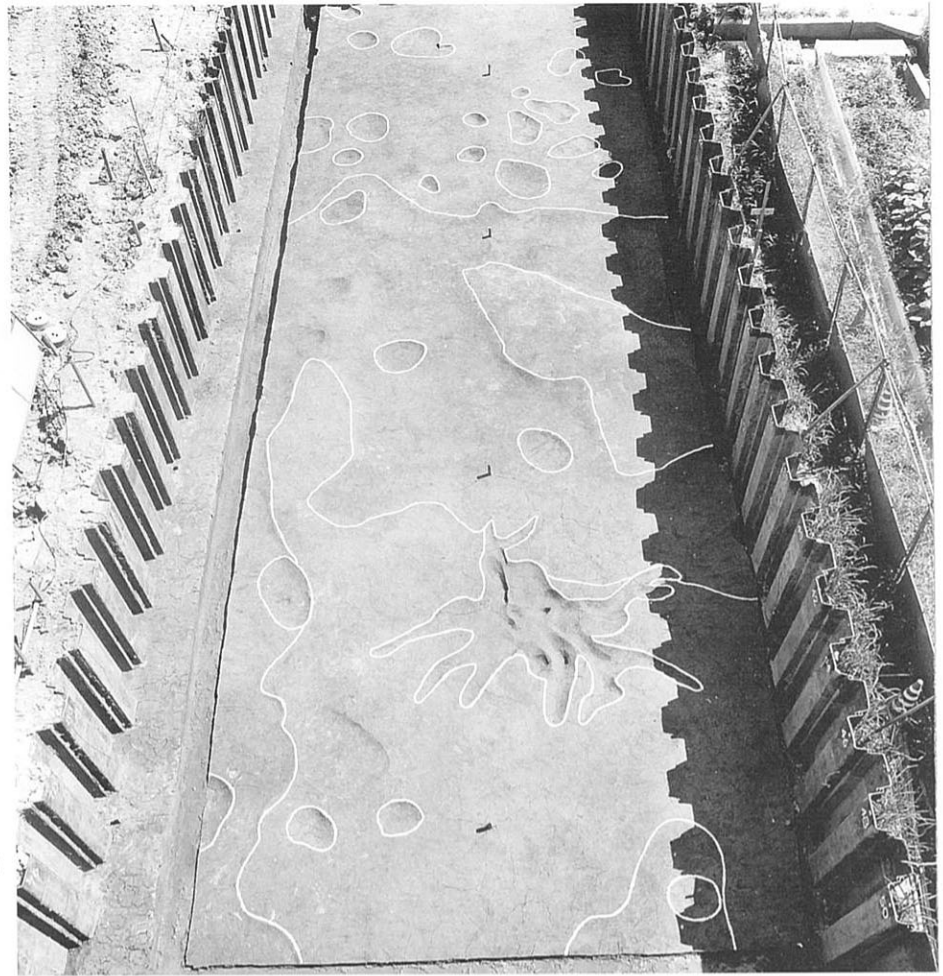
98-1調査区南半部遺構群（北西から）



98-1調査区柱穴98-8土器出土状況（南から）



98-1調査区柱穴98-8土器出土状況（上から）



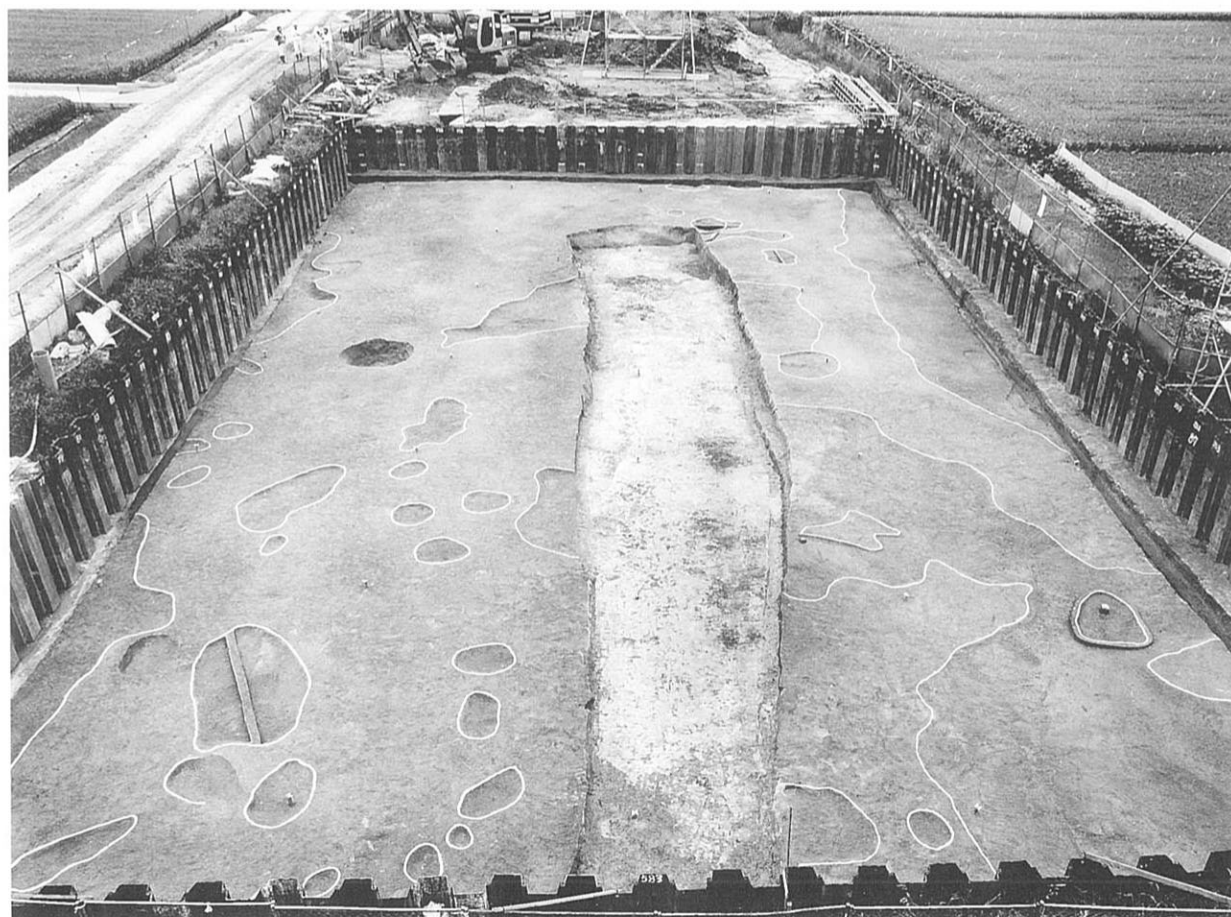
01-1調査区  
⑧層上面の遺構群（北から）



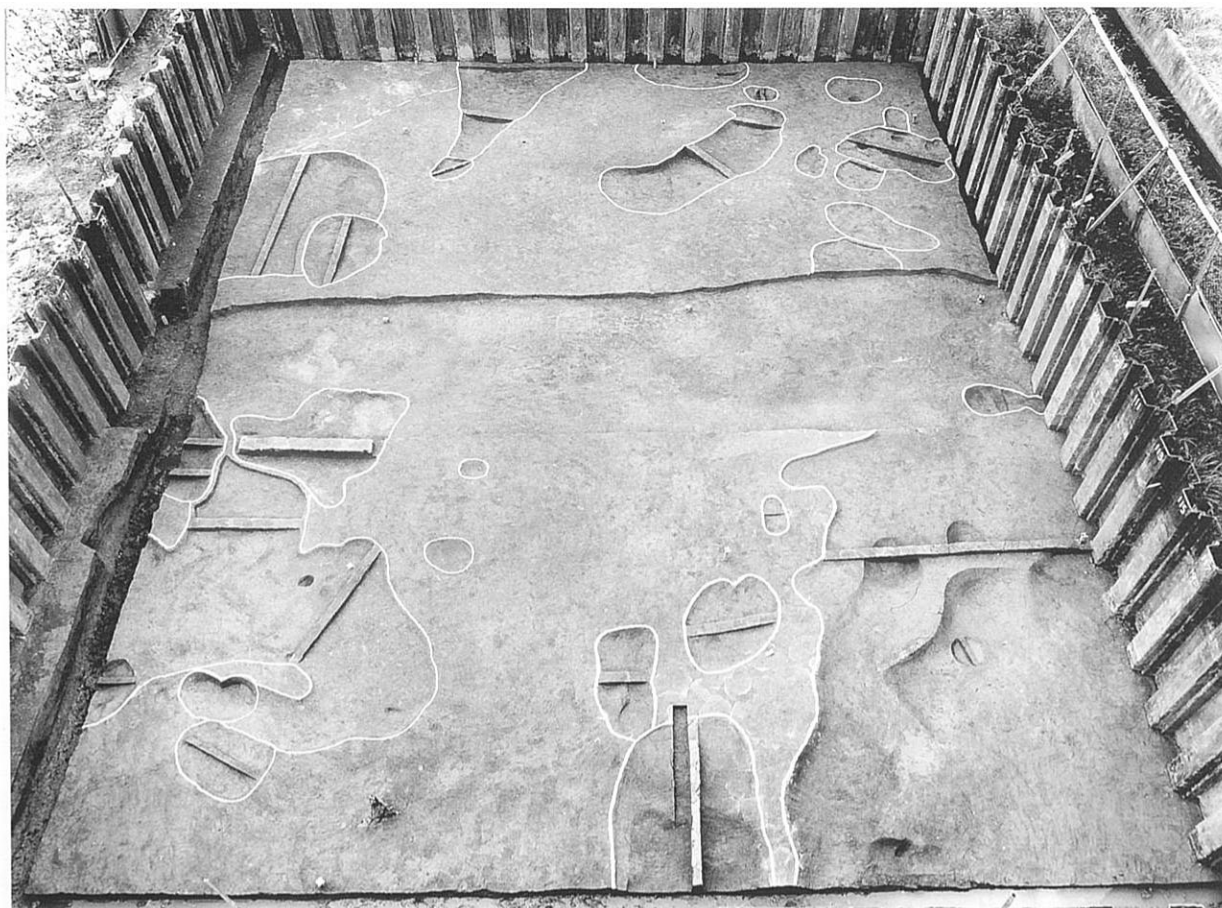
01-5調査区⑧層上面の遺構群（北から）



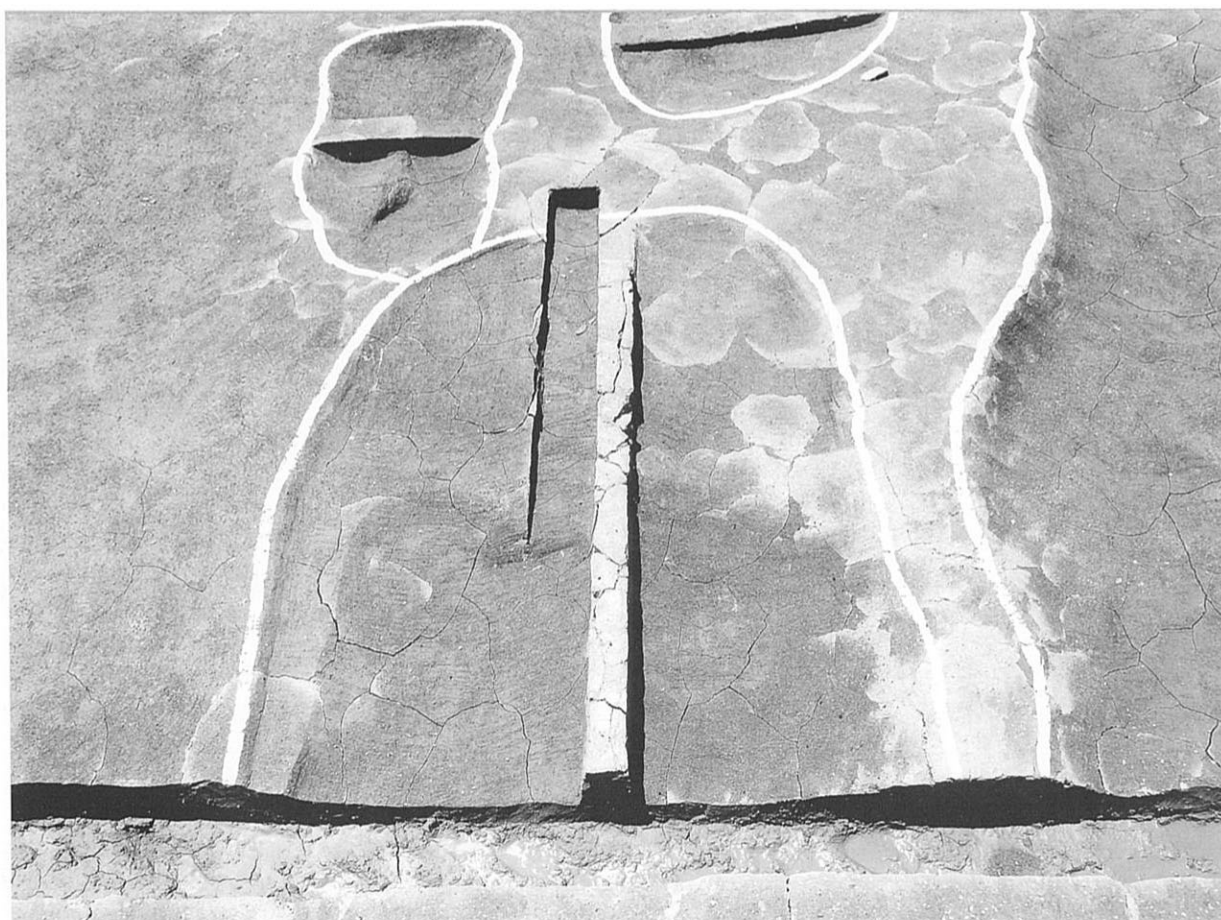
01-2調査区⑧層上面の遺構群（西から）



01-2調査区⑧層上面の遺構群（東から）



01-3調査区⑧層上面の遺構群（北から）



01-3調査区炉跡01-53（北から）





01-4調査区⑦層上面の遺構群（東から）



01-4調査区⑧層上面の遺構群（北から）



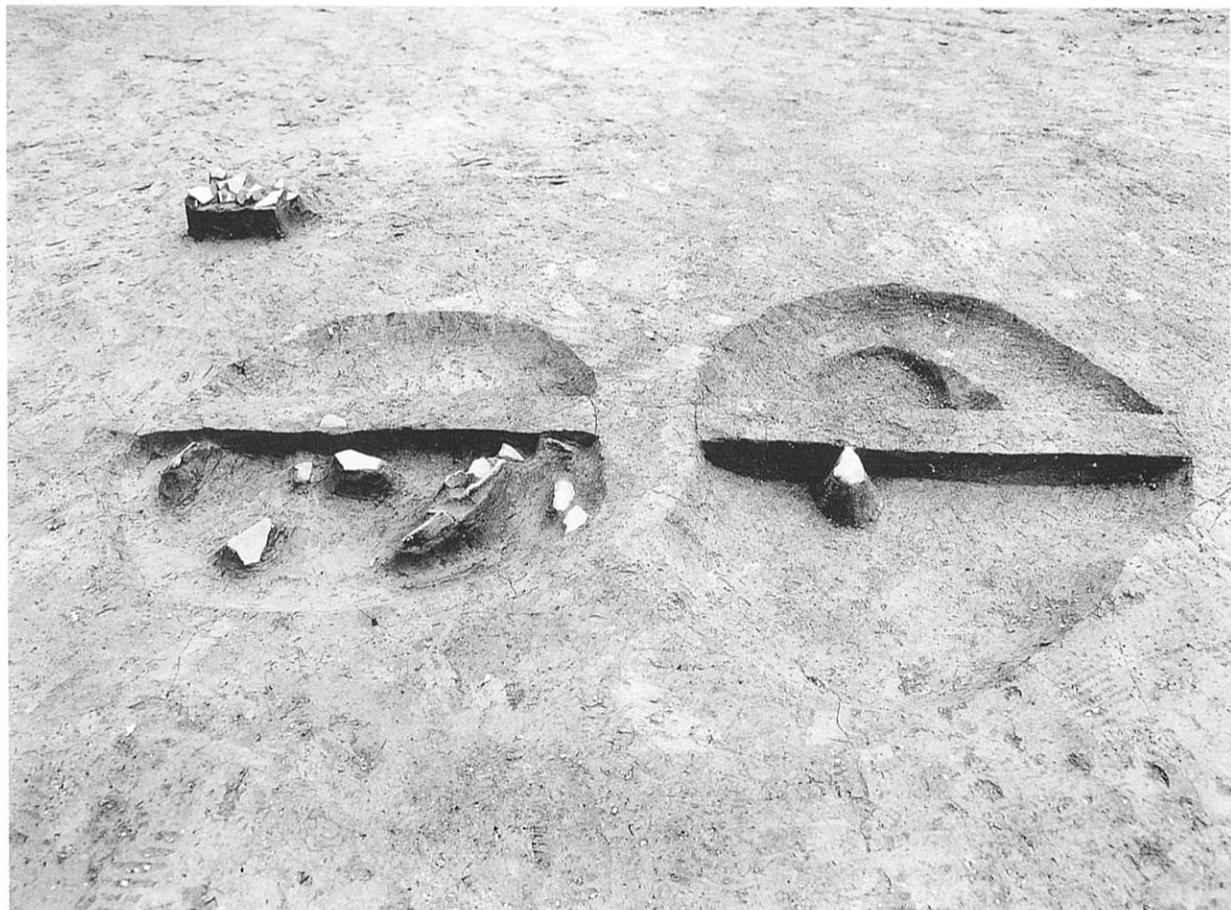
01-4調査区炉跡01-6（東から）



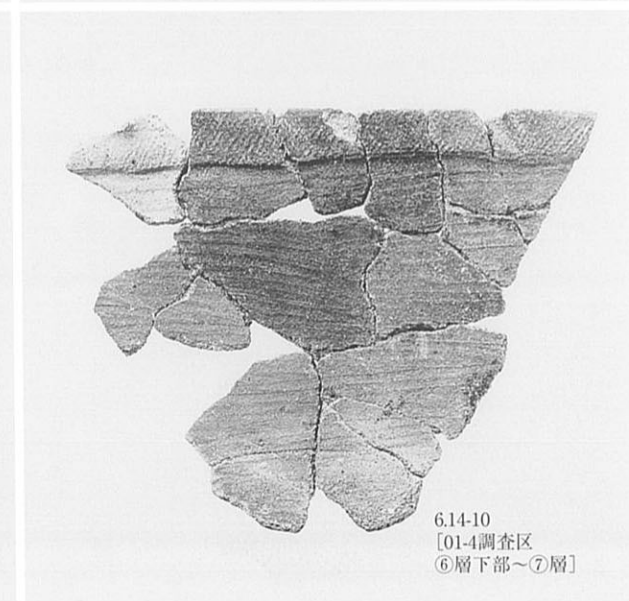
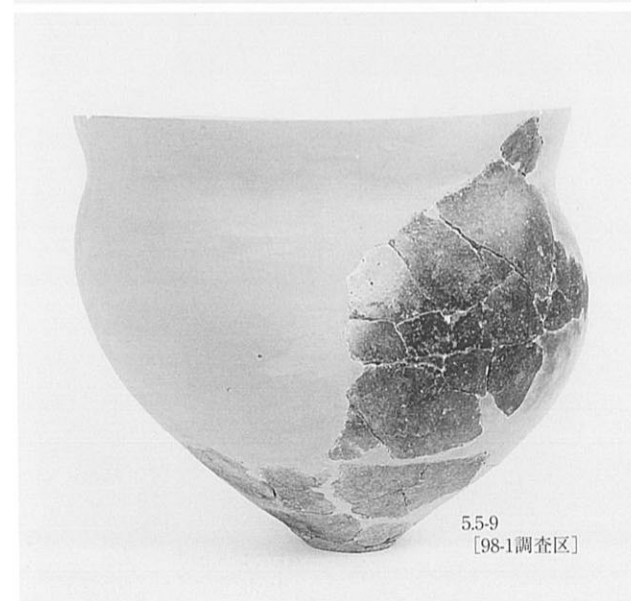
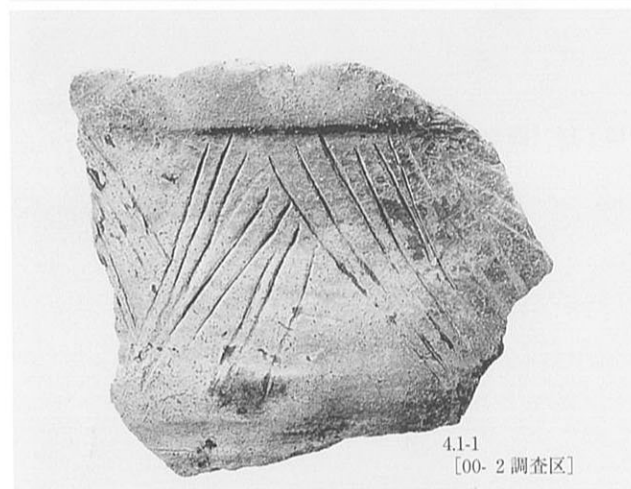
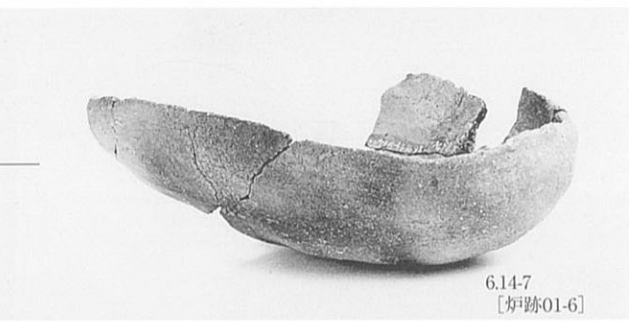
01-4調査区炉跡01-6中心部（西から）

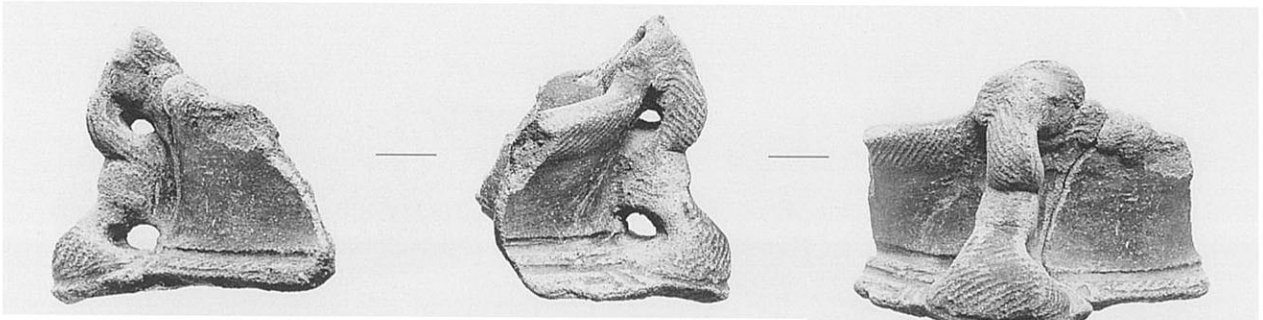


01-4調査区炉跡01-13・14（西から）

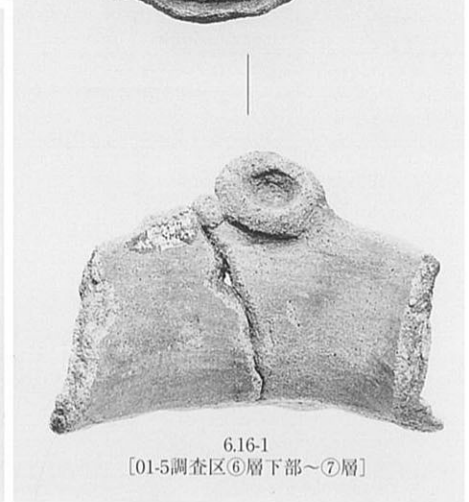


01-4調査区炉跡01-13・14（南から）

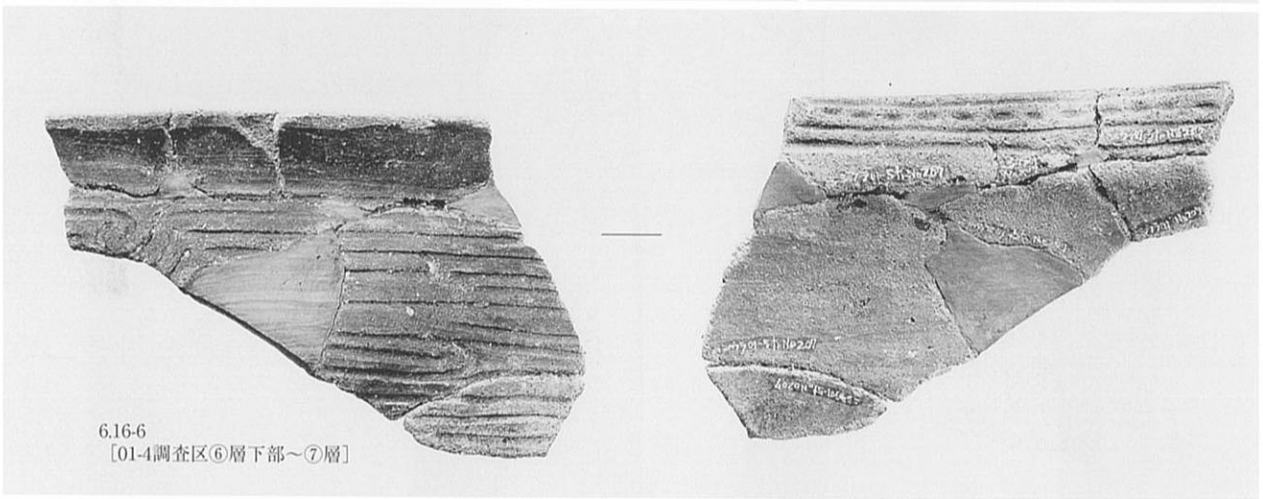




6.16-17  
[01-4調査区  
⑥層下部~⑦層]



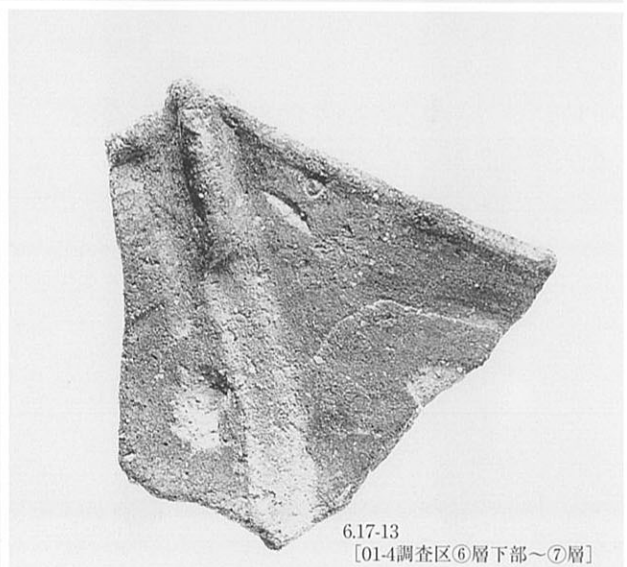
6.16-1  
[01-5調査区⑥層下部~⑦層]



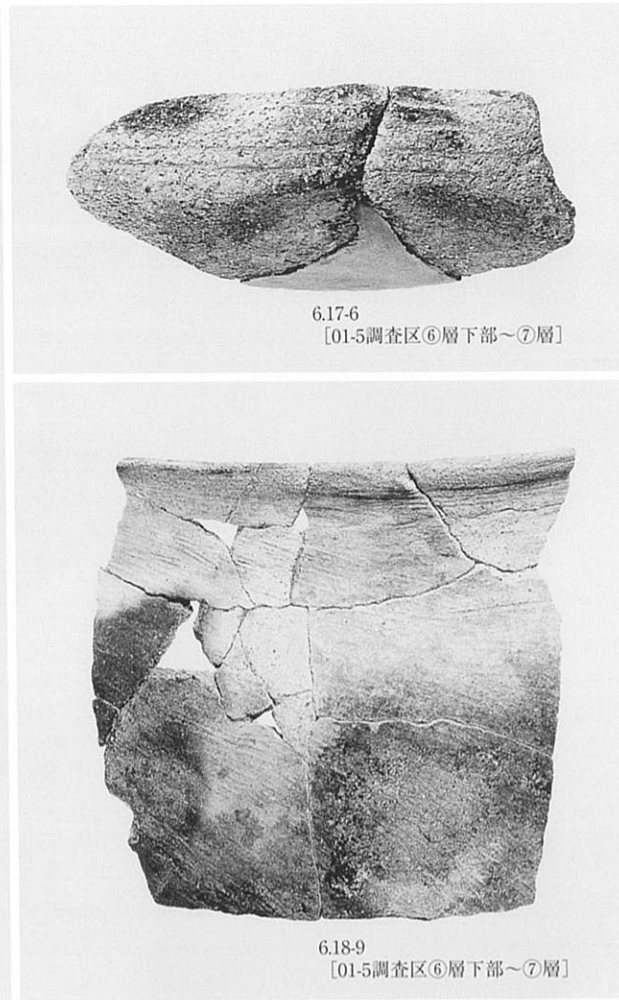
6.16-6  
[01-4調査区⑥層下部~⑦層]

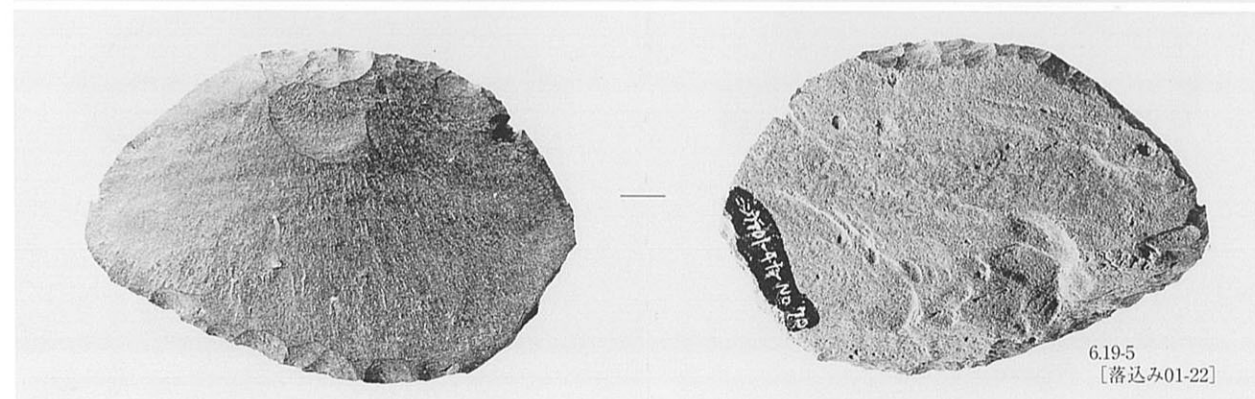
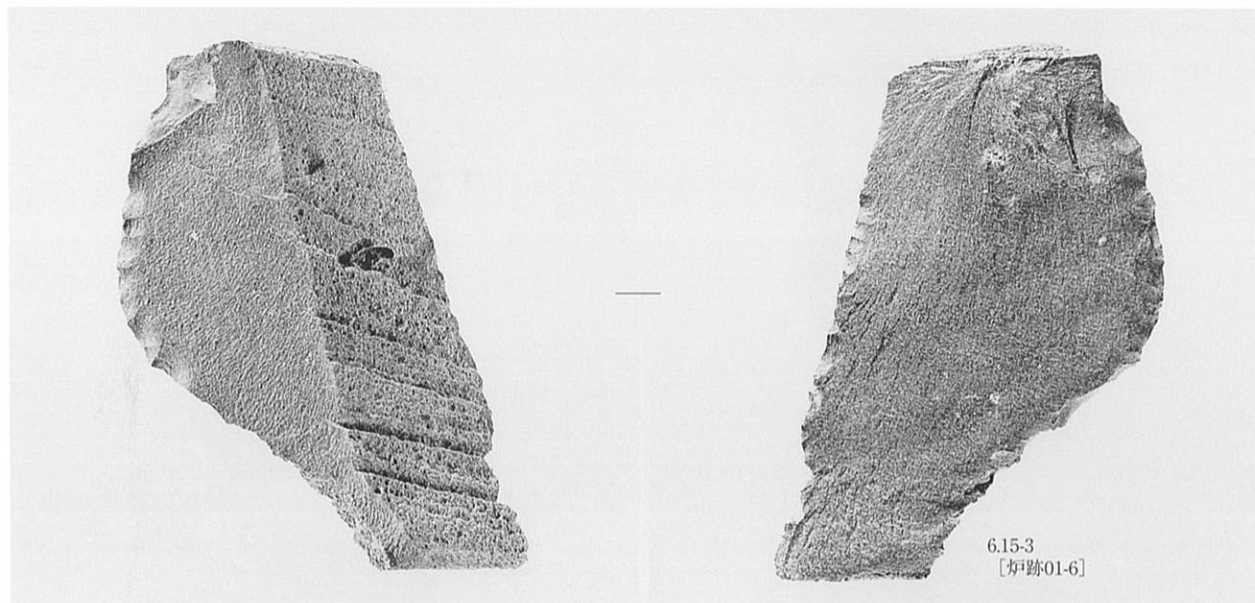
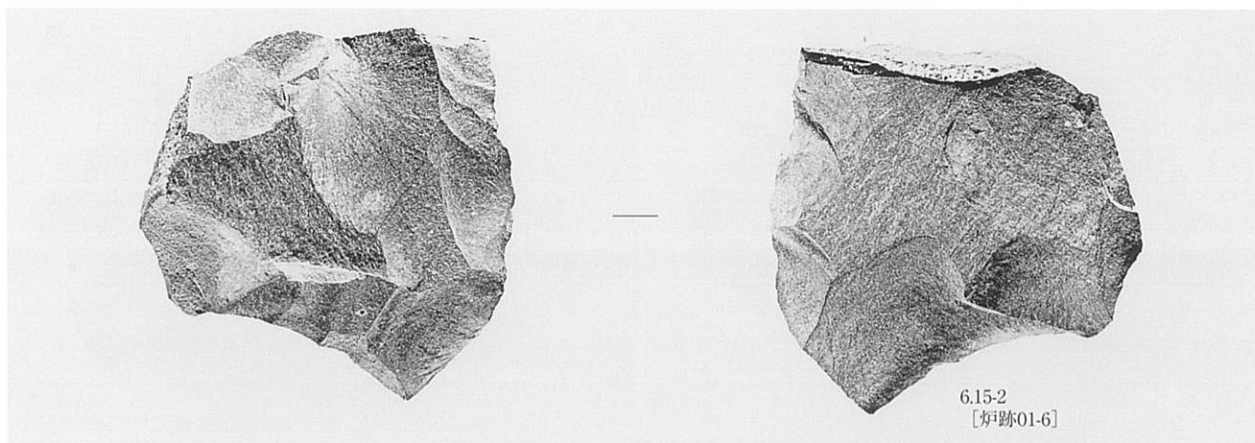


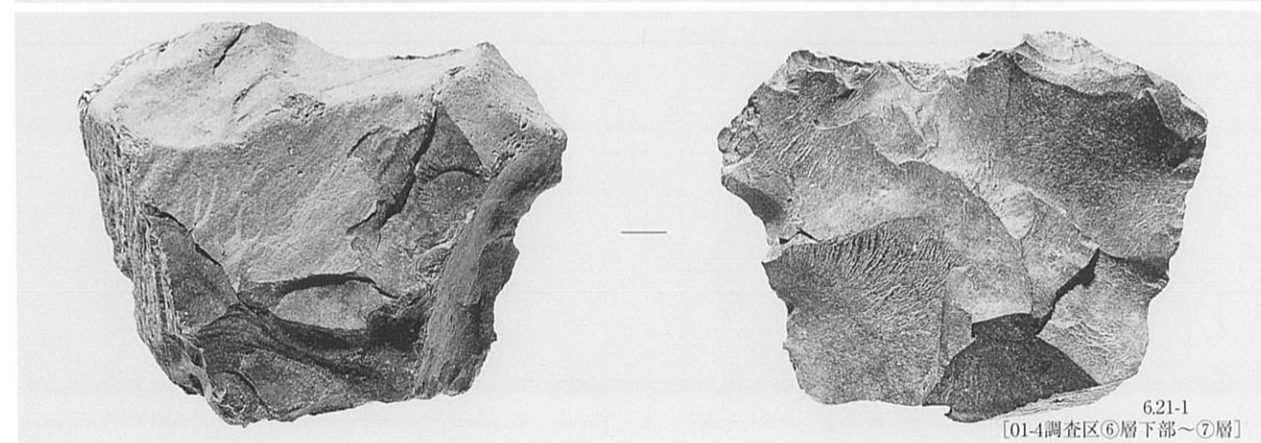
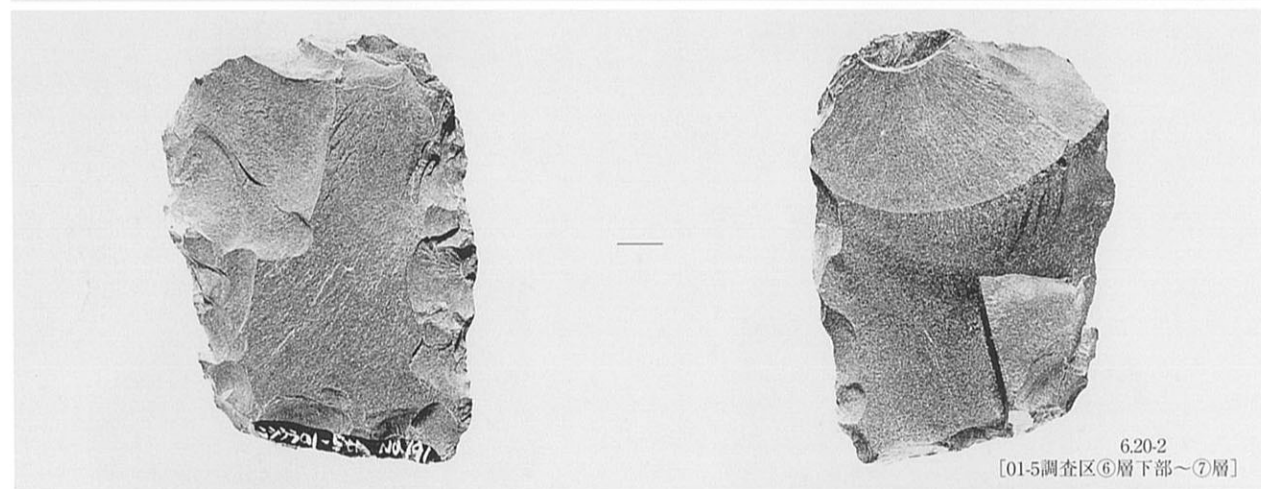
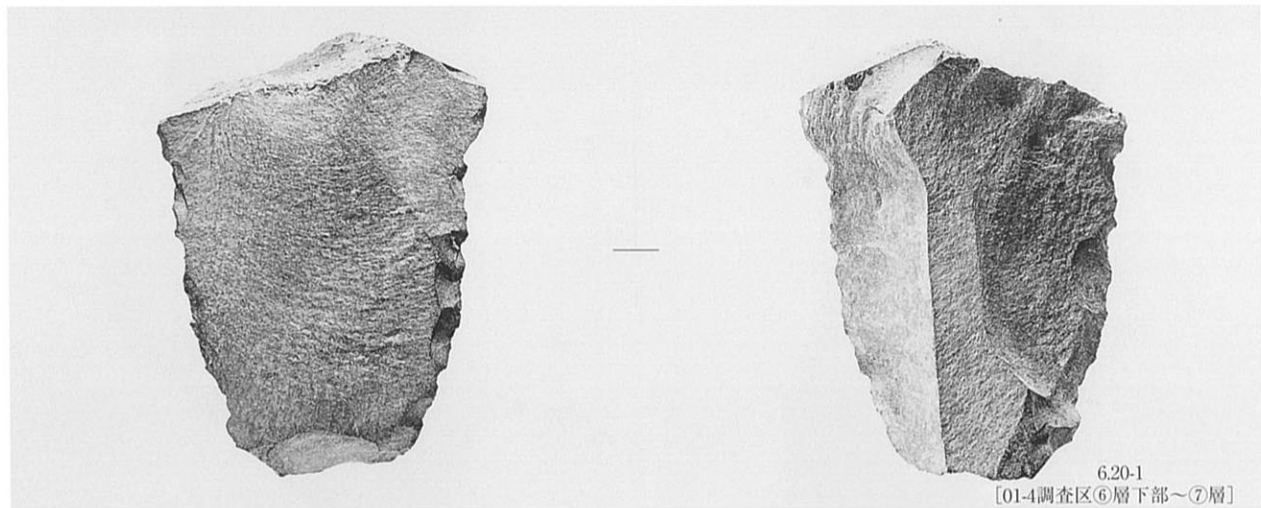
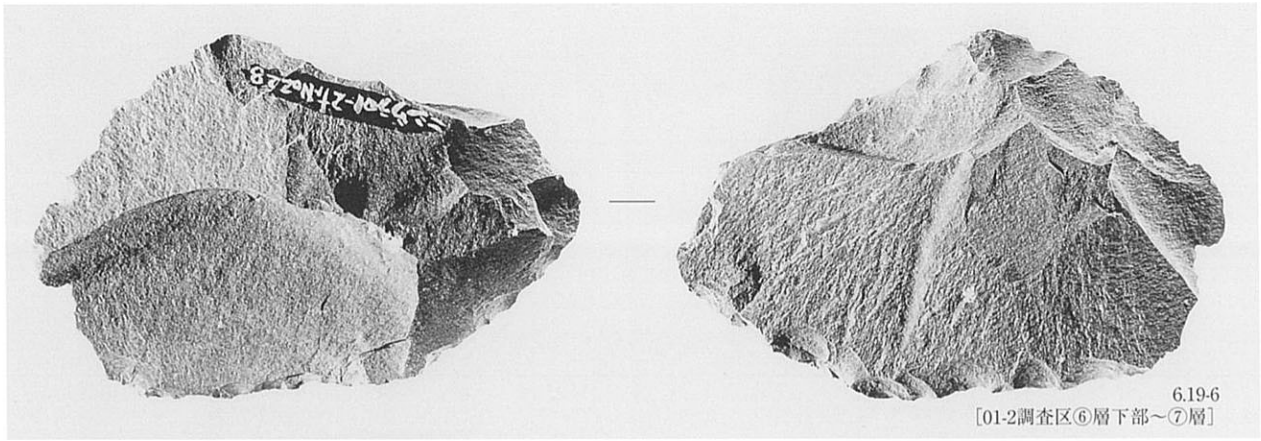
6.17-2  
[01-5調査区  
⑥層下部  
~⑦層]



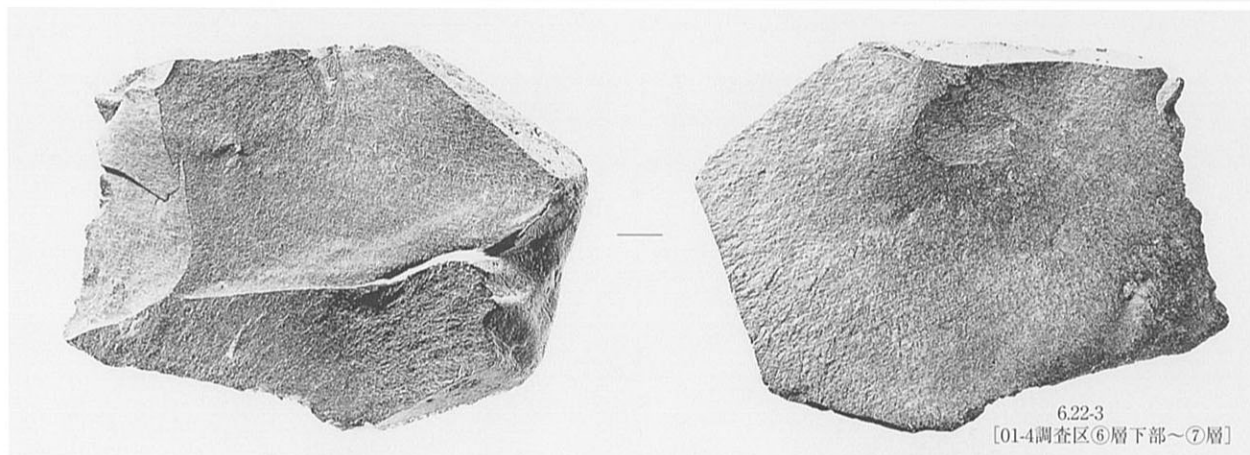
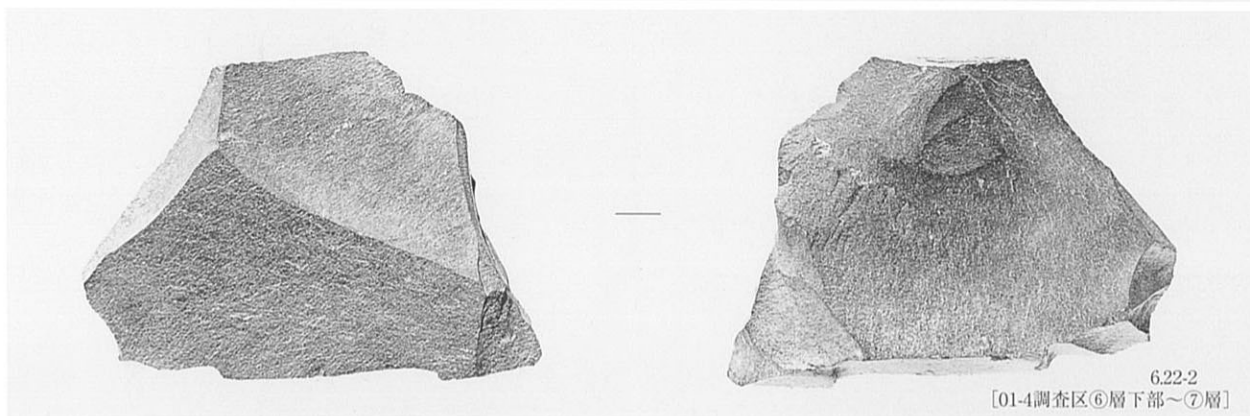
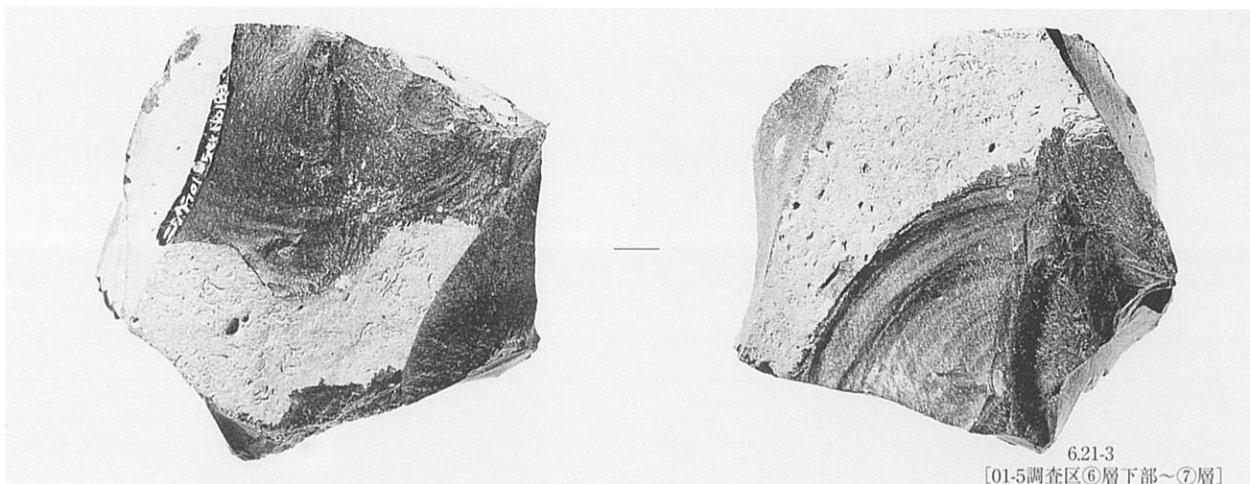
6.17-13  
[01-4調査区⑥層下部~⑦層]













# 報告書抄録

ふりがな	にしうらひがしいせき							
書名	西浦東遺跡							
副書名	南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編集者名	寺川史郎・木嶋崇晴・若林邦彦							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072(299) 8791 / FAX072(299) 8905							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしうらひがしいせき 西浦東遺跡	おおさかふはびきのし 大阪府羽曳野市 にしうら・ふるいち 西浦・古市	27222	134	34度	135度	1998.1.13 ～ 2001.10.19	6920m <sup>2</sup>	南阪奈道路 建設に伴う 事前の埋蔵 文化財の調 査
				31分	36分			
				58秒	39秒			
				X	Y			
				-162,560	-35,680			
				～	～			
				-162,710	-35,210			
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西浦東遺跡	集落	縄文時代後期	屋外炉・落込み		縄文後期土器・サカト石器・剥片・石核・礫器・石棒			
		弥生時代中期～古代	溝・柱穴		弥生土器・土師器・須恵器			

(財)大阪府文化財調査研究センター 調査報告書 第76集

## 西 浦 東 遺 跡

- 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書 -

発行年月日 / 2002年3月29日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL072(299)8791・FAX072(299)8905

印刷・製本 / 明新印刷株式会社

